

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（214）

鶴丸城跡保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

か ご しま つる まる じょうあと  
**鹿児島（鶴丸）城跡**

（鹿児島市城山町ほか）

— 北御門跡周辺・御角櫓跡周辺・能舞台跡ほか —

2022年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



軒丸瓦·軒平瓦·軒棟瓦·小菊瓦



## 序 文

鹿児島城跡は、慶長 6（1601）年頃に初代薩摩藩主、島津家久（18代当主）により築かれた城で、別名鶴丸城と呼ばれています。令和 2（2020）年 4 月、御楼門が再建され 400 年にわたる鹿児島城跡の歴史の中でも非常に大きな画期を迎きました。

鹿児島城跡では、今まで度重なる建物の消失や再建、石垣の崩落や修復を繰り返してきました。近年では、石垣の孕みや亀裂等がみられるようになっており、史跡の保全を目的として平成 24 年度から平成 26 年度の 3 か年にわたり、石垣の現況基礎調査、石垣保全測量等の鹿児島城跡の石垣整備事業を実施してきました。この結果を受けて、必要な箇所については修復工事を目的とした鶴丸城跡保全整備事業が実施されることとなりました。

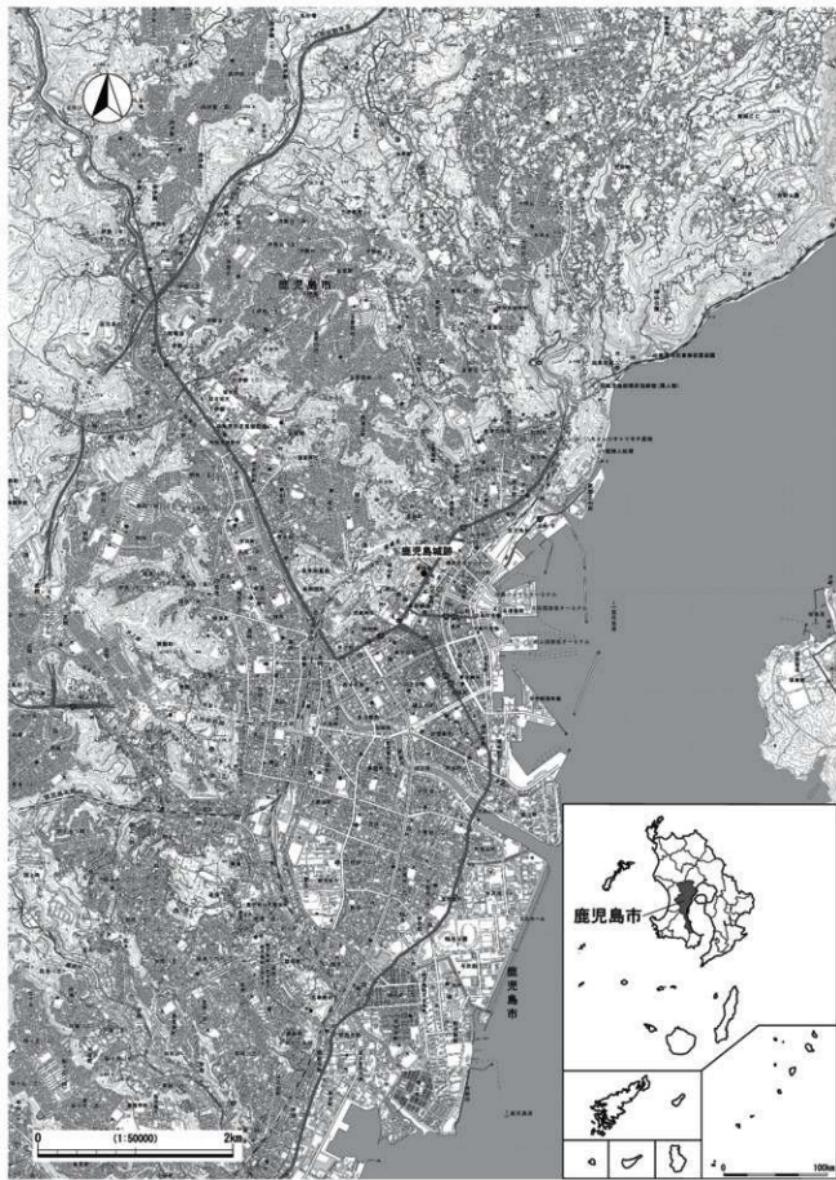
本書は、平成 26 年度～30 年度、令和 2 年度の鶴丸城跡保全整備事業に伴う発掘調査の成果を記録した発掘調査報告書です。部分的な調査にも関わらず、能舞台跡や外御庭跡の井堰を伴う堀、本丸内御庭の庭園状造構が確認され、鬼瓦をはじめとする瓦や陶磁器類等、江戸時代の城内の様子を物語る遺物が多量に出土しました。これらの考古学的成果は、これまで知られていなかった鹿児島城跡の城としての機能・構造を解明し、既存の文献や絵図等を裏付ける基礎資料となるものです。本書が未来につながる鹿児島城跡の保全整備と、これまで明らかにされていなかった地城史の再発見やまちづくりの一助となれば幸いです。

結びに、円滑な埋蔵文化財発掘調査に御理解・御協力をいただいた地域の皆様、御支援・御協力いただいた関係者の皆様・関係機関に厚く御礼を申し上げます。

令和 4 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所長 中原 一成

報告書抄録



鹿児島（鶴丸）城跡位置図 ( $S=1:50,000$ )

## 例 言・凡 例

- 1 本書は、平成 26 ~ 令和 2 年度に実施した鶴丸城跡保全整備事業に伴う鹿児島（鶴丸）城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県教育庁文化財課が調査主体となり、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した（以下、県立埋文センター）。
- 3 整理・報告書作成作業は、平成 28 ~ 令和 2 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本遺跡は通称「鶴丸城」と呼ばれる場合もあるが、他の機関等で使用している場合等を除き、本書では文献にある「鹿児島城」を使用する。
- 5 本書で用いる「魔摩藩」は「薩摩國」、「大隅國」、「日向國の一部」を含めた広義の意味でのものとして用いる。
- 6 発掘調査における実測図作成は調査担当者が行い、一部は株式会社九州文化財研究所、新技術コンサルタント株式会社に委託して作成した。
- 7 発掘調査における写真撮影は調査担当者が行い、空中写真撮影は株式会社ふじた、九州航空株式会社に委託して撮影した。
- 8 発掘調査成果の内容及び土層の色調等の表現については、原則として現場担当者による注記を用いた。また、土色の記述にあたっては、「新版 標準土色誌」、陶器胎土色は「標準色カード 230」（いずれも日本色研事業社株式会社発行）に基づき、掲載した。
- 9 本書の地図は、国土交通省国土地理院発行の「鹿児島（縮尺 1/50,000）」「鹿児島北部」（縮尺 1/25,000）の地形図を複製し、第 1 図は国土交通省地理院発行の「鹿児島」（縮尺 1/200,000）の地図を複製して使用した。
- 10 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。
- 11 調査区を 5m 間隔のマス目（グリッド）で区切り、調査を行った。グリッドは御舟櫓南東角を基準として東（国道 10 号線）側の右石に平行に軸及びグリッドを設定した。
- 12 本書で使用した方位は北緯である。
- 13 各遺構図で用いたトーンについては、各図面に凡例を示す。
- 14 遺物への注記は、遺跡名をアルファベット 3 文字で「KSJ」と表し、出土地点・出土層等を記入した。
- 15 掲載遺物番号は通し番号であり、本文、挿図、表及び図版の遺物番号と一致する。
- 16 整理・報告書作成作業における遺物の実測図・トレース図作成に係わる職務は、黒木梨絵・西野元勝・馬龍亮道が会計年度任用職員（整理作業員）の協力を得て行った。また、陶器部の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム、株式会社九州文化財研究所、株式会社島田組に委託し、黒木・西野が監修した。
- 17 黒瓦の同定・分類は金子智（株式会社乃村工藝社）が行い、瓦全般に関する指導・助言及び玉穂をいただいた（第 V 章第 5 項）。
- 18 瓦の種別分類、瓦製作地同定、軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・小菊瓦の觀察表作成は金子の監修をもとに西野・山下智沙子が行い、刻印分類・分類表作成は山下・西野が行った。
- 19 瓦の觀察表において、以下の簡略表現を用いた。
- 瓦径 → 瓦当直径、瓦径 → 文様区直径、内径 → 主文様直径  
芯径 → 花芯直径、瓦厚 → 瓦当厚さ、体幅 → 体部幅  
曳行 → 体部の曳行き
- 観察表における「掲載」項等では、既刊の発掘調査報告書における報告書名を以下のように略し、併せて掲載番号等を示した。
- 本丸：県（26）「鹿児島（鶴丸）城本丸跡」1985
- 二丸：県（60）「鹿児島（鶴丸）城跡二之丸遺物編」1991
- 市二丸、G：市（28）「鹿児島（鶴丸）城二之丸跡 G 地点」2009
- 橋門：県（205）「鹿児島（鶴丸）城跡 - 御橋門跡周辺」- 2020
- 大迫：県（211）「鹿児島城跡（大迫 h 馬場・火除地）」2021
- 総括：県（215）「鹿児島県（鶴丸）城跡 - 総括報告書」- 2022
- 保存活用計画：「鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画」2018
- 修景整備報告書：「鹿児島（鶴丸）城跡修景整備報告書」2019
- 20 瓦の分類について
- 出土した瓦は、 $40\text{cm} \times 60\text{cm} \times 15\text{cm}$  の容量のコンテナ約 2,000 箱に及ぶ量であり、その大半は平瓦・丸瓦および桟瓦の細片である。本報告では、瓦当文様を有する軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・小菊瓦について文様により分類を行い、各分類のうち遺存状態の良好なものを図示した。なお、これらのうち文様の一部分しか確認できない破片資料については、一部特徴的なものを除き、別分類と思われるものについても分類番号を設定していない。以後の分類の増加等により全形が判明した際、改めて分類が設定されることが期待される。
- 今回分類を行なった他の瓦種については、遺存状態の良好なものおよび特徴的なものを図示した。以下に瓦の分類基準、ならびに軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・小菊瓦の分類番号を右欄に示す。
- 21 掛け縄の縮尺は、挿図ごとに示した。基本的に瓦は  $5/4$ 、陶磁器は  $S=1/3$ 、木器は  $1/4$ 、鉄製品は  $1/2$  とした。
- 22 遺物観察表で示した部位ごとの計測値は欠損している場合（）を用いる。
- 23 出土遺物の写真撮影は、西野・西園勝彦・較島えりなが行った。
- 24 本書にかかる自然科学分析は、瓦の粘土分析（蛍光 X 線分析及び薄片顕微鏡観察）は株式会社パリノ・サークルに、樹種同定・放射性炭素年代測定、花粉分析及び植物珪酸対分析、土製品の蛍光 X 線分析または薄片顕微鏡観察は株式会社古環境研究所に委託し、山下が監修した。
- 25 木製品・鉄製品は、県立埋文センターで保存処理を行った。
- 26 本遺跡は「鶴丸城跡」と呼称されるが、正式名称は「鹿児島城跡」である。ただし、県指定史跡の範囲は「鹿児島（鶴丸）城跡」となっているため、県史指定史跡の範囲およびそれに準じる範囲には「鹿児島（鶴丸）城跡」を。それ以外の範囲に関しては「鹿児島城跡（地区名）」を用いる。
- 27 本書の編集は西野・黒木・山下が行った。執筆分担は以下のとおりである。
- 第 I 章 山下・西野、第 II 章・第 III 章 西野・鶴菜・三堀・山下、第 IV 章 各分析担当者、山下、第 IV 章 西野・鶴菜・三堀・浅田剛士、金子
- 28 発掘調査・整理作業にて御指導・御助言をいただいた方々は以下のとおり。
- 揚子園、後川道夫、鈴坂徹、池嶋耕一、大木公彦、太田秀春、小野健吉、金子智、上村俊雄、河崎義久、岸野純一、北垣聰一郎、北村良介、北野博司、齋藤達志、鳴谷和彦、高橋信武、寺田仁志、戸崎勝洋、中村直子、西形達明、橋本達也、本田道輝、松井敏也、松尾千歳、三木靖、宮武正登、本中慎、山本達也、吉村龍二、渡辺芳郎、長崎市教育委員会、長崎県立埋蔵文化財センター、若北町教育委員会
- 29 本書に掲載する氏名はすべて敬称、職名、所属を略する。
- 30 出土遺物及び実測図・写真等の記録類は、県立埋文センターが保管し、展示活用を図る予定である。

## 瓦分類の概要

瓦種	ここでは屋根の各部分で使い分けられ、形の異なる瓦の種類を「瓦種」と表現する。複数の瓦種によって一つの屋根が構成されるが、屋根の形によって使われる瓦種や使われない瓦種がある。また他の瓦種を加工することによって利用することも少なくないため、同形態の屋根でも使用されない瓦種がある。例えば、熨斗瓦という瓦種は専用に制作されることは少なく、平瓦を縫って横使いすることが多い。瓦種の呼称は時代や地域等によっても異なる。
文様の表記	一般的な文様を指す場合は「文」(例：連珠三巴文), 家紋を指す場合は「紋」(例：牡丹紋)の文字を用いた。桟やマークと組み合わされる場合は「丸に○〇文(紋)」「山に〇〇文(紋)」と表現した。なお、通常すべてに伴のあるもの(連珠三巴文や牡丹紋など)では「丸に」を省略している。刻印等の文様表記「〇」とあるものは文字を指す(例：「山」刻印)。
分類方法	出土した瓦は瓦種ごとに分類し、分類番号を付した。瓦の軒先に付される「垂れ」の部分を「瓦当(かとう)」と呼び、軒瓦(軒丸瓦・軒平瓦・軒枝瓦)はこの「瓦当文様(かとうもんよう)」を基準に分類した。小菊瓦は棟瓦であるが、瓦面に対応する文様面を有するため、この文様を基準とした。江戸時代の瓦は基本的に型(例: 范<はな>)で作られるため、この型によって分類し、文様の構造が同じでも型が違うものについては別番号としている。 分類番号は、軒丸瓦・軒平瓦・軒枝瓦は多数に番号されたため、あらかじめ文様の系統別に大分類を行い(アルファベット大文字で表現), その後、逐番を付した。なお、各大分類ごとの番号の数字については、確認された順に順次付しているため、順序においては意味や法則性はない。そのため類似した文様が複数の番号についているもののが多數あることを留意されたい。 分類においては、既報告資料で分類可能なものについても、報文等により極力分類に含めるよう努めたが、実見できなかつた資料については確定しない部分がある。今後精査が必要である。 なお、屋根は複数の瓦種で構成されているため、それぞれのセット関係を把握する必要があるが、多くの資料が混在して出土しているためセット関係を把握できたものは少ない。確実性が高いと考えられるものについてのみ観察表に記した。

### 1. 軒瓦

江戸時代の瓦葺屋根では、軒先の瓦にはほぼ文様が入る。文様は范(木型・スタンプ)で押されるため、屋根には原則として同じ模様の瓦が並ぶ。軒枝瓦は単独で軒を構成するが、軒丸瓦と軒平瓦は組み合わせて使用される。

#### (1) 軒丸瓦の分類

概要	軒丸瓦は、軒平瓦とともに本瓦葺屋根の軒先を飾る。棟瓦算でも少数使用される。 軒丸瓦の文様には、江戸時代には「連珠三巴文」が一般的に用いられている。既製品の其にはほぼ全国的にこれが使われており、織人はこれを水の溌剌さと解して、火灾防止への願いを込めたものともいわれる。 連珠三巴文以外の文様が用いられている場合は、特注の「家紋瓦」である可能性が高い。ただし、鹿児島城の場合は朝鮮系と思われる独自の文様が見られるため、これらは単独のデザインと考えられる。 軒丸瓦の文様は鋼軒丸瓦や鳥伏瓦など。円形の瓦当を有する瓦にも適用されている。
大分類	瓦当文様により、以下の3種に大別した。 A種：連珠三巴文 B種：牡丹紋(鳥津家家紋) C種：その他以外の文様 分類数は既製文様であるA種が多く、次いでB種・C種となる。観察表中殊文数の( )は推定数。巴文の巻きについては、左右表記が異なる場合があるが、ここでは巻の印している方向を基準に右巻、左巻と表現した。

#### (2) 軒平瓦・軒枝瓦の分類

概要	軒平瓦は、軒丸瓦とともに本瓦葺屋根の軒先を飾る。棟瓦算でも少数使用される。 軒平瓦の文様は、江戸時代には「均整唐草文」が一般的に用いられる。左右対称のつる草文様で、「中心飾り」から左右に展開する「唐草」(巻き込みのある単位)、「子葉」(巻き込みのない単位)の組み合せから成るものが多い。逆続するものもあり表現は様々である。江戸時代の後半になると、生産の活性化によって文様の画一化が進み、地域色が生じる。均整唐草文以外の文様は江戸時代には稀である。 軒枝瓦は、軒丸瓦と軒平瓦を結合した形状の瓦で、江戸時代中期以降に普及した新しい形の瓦である。軒先の丸い部分を「軒丸部」、細長い部分を「軒平部」と称する。軒丸部から見て向かって右側に付く。枝瓦の引掛けが軒先から向かって左側にあり、全国的にもスタンダードな形状である。軒丸部の文様は、軒丸瓦の文様を踏襲した連珠三巴文や、その省略形の三巴文(連珠帯が無い)が使われるほか、稀に家紋が使用される。また軒丸部を完全に省略したものも見られる(本報告では形状から「謙形軒枝瓦」と記した)。軒平部には軒瓦用の文様が難しい。軒枝瓦の文様分類についても主に軒平部で行っているため、ここでは「軒平・軒枝瓦」として一括して分類番号を付した。
大分類	軒平部の瓦当文様により、以下の3種に大別した。 A: 大阪式(大阪地域を中心に近世後期から広く流布した文様構成)。 文様構成は、中央から中心飾りへ向きの唐草一子葉という組み合せが基本形。中心飾りは、中央に横状の要素があり、両脇にY字の要素、両脇下部に横に広がる要素がある。(中心飾りの「中央上」「中央下」「脇上」「脇下」と表現)。 B: 仮称「鹿児島式」(大阪式)文様をベースに創案されたと思われる文様。両端に「く」の字形の子葉を配する。 C: 大阪式の変形(大阪式)文様をベースに創案されたと思われる文様。両端に「く」の字形の子葉を配する。 D: その他、なお、A種のうち、「子葉の中心飾りの縁および子葉に深く切れ込みが入るタイプはこの地域に特徴的なもので、B種とともに江戸後期以降の鹿児島地域の瓦を象徴する文様とみられる(現存建築に見られる軒枝瓦の文様も多くはこれらに属するようである。)

#### (3) 檻込瓦

棟瓦のうち、飾り瓦として使用される瓦を棟込瓦と呼ぶ。鹿児島城では小菊瓦と輪違瓦が確認されているが、ここでは文様を有する小菊瓦のみを分類対象とした。

概要	小菊瓦は、屋根の棟において熨斗瓦の間に差し込んで飾りとして用いられる。小菊瓦の文様は伝統的に菊花文が定番的に用いられる(巴文・連珠三巴文が使われるものもあるが少ない)。菊花文以外が泡れる場合は、軒丸瓦同様家紋の可能性が高い。
大分類	瓦当文様により分類した。菊花文以外に「三追枝紋」1種が確認されているが、分類少数のため一括して連番とした。

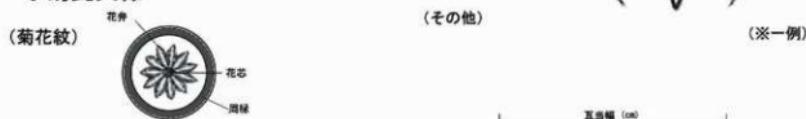
## 軒丸瓦文様



## 軒平瓦・軒棧瓦（軒平部）文様



## 小菊瓦文様



31 観察表及び總括における瓦の計測部位について以下の一覧である。



# 目次

序文

報告書抄録

用語・凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 鶴城跡保全整備事業について	1
第3節 免振震度の経過	1
第4節 整理・報告書作成作業の経過	2
第Ⅱ章 道路の位置と環境	3
第Ⅲ章 調査の方針と成果	3
第1節 発掘調査の方法	3
第2節 手序	7

## 第3章 各地点の調査成果

1 御門跡周辺	8
2 北御門跡周辺	12
3 北御門跡周辺石垣修復	26
4 御兵所跡	39
5 御様門跡周辺石垣修復	46
6 御角跡周辺	79
7 御角跡西側石垣周辺	118
8 外御室跡	131
9 池跡	157
10 能舞台跡	162
11 御楼門跡	167
第Ⅳ章 自然科学分析	185
第Ⅴ章 総括	195
写真図版	249

# 挿図目次

第 1 図 鹿児島城跡 城域図等	4
第 2 図 測量基準点位置図	5, 6
第 3 図 レンチ配置図	5, 6
第 4 図 明治 6 (1873) 年「鹿児島城本丸殿跡配置図」模式図	7
第 5 図 御進物貢跡トレンチ配置図	8
第 6 図 52 レンチ - 5・52 レンチ - 9 造垣平面図・断面図	9
第 7 図 52 レンチ - 5・52 レンチ - 9 土層断面図	10
第 8 図 御進物貢跡出土遺物	11
第 9 図 北御門跡周辺・北御門跡周辺石垣修復調査区トレンチ配置図	14
第 10 図 北御門跡周辺トレンチ 石垣平面図	14
第 11 図 北御門跡 土構排水溝平面図	15
第 12 図 和様 S・54 年度 免振調査で確認された北御門跡土構排水溝平面図	16
第 13 図 北御門跡周辺調査区 石垣平面図	16
第 14 図 北御門跡周辺調査区 平面図・断面図	17
第 15 図 北御門跡周辺調査区 出土遺物 1	18
第 16 図 北御門跡周辺調査区 出土遺物 2	19
第 17 国 北御門跡周辺調査区 出土遺物 3	20
第 18 国 北御門跡周辺調査区 出土遺物 4	21
第 19 国 北御門跡周辺調査区 出土遺物 5	22
第 20 国 北御門跡周辺調査区 出土遺物 6	23
第 21 国 北御門跡周辺調査区 出土遺物 7	24
第 22 国 北御門跡周辺石垣修復調査区 立面図	27
第 23 国 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図 平面図 作成石垣位置図	28
第 24 国 ①谷筋し積み石垣 1段目・布施し積み石垣 1段目平面図	29
第 25 国 ②布施し積み石垣 2・3段目 ③布施し積み石垣 7段目	30
第 26 国 ④布施し積み石垣 10段目 平面図	30
第 27 国 ⑤布施し積み石垣 11段目 ⑥布施し積み石垣 12段目 平面図	31
第 28 国 ⑦布施し積み石垣 13段目 ⑧布施し積み石垣 14段目 平面図	31
第 29 国 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図 (南壁・東壁) ...	32
第 30 国 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図 (東壁) ...	33
第 31 国 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図 (西壁) ...	34
第 32 国 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図 (西壁) ...	35
第 33 国 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図 (東壁・南壁) ...	36
第 34 国 御兵所跡調査区トレンチ配置図	40
第 35 国 51 レンチ - 9 土構排水溝配置図 土層断面図 (西壁・南壁・東西壁) ...	41
第 36 国 50 レンチ - 9 土構排水溝配置図 土層断面図 (南壁・西壁) ...	42
第 37 国 58 レンチ - 9 土構排水溝配置図 土層断面図 (東壁・南壁) ...	43
第 38 国 御兵所跡調査区 出土遺物 1	44
第 39 国 御兵所跡調査区 地下構造図	45
第 40 国 御樓門跡周辺石垣周辺調査区 トレンチ配置図	46
第 41 国 御樓門跡周辺石垣周辺調査区 トレンチ配置図	47
第 42 国 43 レンチ - 9 平面図 土層断面図 (南壁) ...	48
第 43 国 43 レンチ - 9 出土遺物 1	50
第 44 国 43 レンチ - 9 出土遺物 2	51
第 45 国 43 レンチ - 9 出土遺物 3	52
第 46 国 36 レンチ - 9 平面図	54
第 47 国 36 レンチ - 9 土層断面図 (北壁) ...	55
第 48 国 36 レンチ - 9 出土遺物	56
第 49 国 44 レンチ - 9 平面図	57
第 50 国 44 レンチ - 9 土層断面図 (北壁) ...	58
第 51 国 44 レンチ - 9 出土遺物 1	60
第 52 国 44 レンチ - 9 出土遺物 2	61
第 53 国 44 レンチ - 9 出土遺物 3	62
第 54 国 37 レンチ - 9 平面図	64

第 55 国 37 レンチ - 9 土層断面図 (南壁)	65
第 56 国 37 レンチ - 土出遺物 1	66
第 57 国 37 レンチ - 土出遺物 2	67
第 58 国 41 レンチ - 9 平面図・断面模式図	68
第 59 国 41 レンチ - 9 土層断面図 (A - F 面)	69
第 60 国 41 レンチ - 9 (立石) 石組み見通し新面図	71
第 61 国 41 レンチ - 9 (立石) 平面図・見通し新面図	73
第 62 国 41 レンチ - 土出遺物 1	75
第 63 国 41 レンチ - 土出遺物 2	76
第 64 国 御角跡平面図 (青 平成 4・5 年調査分、赤 排水溝塗)	77, 78
第 65 国 御角跡調査区トレンチ配置図	79
第 66 国 御角跡東側石垣見通し新面図 (1面)	80
第 67 国 御角跡石垣見通し図 (南壁・2面)	81
第 68 国 御角跡北土層断面図 (北壁・3面)	82
第 69 国 御角跡基南北 東西トレンチ土層断面図 (A - B・B - E) ...	84
第 70 国 御角跡排水溝 (1) 排水溝 2 土層断面図 (C - C') ...	85
第 71 国 御角跡上段 排水溝 1 発見し図 (東壁・4面)	86
御角跡中段 排水溝 2 発見し図 (西壁・5面)	86
御角跡下段 排水溝 3 発見し図 (西壁・5面)	86
第 72 国 御角跡排水溝 2 土層断面図 (東西 D - D')	87
第 73 国 御角跡排水溝 3 発見し図 (E - E')	88
第 74 国 御角跡排水溝 2・3(2) 土層断面図 (東西 F - F')	89
第 75 国 御角跡調査区土層断面図 (西壁・7面)	91
第 76 国 御角跡調査区土層断面図 (北壁・8面)	93
第 77 国 御角跡南壁 (南壁・9面)	94
第 78 国 御角跡上段 J - 1・2 レンチ - 9 土層断面図 (西壁・10面)	94
御角跡下段 K - 1 土管埋設溝土層断面図 (西壁・11面)	95
第 79 国 御角跡 I - 1・2 土区土層断面図 (西壁 10面・南壁 1面)	97
第 80 国 御角跡 出土遺物 1	100
第 81 国 御角跡 出土遺物 2	101
第 82 国 御角跡 出土遺物 3	102
第 83 国 御角跡 出土遺物 4	103
第 84 国 御角跡 出土遺物 5	104
第 85 国 御角跡 出土遺物 6	108
第 86 国 御角跡 出土遺物 7	109
第 87 国 御角跡 出土遺物 8	110
第 88 国 御角跡 出土遺物 9	111
第 89 国 御角跡 出土遺物 10	112
第 90 国 御角跡 出土遺物 11	113
第 91 国 御角跡 出土遺物 12	114
第 92 国 御角跡 出土遺物 13	115
第 93 国 御角跡 出土遺物 14	116
第 94 国 御角跡 出土遺物 15	117
第 95 国 御角跡西側石垣周辺調査区トレンチ配置図	119
第 96 国 46 レンチ - 平面図	120
第 97 国 昭和 10 年頃のブルーム想定図	120
第 98 国 46 レンチ - 出土遺物	121
第 99 国 48 レンチ - 平面図・断面図・土層断面図	123
第 100 国 48 レンチ - 出土遺物 1	124
第 101 国 48 レンチ - 出土遺物 2	125
第 102 国 49 レンチ - 平面図・断面図・土層断面図	127
第 103 国 49 レンチ - 出土遺物	128
昭和 53・54 年度調査と今回の調査のトレンチの位置対比図	129
第 105 国 47 レンチ - 平面図・断面図・土層断面図	131
第 106 国 外御室跡調査区トレンチ配置図	131
第 107 国 32・33 レンチ - 平面図	132
第 108 国 33 レンチ - 石垣堆立面図	133

第 109 図	34 トレンチ平面図	133
第 110 図	32 トレンチ平面図	135
第 111 図	32 トレンチ井渠遺構東側土層断面図(東壁)	135
第 112 図	32 トレンチ井渠遺構 側面図	137
第 113 図	32 トレンチ南側壁埋土状況 1	138
第 114 図	32 トレンチ南側壁埋土状況 2	139
第 115 図	42 トレンチ土層断面図(東壁・南壁)	140
第 116 図	第七高等学校校迹館 幢水溝 平面図・断面図	142
第 117 図	外御庭跡 出土遺物 1	144
第 118 図	外御庭跡 出土遺物 2	145
第 119 図	外御庭跡 出土遺物 3	147
第 120 図	外御庭跡 出土遺物 4	148
第 121 図	外御庭跡 出土遺物 5	150
第 122 図	外御庭跡 出土遺物 6	151
第 123 図	外御庭跡 出土遺物 7	152
第 124 図	外御庭跡 出土遺物 8	154
第 125 図	外御庭跡 出土遺物 9	155
第 126 図	外御庭跡 出土遺物 10	156
第 127 図	御池跡調査区トレンチ配置図	157
第 128 図	53 トレンチ平面図・土層断面図(西壁・北壁)	158
第 129 図	54 トレンチ平面図・土層断面図(西壁)	160
第 130 図	御池跡 出土遺物	161
第 131 図	能舞台跡調査区 平面図	163
第 132 図	能舞台跡 橋掛り 土層断面図	164
第 133 図	能舞台跡 橋掛り 1, 2, 3トレンチ土層断面図	165
第 134 図	能舞台跡 橋掛り 出土遺物	166
第 135 図	御樓門跡出土遺物	167
第 136 図	鹿児島城跡の木材	186
第 137 図	校正年代計測グラフ	187
第 138 図	花粉ダイヤグラム	188
第 139 図	X 線分析試料写真	189
第 140 図	瓦類微細下観察結果	191
第 141 図	碎屑分の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成	192
第 142 図	胎土化組成散布図	192
第 143 図	碎屑物・基質・孔隙の割合	192
第 144 国	鹿児島城跡絵図①	198
第 145 国	鹿児島城跡絵図②	199
第 146 国	第七高等學校学校土器館配置図	200
第 147 国	鹿児島城跡古文真	201
第 148 国	本丸・二之丸造構配図	207, 208
第 149 国	本丸・二之丸造構配図(第七高等學校学校土器館配置図の重ね図)	209, 210
第 150 国	本丸跡出土陶磁器の変遷図	211, 212
第 151 国	16~19世紀の堅野系を中心とした薩摩の陶器	213
第 152 国	17世紀前半の瓦	219
第 153 国	17世紀末~後葉の瓦	220
第 154 国	17世紀末~18世紀前葉の瓦	221
第 155 国	18世紀後半~19世紀の瓦	222
第 156 国	刻印瓦刻印一覧 1	244
第 157 国	刻印瓦刻印一覧 2	245

## 目次

第 1 表	基準点座標値	5.6
第 2 表	基本土層	7
第 3 表	御道具魔界帶間に推定される建物等	8
第 4 表	41 トレンチ A・B・C・D・E・F 面土層注記	70
第 5 表	角柱跡西壁土層注記	92
第 6 表	角柱跡 J-1・2 西壁土層注記	96
第 7 表	42 トレンチ土層注記	141
第 8 表	53 トレンチ土層注記	159
第 9 表	遺物 1(陶器)	168
第 10 表	遺物 2(陶器)	169
第 11 表	遺物 3(陶器)	170
第 12 表	遺物 4(陶器)	171
第 13 表	遺物 5(陶器)	172
第 14 表	遺物 6(陶器)	173
第 15 表	遺物 7(陶器)	174
第 16 表	遺物 8(陶器)	175
第 17 表	遺物 9(土製品・土器・石製品)	176
第 18 表	遺物 10(木製品)	176
第 19 表	遺物 11(ガラス製品・骨製品・金属製品等)	177
第 20 表	遺物 12(ガラス製品・金属製品等)	178
第 21 表	遺物 13(瓦)	178
第 22 表	遺物 14(瓦)	179
第 23 表	遺物 15(瓦)	180
第 24 表	遺物 16(瓦)	181
第 25 表	遺物 17(瓦)	182
第 26 表	遺物 18(瓦)	183
第 27 表	遺物 19(瓦)	184
第 28 表	分析した木片及び木製品	185
第 29 表	樹種同定結果	185
第 30 表	放射性炭素年代測定結果	187
第 31 表	観察された花粉類	188
第 32 表	胎土分析の分析試料	189
第 33 表	蛍光 X 線分析における各元素の定量分析結果	189
第 34 表	観察された鉱物組成	190
第 35 表	観察された微化石・砂粒物の特徴	190
第 36 表	試料一覧	190
第 37 表	ガラスビード作製条件	191
第 38 表	蛍光 X 線装置条件	191
第 39 表	蛍光 X 線定量測定条件	192
第 40 表	薄片観察結果	193
第 41 表	年表	204
第 42 表	軒丸瓦分類表 1	225
第 43 表	軒丸瓦分類表 2	226
第 44 表	軒丸瓦分類表 3	227
第 45 表	軒丸瓦分類表 4	228
第 46 表	軒丸瓦分類表 5	229
第 47 表	軒丸瓦分類表 6	230
第 48 表	軒丸瓦分類表 7	231
第 49 表	軒平瓦分類表 1	232
第 50 表	軒平瓦分類表 2	233
第 51 表	軒平瓦分類表 3	234
第 52 表	軒平瓦分類表 4	235
第 53 表	軒平瓦分類表 5	236
第 54 表	軒平瓦分類表 6	237
第 55 表	軒平瓦分類表 7	238
第 56 表	軒平瓦分類表 8	239
第 57 表	軒平瓦分類表 9	240
第 58 表	軒平瓦分類表 10	241
第 59 表	軒平瓦分類表 11	242
第 60 表	小葡萄分類表	243
第 61 表	刻印瓦檢出数・瓦種表 1	246
第 62 表	刻印瓦檢出数・瓦種表 2	247

## 図版目次

図版 1	軒丸瓦・軒平瓦・小葡萄	
図版 2	御道具魔界帶 南御門跡土標	249
図版 3	北御門跡石槽周辺	250
図版 4	北御門跡石槽周辺・石垣修復	251
図版 5	北御門跡石垣修復	252
図版 6	御兵所跡 御樓門跡南側石垣周辺	254
図版 7	御樓門跡南側石垣周辺	255
図版 8	御樓門跡南側石垣周辺	256
図版 9	御樓門跡南側石垣周辺・御角櫓跡周辺	257
図版 10	御角櫓跡	258
図版 11	御角櫓跡	259
図版 12	御角櫓跡西側石垣周辺	260
図版 13	外御庭跡	261
図版 14	外御庭跡	262
図版 15	外御庭跡・御池跡・能舞台跡	263
図版 16	陶器瓦・古瓦・朝鮮系瓦	264
図版 17	長崎瓦	265
図版 18	丸瓦・平瓦	266
図版 19	棟瓦・寧瓦・海鼠瓦・埠瓦	267
図版 20	鬼瓦	268
図版 21	主要陶器類(1)	269
図版 22	主要陶器類(2)	270
図版 23	土製品・金属製品・磚	271
図版 24	木製品・近代陶器・ガラス製品	272

# 第Ⅰ章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経緯

調査に至るまでの経緯については、同じく鶴丸城跡保全整備事業の『鹿児島（鶴丸）城跡－御櫓門跡周辺－』（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2021・以下『御櫓門跡周辺』）で既に述べている。そのため、本書では、必要でない限りは『御櫓門跡周辺』刊行された令和2年度以降の内容について述べることとする。

本報告書は、鶴丸城跡保全整備事業で実施した平成26～30年度の5年間で発掘した調査面積3,145m<sup>2</sup>のうち、御櫓門跡部分1,350m<sup>2</sup>を除いた1,795m<sup>2</sup>および北御門跡周辺石垣修復に伴う発掘調査87m<sup>2</sup>についての成果を記載する。なお、経過については、平成27年度以降の事業を含めて第2節以下に記載した。

## 第2節 鶴丸城跡保全整備事業について

鶴丸城跡保全整備事業については、『御櫓門跡周辺』にゆずり、本書では鶴丸城跡保全整備事業に係る専門家検討会議のうち、『御櫓門跡周辺』刊行以降の令和2年度に開催された会議の検討議題のみを記載する。

委員：三木靖、宮武正登、原口泉、渡辺芳郎、大木公彦、北村良介、寺田仁志、松井敏也、麓和善

オブザーバー：文化庁

### 会議の項目

#### 令和2年度

##### 第1回（令和2年7月20日開催）

概要：令和2年度事業概要、北御門周辺部石垣の修復、修景整備計画（園庭）、地下水位観測等の概要、次年度の事業計画（国指定史跡に向けて、御角櫓跡石垣修復に向けて）、現地視察（北御門周辺部石垣修復工事、御櫓門・修景整備予定地）

##### 第2回（令和2年12月16日開催）

概要：国指定史跡に向けて（これまでの調査成果、文献調査の状況）、北御門跡周辺部石垣の修復、唐御門跡の発掘調査、現地視察（北御門周辺部石垣・黎明館駐車場・大手口・照國神社・城山二之丸跡）

#### 令和3年度

##### 第1回（令和3年7月12日開催）

概要：鶴丸城跡保全整備事業について（今後の事業の進め方、過去に実施した調査成果、鹿児島城跡石垣台帳、今後のスケジュール）、国史跡指定に向けた取組（令和3年度の取組、令和3年度の発掘調査状況（鹿児島県・鹿児島市）、国指定範囲、総括報告書の構成とイメージ、

令和2年度文献調査の成果、今後のスケジュール）、関連の試掘調査、鶴丸城跡V Rアプリ作成事業、現地見学（本丸大奥跡）

## 第3節 発掘調査の経過

### 1 本調査

平成26年度から平成30年度までの発掘調査の経過については『御櫓門跡周辺』にゆずり、令和2年以降の日誌抄を集約したものを毎月記載する。

### 令和2年度

6月（令和2年6月1日～6月29日）

北御門跡石垣修復調査区A・B・a～d～37～39区、調査開始。布崩し積み石垣部分（調査区東側）、コンクリートブロック撤去・石垣解体立会、石垣含む土層断面図作成。1段目の面、裏検出、石垣裏込めの実測・撮影。2段目の面、地覆石検出・実測・写真撮影。3段目の面、石垣天端検出・実測・写真撮影。布崩し積み石垣部分（調査区西側）、コンクリートブロック撤去・石垣解体立会、石垣含む土層断面図作成。石垣天端・裏込め検出・実測・写真撮影。

7月（令和2年7月3日～7月29日）

北御門跡石垣修復調査区A・B・a～d～38～39区、布崩し積み石垣部分（調査区東側）、石垣解体立会、石垣裏側掘削開始立会、石垣平面図作成、石垣含む土層断面図作成。谷崩し積み石垣部分（調査区西側）、石垣解体、石垣裏側掘削開始立会、石垣平面図作成、石垣含む土層断面図作成。胸木検出・実測・写真撮影。石垣全体、前段階の堀端検出・掘削・写真撮影・平面実測。

8月（令和2年8月3日～8月12日）

北御門跡石垣修復調査区A・B・a～d～37～39区、堀側東壁・南壁土層断面実測・写真撮影。東・西土層断面実測図確認及び写真撮影（天端石へ堀底）。鶴丸城跡保全整備に係る専門家検討会議の現地協議対応、撤収作業。

### 2 調査体制

本項目についても、令和2年度以降を記載する。

### 令和2年度

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 前追亮一

調査企画〃 次長兼総務課総務課長 野間口誠

〃 調査課長兼南の瀬文調査室長 中村和美

〃 調査課第一調査係長 三垣恵一

調査担当〃 文化財主事 山崎克之

〃 文化財主事 西野元勝  
事務担当 〃 総務課主事 日置淑乃  
来跡・指導助言  
御楼門復元専門家委員会、鹿児島市鹿児島城跡調査職員研修（遺跡見学）、揚村固、大木公彦、北村良介、三木靖、宮武正登、渡辺芳郎

#### 第4節 整理・報告書作成作業の経過

##### 1 作業の経過

本項目についても、令和2年度以降を記載する。

##### 令和2年度

遺物洗浄、選別、注記、接合、復元、実測、拓本、トレース、計測、レイアウト、遺構図面整理、遺構図面トレース、デジタルデータ（トータルステーションデータ等）整理、統合、トレース、レイアウト、現場写真整理、選別、遺物撮影、遺物レントゲン撮影、写真レイアウト、文章作成、陶磁器実測委託業務、自然科学分析委託（瓦の胎土分析、銛弾の組成分析）。

指導助言：大木公彦、太田秀春、金子智、小林善仁、丹羽謙治、原口泉、松尾千歳、渡辺芳郎

##### 令和3年度 本報告書刊行年度

遺物洗浄、選別、注記、接合、復元、実測、拓本、トレース、計測、レイアウト、遺構図面整理、遺構図面トレース、デジタルデータ（トータルステーションデータ等）整理、統合、トレース、レイアウト、現場写真整理、選別、遺物撮影、遺物レントゲン撮影、写真レイアウト、文章作成、陶磁器実測委託業務、自然科学分析委託契約（瓦・陶磁器・石製品の胎土分析・組成分析）

指導助言：金子智、三木靖、渡辺芳郎

##### 2 整理作業の体制

##### 令和2年度

整理担当 馬龍亮道文化財主事、山崎克之文化財主事、（黒木梨絵文化財主事、西野元勝文化財主事）、三垣恵一調査課第一調査係長

##### 令和3年度

整理（本報告書作成）担当 西野元勝文化財主事、黒木梨絵文化財主事（～6月）、彌榮久志文化財研究員（7月～）、山下智沙子文化財主事、三垣恵一調査課第一調査係長、（浅田剛士文化財主事）

なお、令和2年度～3年度の報告書作成指導委員会及び検討委員会は以下の日程で実施した。

<報告書作成指導委員会>

##### 令和2年度

- 第1回 6月2日、 第2回 8月4日  
第3回 10月7日、 第4回 11月4日、  
第5回 11月24日、 第6回 2月1日

出席者：中村和美調査課長兼南の縄文調査室長、三垣恵一調査課第一調査係長、横手浩二郎調査課第二調査係長、財団法人鹿児島県埋蔵文化財調査センター寺原徹調査課長、福永修一調査第一係長、有馬孝一調査第二係長、黒川忠広調査第三係長、馬籠亮道文化財主事、山崎克之文化財主事

##### 令和3年度

- 第1回 6月3日、 第2回 8月4日  
第3回 10月6日、 第4回 11月2日  
第5回 11月25日

出席者：寺原徹調査課長兼南の縄文調査室長、三垣恵一調査課第一調査係長、西園勝彦調査課第二調査係長、財団法人鹿児島県埋蔵文化財調査センター福永修一調査課長、水濱功治調査第一係長、有馬孝一調査第二係長、黒川忠広調査第三係長、黒木梨絵文化財主事（～6月）、西野元勝文化財主事、山下智沙子文化財主事、彌榮久志文化財研究員（7月～）

<報告書作成検討委員会>

##### 令和2年度

- 第1回 6月8日、 第2回 8月7日  
第3回 10月9日、 第4回 11月10日  
第5回 11月26日、 第6回 2月5日

出席者：前追亮一所長、野間口誠次長兼総務課長、山下勝史主幹兼総務係長、中村和美調査課長兼南の縄文調査室長、東和幸南の縄文調査室長補佐、三垣恵一調査課第一調査係長、横手浩二郎調査課第二調査係長

##### 令和3年度

- 第1回 6月3日、 第2回 8月4日、  
第3回 10月6日、 第4回 11月2日、  
第5回 11月29日

出席者：中原一成所長、大口浩嗣次長兼総務課長、山下勝史主幹兼総務係長、寺原徹調査課長兼南の縄文調査室長、東和幸南の縄文調査室長補佐、三垣恵一調査課第一調査係長、西園勝彦調査課第二調査係長

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

本項目は、『御樓門周辺』で既に示されているため省略。

## 第Ⅲ章 調査の方法と成果

### 第1節 発掘調査の方法

発掘調査の対象となる調査位置・範囲については鶴丸城跡保全整備事業の計画及び関係機関との協議を基に設定した。平成 26 ~ 30 年度は、石垣及び闇連遺構の調査を中心とし、石垣背面構造や排水溝等、遺構の残存状況の調査を行った。また、御樓門形橋虎口周辺の石垣に閑連する遺構（礎石・石疊・排水溝等）の調査も実施した。令和 2 年度は、平成 27 年 6 月 12 日に大雨の影響で崩落した北御門跡対岸の石垣修復に伴う発掘調査を行った。

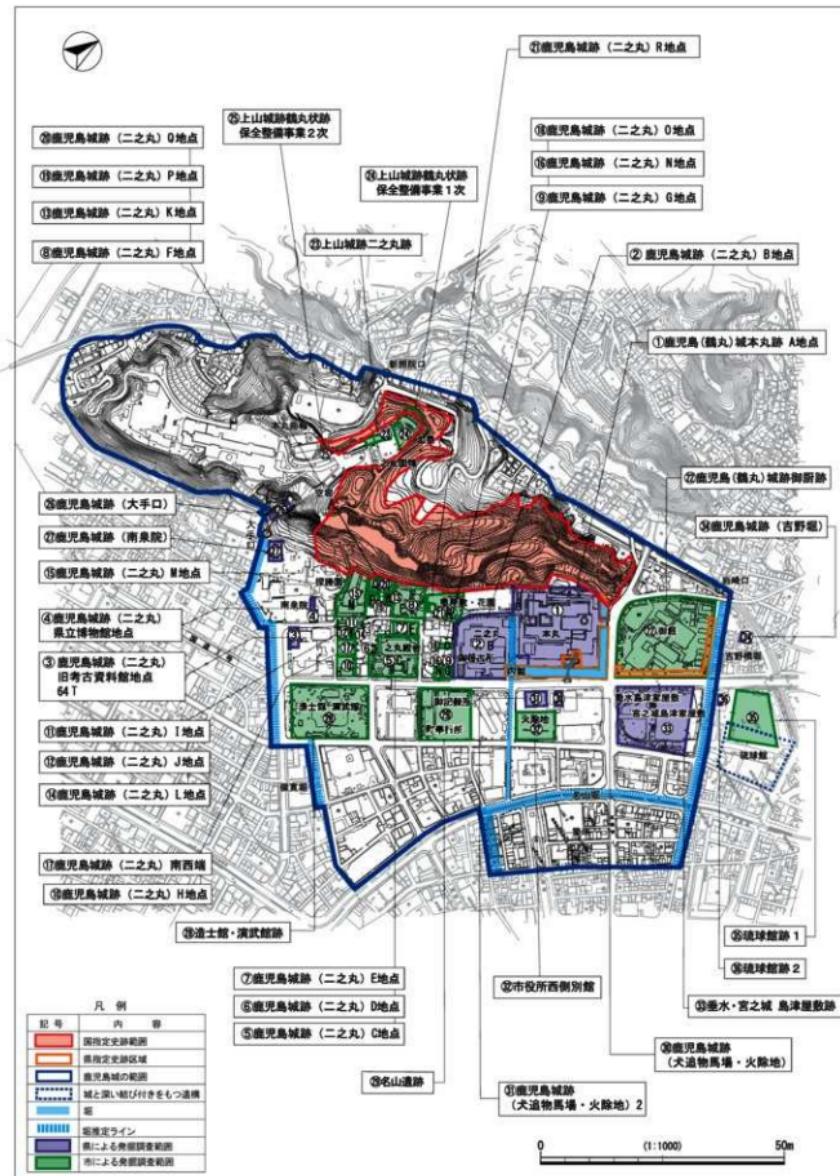
発掘調査は当初、先行確認調査として  $2 \times 4\text{m}$  程度のトレレンチを設定し、必要に応じて調査範囲を拡張した。表土は厚さ 10 ~ 30cm 程度あり、バックホー等の重機で薄く掘削しながら除去し、表土除去後、人力で石鍬、鋤、鏟、移植ごて、ねじり鎌等を用いて、掘削した。遺構面及び遺物の周囲は移植ごて、竹べら、竹串、手箸等を使い、丁寧に検出した。記録保存調査ではないため、遺構を検出後、実測・撮影等を行い、調査後は養生シート（寒冷紗）を覆うことでの遺構表面を保護し、調査前の標高まで元の覆土等で埋め戻した。遺構は基本的に検出時と完掘後に写真撮影を行い、必要に応じて調査中の状況等を撮影した。撮影にはデジタルカメラ（NIKON D3200, PENTAX K-m, Canon EOS Kiss X7, NIKON D5000）を使用し、35mm フィルムカメラは NIKON FM2, FM3 を使用して白黒フィルム（富士フィルム株式会社 NEOPAN 100 ACROS）とスライド用フィルム（富士フィルム株式会社 PROVIA 100F）を用い、職員が撮影した。平成 28 ~ 31 年度は民間業者に空中写真撮影を委託し、上空から遺跡及び周辺地形の状況等を撮影した。

遺構等の測量は、平板とトータルステーションを用いて行った。世界測地系の国土座標と周辺の基準点（4 級等）や黎明館内の既知の基準杭等を用いてトレレンチや遺構の位置等を記録した。遺構の実測や測量は職員が行い、一部は民間業者に委託した。昭和 53 年の調査で設定したグリッドと同じ配置で調査区を  $5\text{m}$  間隔で区切り、調査を行った。グリッドは御樓門跡東角を基準として東（国道 10 号線）側の石垣に平行にグリッド軸を設定したが平成 11 年度の石垣修理工事の際に積み替えが行われており、厳密に今回の調査で用いるグリッドに合わせることは出来ない。今回調査で用いた代表的な基準杭の国土座標値（世界測地系）、標高値と位置を第 3 表、第 6 図に示す。各調査地点のうち、38 ~ 40・50 トレレンチを御樓門跡、c ~ e -36 ~ 38 区の調査区・石垣 1 ~ 3 ト

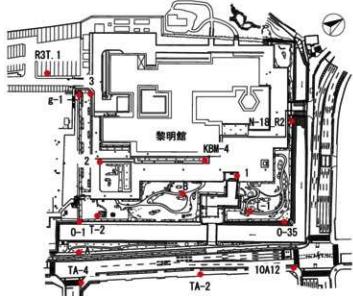
レンチを北御門跡周辺、A ~ C + a ~ c -37 ~ 39 区を北御門跡周辺石垣修復地点、550・51・58 トレレンチを兵具所跡、36・37・41・43・44 トレレンチを御樓門跡南側石垣周辺、11・14 トレレンチおよびそれを拡張した I ~ N - 1 ~ 3 調査区を御角櫓跡周辺、46 ~ 49 トレレンチを御角櫓跡南側石垣周辺、32 ~ 34 トレレンチおよび 32・33 トレレンチを拡張した I ~ N - 1' ~ 3' 調査区を外御庭跡、53・54 トレレンチを御池跡、H ~ J - 11 ~ 14 調査区を能舞台跡として報告する。外御庭跡を除く地点は標高約 11m、外御庭は約 7.5m である。なお、調査区の各地点名については、明治 6（1873）年「鹿児島城跡本丸殿舎配置図」（第 4 図、以下、成尾常矩指図）に記載された建物名称を調査地点ごとに当てはめたものである。ただし、成尾常矩指図で「堀」となっている外御庭については、他の堀との混同を避けるため、天保 14 年（1843）年「天保年間鹿児島城下絵図」第 145 図⑥に書かれている外御庭跡を用いる。これは、鹿児島城内の建物は大火やシロアリの被害等によって複数回建て替えられ、建物の配置等が変わっていると考えられること、発掘調査は遺構保護のため掘削を江戸時代の最終段階の遺構面を確認した時点で止めており、調査で確認された遺構は明治 6（1873）年「鹿児島屋形及びその周辺」と整合する可能性が高いためである。調査で確認された遺構の位置付については、鹿児島城の絵図等を参考にした。今回、特に参考にした絵図等については、第 144 ~ 148 図に示す。

遺物取り上げの際、一部についてはトータルステーションで位置情報を記録したが、包含層から出土したものは少なく、擾乱層や近現代の造成土から出土したものは層及びグリッド（トレレンチ）の範囲で一括して取り上げた。その後、発掘調査事務所プレハブや埋蔵文化財センターで洗浄、選別作業を行い、大量に出土した瓦は軒の瓦当文様から型式が分かるものと比較的破損の少ないものを取り扱うこととした。

整理作業は、平成 27 年度から埋蔵文化財センター及び発掘調査事務所で実施した。出土遺物は洗浄、注記、選別、接合、復元、実測、トレース、レイアウト、写真撮影等を行い、遺構は図面整理、図面の統合、トレース、レイアウト等の一連の報告書作成の流れで行った。陶磁器の遺物実測トレースと胎土分析等の自然科学分析業務は民間業者に委託した。土壘断面図、遺構、遺物のトレースは Adobe 社の「Illustrator CC 2021」、「Photoshop CC 2021」を用い、編集レイアウトは「Windows Word 10」で行った。



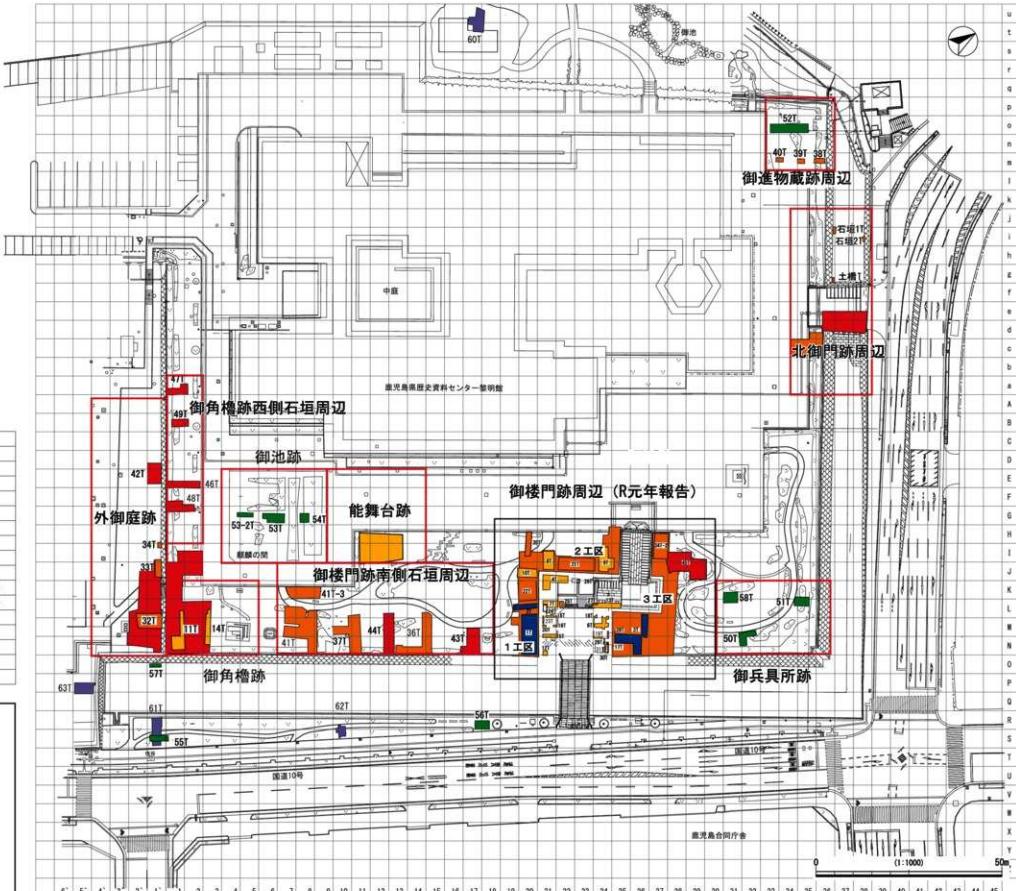
第1図 鹿児島城跡 城域図等



● TA-5  
第2図 測量基準点位置図

第1表 基準点座標値

点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	Z座標 (m)	備考
1 10A12	-155291.705	-42094.160	5.090	既存(国道10号東側歩道・公共)
2 TA-2	-155365.873	-42131.123	5.101	既存(国道10号東側歩道)
3 TA-4	-155452.923	-42178.131	4.460	既存(国道10号東側歩道)
4 TA-5	-155485.710	-42151.878	3.518	既存(名古小学校跡)
5 1-1	-155303.429	-42152.902	11.995	R2年度新設(黎明館敷地内)
6 1	-155296.560	-42183.490	10.730	H29年度新設(黎明館敷地内)
7 2	-155388.253	-42254.065	11.276	H29年度新設(黎明館敷地内)
8 3	-155362.456	-42305.741	11.881	H29年度新設(黎明館敷地内)
9 T-2	-155411.941	-42217.796	12.990	R2年度新設(黎明館敷地内)
20 A	-155401.964	-42200.527	5.041	R2年度新設(国道10号西側歩道)
21 B	-155420.255	-42195.162	5.031	R2年度新設(国道10号西側歩道)
22 O-1	-155427.282	-42221.624	-	H29年度新設(N-0-0-1区)
23 O-35	-155283.810	-42130.421	-	H29年度新設(N-0-34-35区)
24 g-1	-155370.951	-42310.234	-	H29年度新設(g-1-h-0-1区)
25 n-18,82	-155233.799	-42197.243	11.951	R2年度新設(北御門跡)
26 RGT.1	-155383.490	-42339.514	12.369	H29年度新設(黎明館駐車場)



第3図 トレチ配置図

## 第2節 層序

鹿児島城跡周辺の地質は『御城門跡周辺』『第II章 第1節 3地質』に記載のとおりで、ここでは各トレーナーにおける断面、造構埋土の断面に見られる局地的な土層（土質）について掲載する。基本土層模式図を第2表に記す。発掘調査で確認した層位の中に噴出源や時期が同定できるテフラはなかったが、局所的に間に等に溜まった火山灰は認められた。造構面から想定して、桜島P1（大正3（1914）年）やP2（安永8（1779）年）等の桜島起源の火山灰の可能性もある。

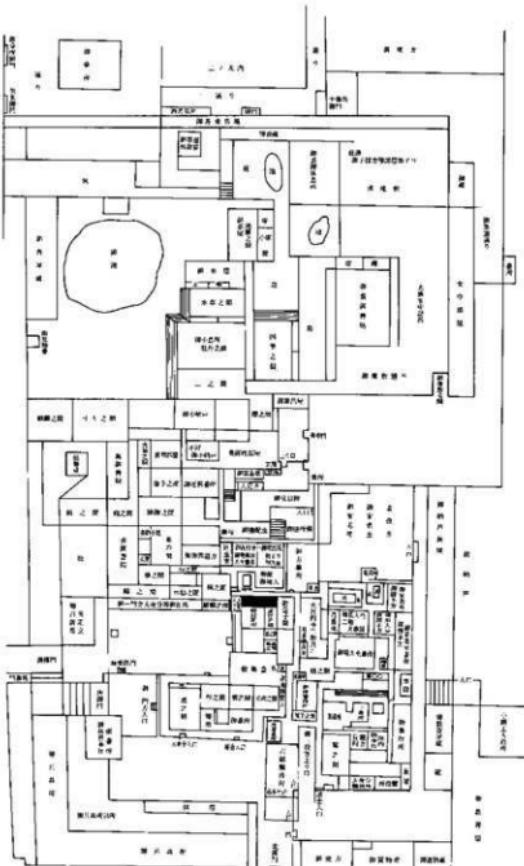
I層の表土と昭和53・54年度の発掘調査後に埋め戻した埋土との違いも明確ではなく、土層表記も表土以外に「造成土」や「擾乱土（層）」等と表現している。また、調査範囲の一部は昭和53・54年度の発掘調査範囲と重複しており、その際の埋め戻し土が造成土（擾乱土）となっている。

基本土層は、I層黒色土が現在の表土、II層黄色褐色土は、黎明館建設時や昭和53・54年度の発掘調査の埋土など現在の造成土で、III層黒褐色土は明治6（1783）年の本丸が火災で焼失後の近代以降の造成土。IV層暗褐色土は、近世の最終段階の造成土としている。また、IV層以前御造成土にはV層とついている。ただし、今回の報告範囲では、基本は基本層序と同様だが、全面が造成土であるという性格上、土色や土質は場所ごとに異なっていることもある。そのため、今回の層序については、それぞれの調査地点ごとに述べることとする。

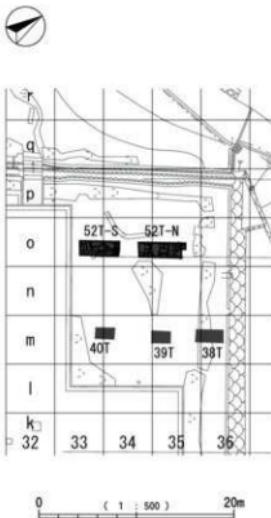
また、基本土層には排水溝等の各造構の埋土については、造構名+土層名（排水溝①）などとしている。

第2表 基本土層

層位	色調	備考	層厚
I層	黒色土	表土	10cm
II層	黄褐色土	近現代の造成土	20cm
III層	黒褐色土	近現代の造成土	40cm
IV層	暗褐色土	近世の造構接出面	—



第4図 明治6（1873）年「鹿児島城本丸殿舎配置図」模式図



第5図 御進物藏跡トレンチ配置図

第3表 御進物藏跡周辺に推定される建物等

和暦	西暦	堀	石垣	長屋	門	土橋
寛文三	1663	無	無	東側	無	通路
元禄九	1696	有	有	西側	長屋	有
正徳三	1713	有	有	西側	長屋	有
宝曆六	1756	有	有	西側	長屋	有
文政五	1822	有	有	東西	北御	有
天保十四	1843	有	有	東西	北御	有
明治六	1873	有	有	東西	北御	有

### 第3節 各地点の調査成果

#### 1 御進物藏跡（第5～8図）

第3表は鹿児島城の絵図から北側の施設の変遷を示したもので、堀、石垣、長屋建物、門、土橋の記号の変遷を絵図から追ったものである。

本調査区は、元禄9（1696）年「鹿児島城絵図」（第144図②）、宝曆6（1756）年「薩摩国鹿児島城絵図」（第144図④）等の複数の絵図では、本丸北側の城壁に沿って造られた長屋状の建物があった位置の西端にある。この建物は、明治初期に撮影された御兵具所と北御門（第147図③）を参考にみると、石垣と堀を組み合わせた多聞櫓型式の建物が考えられ、規模は御兵具所と同等であると考えられる。この建物は、明治6（1873）年「鹿児島城本丸殿舎配置図」では、北御門側から「御能方」「御買物所」「御進物藏」と書かれており、3つの施設が

入っていたようである。調査区は、このうち、「御進物藏」の位置にあたると想定される。

今回は、グリッドのm～o-32～36区に52トレンチ-N・S、38～40トレンチの6本のトレンチを設定した。

#### 38トレンチ・39トレンチ・40トレンチ（第5図）

**概要** 幅約1mの範囲を掘り下げたが、近代以降の擾乱層が深く、遺構は検出されなかった。

#### 出土遺物（第8図1～4）

遺物は擾乱層から少量の遺物が出土した。

1～3は、陶磁器で4は瓦である。1は、薩摩磁器の皿。型打ち成形である。高台内面は蛇の目釉剥ぎされる。総釉で、疊付は釉剥ぎされる。内面は型紙模りで対になる鶴や竹・花が描かれる。外表面は手書きで唐草風の文様が描かれる。近代。2は、薩摩磁器の筒形碗である。総釉で、疊付は釉剥ぎされる。内面見込みに昆虫文が描かれる。18世紀末～19世紀初頭。3は、加治木・姶良系の陶器土瓶である。18世紀後半～19世紀。4は、陶器瓦の丸瓦である。破片だが、凸面が釉尻ハート型に施釉される田ノ浦窯跡系であると考えられる。出土遺物の時期は、17世紀後半～近代の遺物が混在して出土しており、近代以降に擾乱を受けていたことを裏付ける。

#### 52トレンチ-N（第5～7図）

**概要** 北堀に面する石垣の上端から約5m南側のo-34・35区に設定した。規模は4m×幅2mを基本とし、後に北側を40cm拡張した。

層序は、北側で約90cm、南側は約80cmの表土・シラス盛土・擾乱があり、その下で造成土面を確認した。

**遺構** 標高11.4m前後で排水溝・石列等を検出した。

#### （1）排水溝（第6図・第7図）

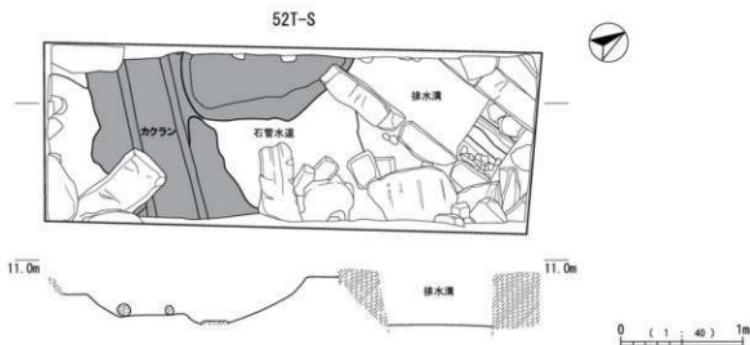
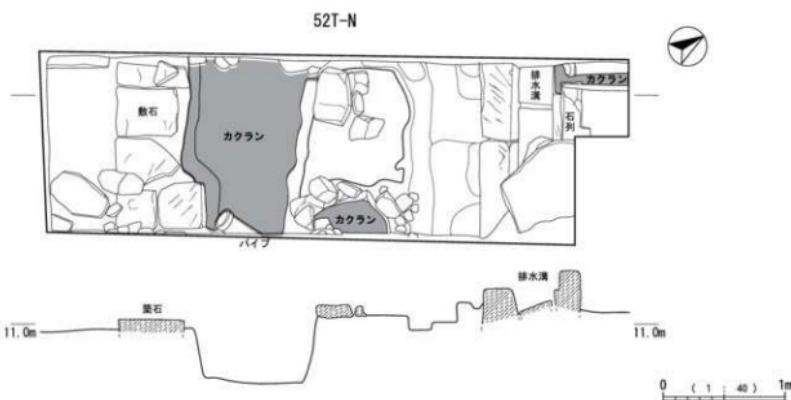
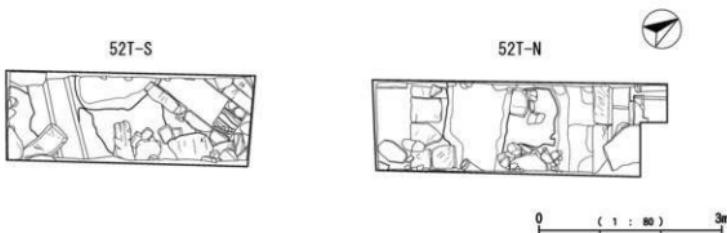
排水溝の規模は、幅約50cm、深さ約30cmである。築石は溶結凝灰岩で、表面が平滑に調整されている。北堀に面した石垣との平行になる。若干、移動している状況が認められたものの、蓋石状の板石が出土したことから、暗渠排水であった可能性がある。排水溝の南側には、城山削を利用した造成層がある。赤茶褐色を帯びており、排水溝を流れた水に含まれる鉄分の影響と考えられる。

#### （2）敷石（第6図・第7図）

トレンチ中央では、3cm～拳大の溶結凝灰岩製の平石や碎石があり、敷石として敷設されたことと考えられる。

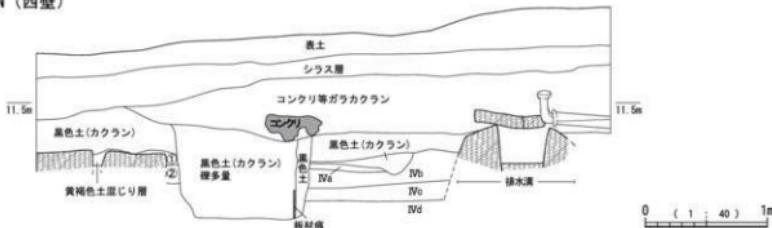
#### （3）石列（第6図・第7図）

トレンチ南端では、南側面に平滑面がある石列を検出した。上面は加工が施されていないことから、さらに上位に同様の切石が重ねられていたものと考えられる。面形状から石段の基壇にあたる可能性がある。

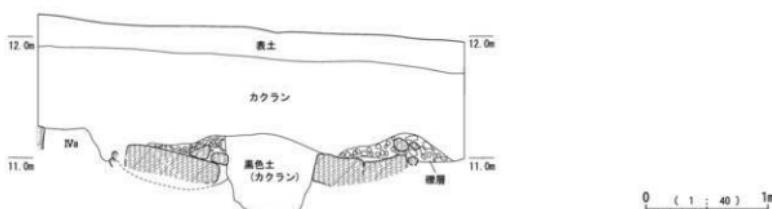


第6図 52トレンチ-S・52トレンチ-N 遺構平面図・断面図

52T-N (西壁)

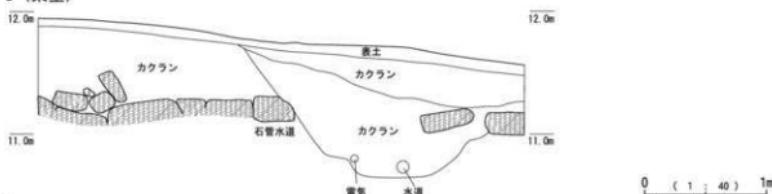


52T-N (東壁)

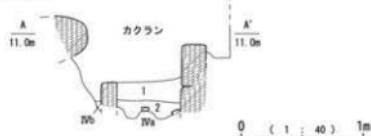


層	色(記号)	色名	特徴
IV a	10YR5/6	黄褐色土	橙色ブロックを含み粘質。シルト質混じり(城山層)、近世の造成土
IV b	10YR5/6	黄灰色土	砂質土。城山層混じり、近世の造成土
IV c	10YR5/6	黄褐色土	砂層。近世の造成土
IV d	10YR7/2	にぶい黄褐色土	砂層。軽石混じり、近世の造成土

52T-S (東壁)

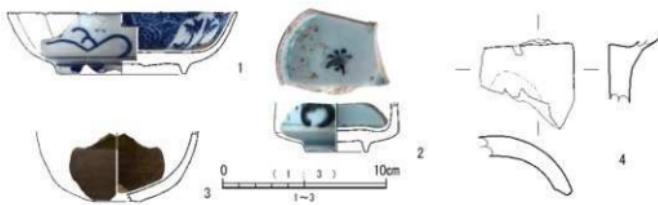


52T-S  
排水溝断面



層	色(記号)	色名	特徴
1	10YR4/1	黄灰色土	砂質土。排水に伴う埋土(水成堆積)溝埋土
2	10YR5/6	黄褐色土	I層に1~3cmの亜角礫~円礫と混じって排水溝底面を作り出す(石敷でない石組排水溝)初めてかも。時期不明。溝埋土
IV a	2.5YR7/1	灰白色土	粘土。均質。周辺の擾乱坑から地山ではなく排水溝に伴う粘土面土。近世の造成土
IV b	10YR3/2	黒褐色土	5~10cmの礫を充填(裏栗)。近世の造成土

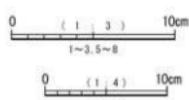
第7図 52トレンチ-S・52トレンチ-N 土層断面図



38 トレンチ・39 トレンチ・40 トレンチ



52 トレンチ



0 ( 1 3 ) 10cm  
1~3, 5~8

0 ( 1 4 ) 10cm  
4, 9~16

第8図 御進物藏跡 出土遺物

## 52 トレンチ-S（第5～8図）

52 トレンチ-Sは、52 トレンチ-N の1.2m南に設定した。

**概要** 表土・擾乱が約30～70cmあり、遺構等を標高11.2～10.9mで検出した。

南側に深い擾乱があり、ポリ塩化ビニル製の水道管や、電気配線敷設に伴うジャバラホースが出土し、標高11.2m前後で凝灰岩製の平石を検出した。最下位に城山層が混ざる造成土を確認した。

**遺構** 北側に排水溝、中央に水管水道を確認した。

### （1）排水溝（第6図・第7図）

幅60cm、深さ50cmで東西方向に伸びる。標高は10.9mである。底石は確認されていないが、底面を掘り下げた結果、側石に伴う栗石を確認した。

### （2）水管水道（第6図・第7図）

35cm四方の凝灰岩を円筒状にくり貫いている。

調査区では約60cmを確認した。

### 出土遺物（第8図5～16）

52 トレンチ-N・52 トレンチ-Sでは、遺物は近代以降の擾乱土中から出土した。多くは小片である。そのため、ここではまとめて記載する。

5～8は、陶磁器である。5は、堅野系の白磁と呼ばれる白色陶胎の碗である。絶縁で、疊付は釉剥ぎされる。18世紀～19世紀。6は、堅野系の三島手と呼ばれる象嵌陶器の小碗である。17世紀後半～18世紀。7は、關西系の陶器碗である。内面中央部は丸く産む。外面には松文が描かれるが、高台周辺は露胎。18世紀。8は、苗代川系の陶器甕である。18世紀後半。9～15は、瓦である。9は、連珠三巴文軒丸瓦（A-024）である。瓦当面には雲母子が目立つ。瓦当裏面は縱方向のナデ調整。10・11は、桟瓦。10は、大坂式軒桟瓦（A種不明）である。瓦当左縁に四角に不明文字（刻印063-2）がある。瓦当上端は面取りされる。11は、大坂式軒桟瓦（B-057）である。表面に雲母子が目立つ。瓦当上端・下端は面取りされる。12は、17世紀代の古瓦の丸瓦である。圓面端部が面取りされる。13は、陶器瓦の平瓦である。破片だが、圓面が釉尻ハート型に施釉される田ノ浦窓跡系であると考えられる。14は、17世紀代の古瓦の平瓦である。產地は不明だが、胎土が茶褐色を呈しており、薩摩以外で生産されたものと考えられる。15は、近代のプレス瓦の袖瓦である。圓面に刻印があるが、刻印番号は不明である。16は、堀瓦である。側面に丸に不明文字の刻印（刻印063-1）がある。

### 小結

今回は、建物に伴う礎石等の基礎構造は確認されなかつたが、52 トレンチ-N・52 トレンチ-Sで排水溝が石垣と平行に確認された。出土遺物は大半が18世紀以

後の陶磁器・瓦であり、確認された遺構は、元禄9（1696）年の大火以降のものであると考えられる。保存目的の調査であるため、最上部の遺構で調査を止めることから、この遺構が明治6（1873）年「鹿児島城本丸殿舎配置図」に描かれた遺構に関連する可能性が高い。

本丸跡では、多聞櫓型式の御兵具所跡の遺構が確認されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター-2020）。御兵具所跡では、本丸側の建物壁際に排水溝を廻らせており、絵図での描かれ方がから、御進物藏も御兵具所跡と同様の構造であったと考えられる。そのため、52-N トレンチの排水溝は、御進物藏に外側を巡る排水溝であり、建物は、排水溝の北側（石垣側）にあつたと考えられる。

石垣天端から、52-N トレンチの排水溝までの距離は、約6mであり、これが、御進物藏の建物の幅であったと考えられる。この幅は、後述する51 トレンチで推定される石垣天端から御兵具所跡外側の排水溝までの距離と同等である。そのため、御進物藏跡は、御兵具所跡同規模の建物であったと考えられる。

## 2 北御門跡周辺（第9～21図）

**概要** 「北御門」は、鹿児島城内で役人が業務にあたるために利用する通用門（登城門）とされる。

元禄9（1696）年「鹿児島城跡絵図控」（第144図②）等の複数の絵図では、本丸北側の城壁に沿って造られた長屋状の建物と一体化した門が描かれ、元禄9年の大火では焼失したとの記録が残る。また、宝暦5（1755）年の天保14（1843）年「天保年間鹿児島城下絵図」（第145図⑥）や明治5（1872）年の古写真では、東側の御兵具所跡とも一体となっており、19世紀代には、東西両方の多聞櫓形式の建物と一体となつた門であったと考えられる。

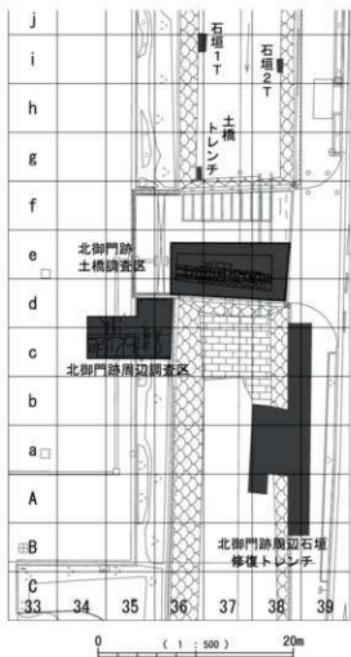
今回の調査は、「北御門」の周辺遺構の現存状況を確認するとともに、北御門跡周辺石垣の背面構造を確認するためを行った。また、18世紀までの絵図では土橋で描かれる北御門橋（現在は土橋として残存）が、天保14（1843）年「天保年間鹿児島城下絵図」では木橋として描かれており、現在の「土橋」がいつ造られたか、黎明館建設時に石製欄干設置のための工事の影響の有無といった北御門橋の築造時期や北御門跡周辺の石垣の状態や下部構造を確認するための調査を行った。

### （1）石垣の下部構造確認のためのトレンチ

#### ①石垣1 トレンチ（第10図）

**概要** 北御門跡西側の本丸跡側に設置した。

上部の石垣は、鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画（鶴丸城御門建設委員会／鹿児島県 2016）では、精加工石材の布崩し積み②「規格石材を利用し、横列に近づけるように積んでおり、横目地が通っている。完全な間開



第9図 北御門跡周辺・北御門跡周辺石垣修復調査区トレンチ配置図

石積ではない。製加工石材を利用し、多角形の石材を混用した「合端」合わせの積み方である。」となっている。石材は溶結凝灰岩だが、鉢石にはそれ以外の石材も含まれている。石垣上部には、排水口が設けられている。

#### 石垣下部構造

現在の地表面から、約1m掘り下げた。下部構造の確認を目的とし、現在の堀地表面から下4段を確認したが、胴木の確認にまでは至らなかった。石垣は、布崩し積みを施工するが、地上の石垣に比べて築石に企画性はなく、大きさはばらばらである。また、一部築石は、排水口からの排水により摩耗していた。石垣はさらに下まで築かれており、現在の堀は、石垣構築時よりも埋まっていることが確認できた。

#### ②石垣2トレンチ(第10図)

**概要** 石垣2トレンチは、石垣1トレンチの対岸であるi-38区に設定した。石垣の積み方は、石垣1と同じく

精加工石材の布崩し積み②であるが、築石は小型で加工が甘く、築石間の間隔が広がっている場所がみられる。石材は、溶結凝灰岩である。

#### 石垣下部構造

現在の地表面から、約1m掘り下げた。下部構造の確認を目的とし、現在の堀地表面から下3段を確認した。その下には胴木は確認されていないことから、この石垣は、底盤の砂層に直接築かれていることになる。石材は、溶結凝灰岩である。

築石は、直方体の切石を布崩し積み状に積み、頁岩等の間詰石を入れ込んでいる。下部では切込み剥ぎが見られる。

#### ③土橋トレンチ(国版1-7)

**概要** 石垣と北御門橋の西側付け根のg-36区に設定した。石垣と北御門橋の接合部分の確認を目的としたトレンチである。築石は、規格性が高く、切石の目地を挿えた布崩し積み石垣である。下層部においても、本丸跡側石垣に北御門橋の石垣が載っていることから、現在の北御門橋は、本丸跡北側の石垣構築後に築かれたと考えられる。

#### (2) 北御門跡土橋調査区(第11図・第12図)

**概要** e-d-36～38区にあたり、昭和53・54年度の調査で、城内から城外へ延びる暗渠排水溝や石疊。石段等を検出した地点である。

今回の調査は、黎明館建設時の工事の影響等による孕みの確認と排水溝の残存状況確認を行った。

#### ①排水溝(第11図)

排水溝の蓋石は幅90～120cm、奥行き40～60cm、厚さ約25cmで、溶結凝灰岩製である。表面には粗い駆調整が見られる。暗渠排水溝の内側は、60～70cmの四角形平石が底石になり、長さ70～120cm、厚さ20～30cm側石を約70cm幅で組み立て、隙間を漆喰で埋めている。底石の勾配は約5度で、入口に若干の崖みがある。暗渠の蓋石から底石の高さは約20cmを測る。

#### ②下層確認調査

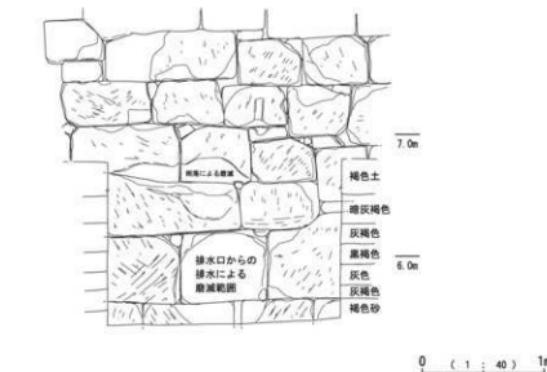
暗渠排水溝の両脇で下層確認を実施したところ、栗石等は確認されなかつた。また、東側石垣で、孕み等の確認のため、石垣裏の確認調査を実施した。石垣裏はコンクリートで固め、円礫の裏込めが約20cm詰められていた。石垣の膨らみが元の傾斜に積み直されていたため、崩落の可能性は少ないことを確認した。

#### (3) 北御門跡周辺調査区(第13図)

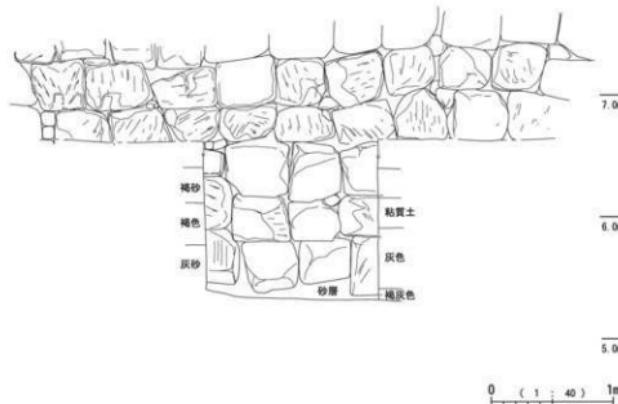
**概要** 石垣の背面状況確認のためのc～d-34～36区の調査である。北御門東側の城内にあたる。6×11.5mのトレンチを基本に、北西側に2×3.5m広げた。

**遺構** 溶結凝灰岩で造られた排水溝2列と石垣の裏栗込

### 石垣 1 トレンチ



### 石垣 2 トレンチ



第 10 図 北御門跡周辺トレンチ 石垣立面図

め、建物基礎石列を確認した。調査区南側では、鹿児島大学医学部時代のガスメーター室があった場所で（1969『鹿児島大学二十五年史』），鉄管を検出したほか、径約4mの方形の窪みを確認した。

#### ①排水溝 1（第 14 図）

排水溝 1 は、幅約 50 cm、深さ約 20 cm で、底石は 50 × 70 cm の溶結凝灰岩を 1 列敷いている。側石の厚みは北側が約 20 cm、南側は約 10 cm である。

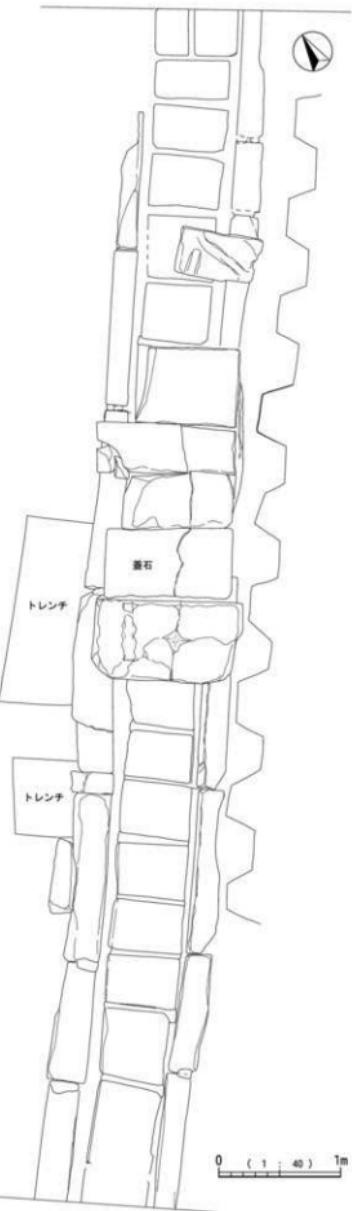
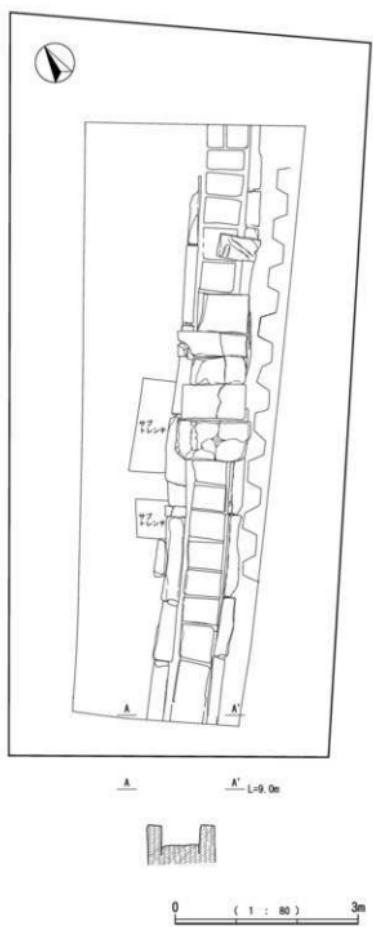
#### ②排水溝 2（第 14 図）

排水溝 2 は石垣から約 2 m 南側で、石垣と平行に検出

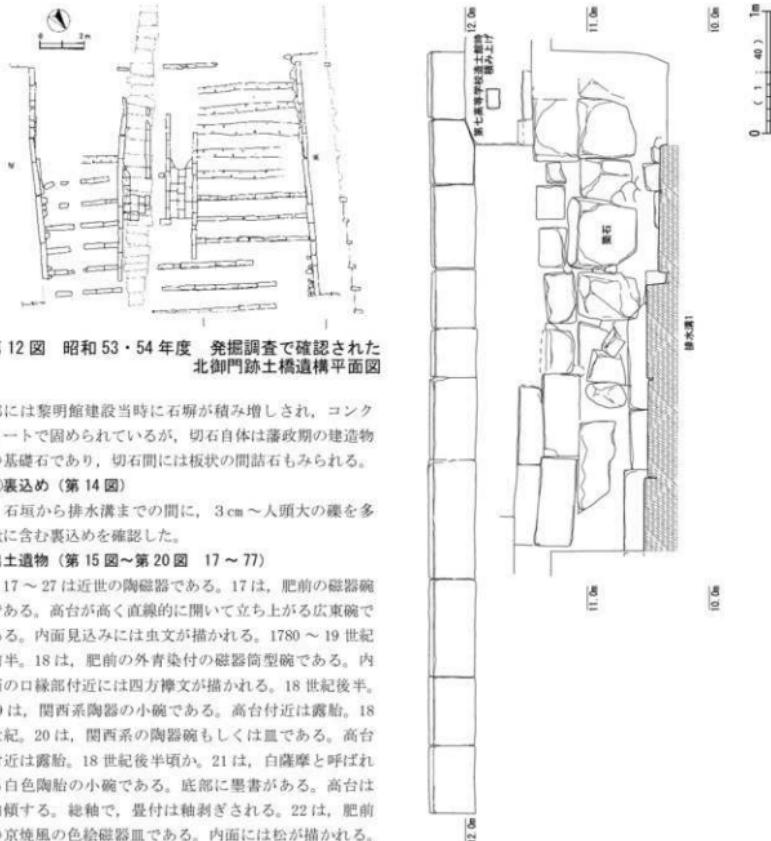
した。排水溝内面の幅 90 cm の中に、幅 20 ~ 50 cm の板石を 2 枚敷いて底石とした部分と、幅 90 cm の板石が 1 枚のみの部分があった。側石の厚さは 20 cm 前後で、排水溝の深さは約 30 cm である。排水溝は、後世の水道管敷設等による擾乱を受け、コンクリートブロックも出土している。

#### ③建物基礎石列（第 14 図）

石垣と北御門の境には、切石が 3 石列配置されている。東側の切石は御兵具跡の建物基礎石で、西側の切石が北御門の基礎石にあたる可能性がある。現在、基礎の上



第11図 北御門跡 土橋排水溝平面図



第12図 昭和53・54年度 発掘調査で確認された  
北御門跡土橋遺構平面図

部には黎明館建設当時に石礎が積み増しされ、コンクリートで固められているが、切石自体は藩政期の建造物の基礎石であり、切石間に板状の間詰石もみられる。

#### ④裏込め（第14図）

石垣から排水溝までの間に、3cm～人頭大の礎を多量に含む裏込めを確認した。

#### 出土遺物（第15図～第20図 17～77）

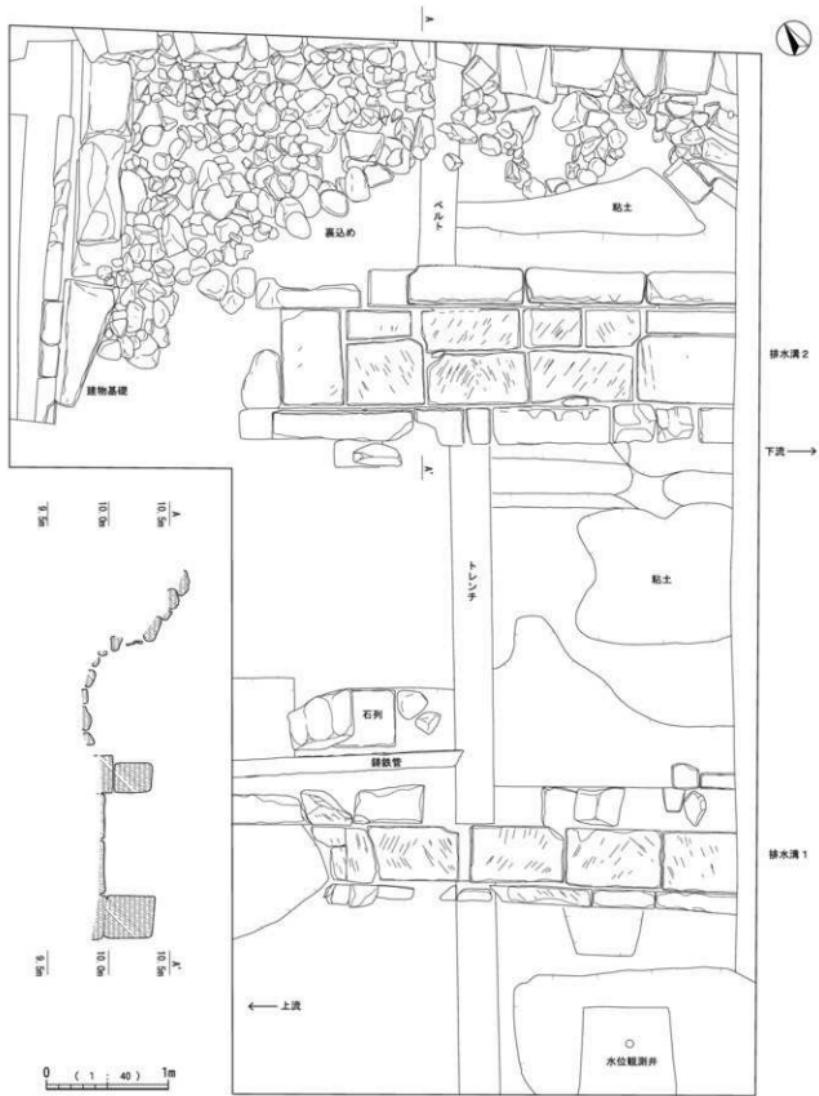
17～27は近世の陶磁器である。17は、肥前の磁器碗である。高台が高く直線的に開いて立ち上がる広東碗である。内面見込みには虫文が描かれる。1780～19世紀前半。18は、肥前の外青染付の磁器筒型碗である。内面の口縁部付近には四方攢文が描かれる。18世紀後半。19は、関西系陶器の小碗である。高台付近は露胎。18世紀。20は、関西系の陶器碗もしくは皿である。高台付近は露胎。18世紀後半頃か。21は、白薩摩と呼ばれる白色陶胎の小碗である。底部に墨書がある。高台は内傾する。統釉で、疊付は釉剥ぎされる。22は、肥前の京焼風の色絵磁器皿である。内面には松が描かれる。1690～18世紀第2四半期。23・24は、堅野系の灰色陶胎の碗である。高台付近は釉剥ぎされる。18世紀後半～19世紀。25は、苗代川系の陶器土瓶蓋である。外面は暗緑色の釉薬が掛かる。18世紀後半以降。26は、堅野系の陶器蓋物の向付か。内面と高台上の張り出した部分の側面のみ灰色の釉薬が掛かる。本来は蓋が付いていたと考えられる。18世紀。27は、苗代川系の陶器甕。口縁部上面は露胎。外面には工具によるヨコナデが残る。18世紀～19世紀。

28～33は近代の陶磁器である。28・29は、磁器鉢。植木鉢か。外面は口縁部付近を除いて露胎。口縁部上端～外面にかけて、竹もしくは笹が描かれる。30は、信楽系の陶器便器か。内面・外面は施釉される。31は、薩摩磁器皿である。内面・外面は紙型刷りで草花文が描

第13図 北御門跡周辺調査区 北壁立面図

かれる。高台内側は蛇の目釉剥ぎされる。32は、肥前系の青磁染付小皿もしくは小鉢。型作りである。33は、肥前系の磁器碗。統制食器。高台まで統釉で内面には織、外面には扇の周間に TRADE MARK と書かれる。

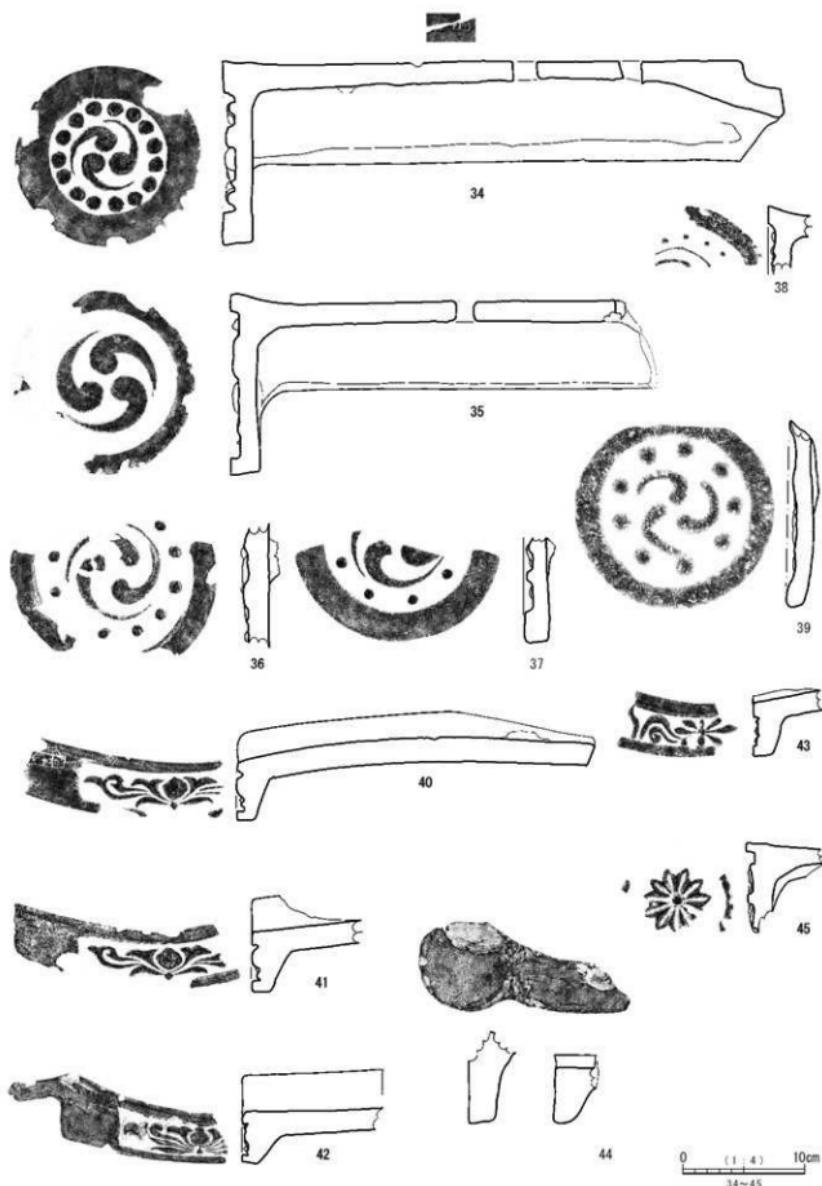
34～64は瓦である。34は、連珠三巴軒丸瓦(A-009)である。瓦当周縁部は広い。瓦当は小さいが、丸部は長く、中央部に直径3cmの釘穴が焼成前に穿たれている。瓦当裏面には強い接合ナデ。丸瓦部凸面には縱方向のナデ、尻部はヨコナデ調整である。凹面には、布袋痕が残る。35は、連珠三巴軒丸瓦(A-012)である。丸瓦部凸面には縱方向のケズリ。丸部中央部には、焼成後に直径3cmの釘穴が穿たれている。36は連珠三巴軒



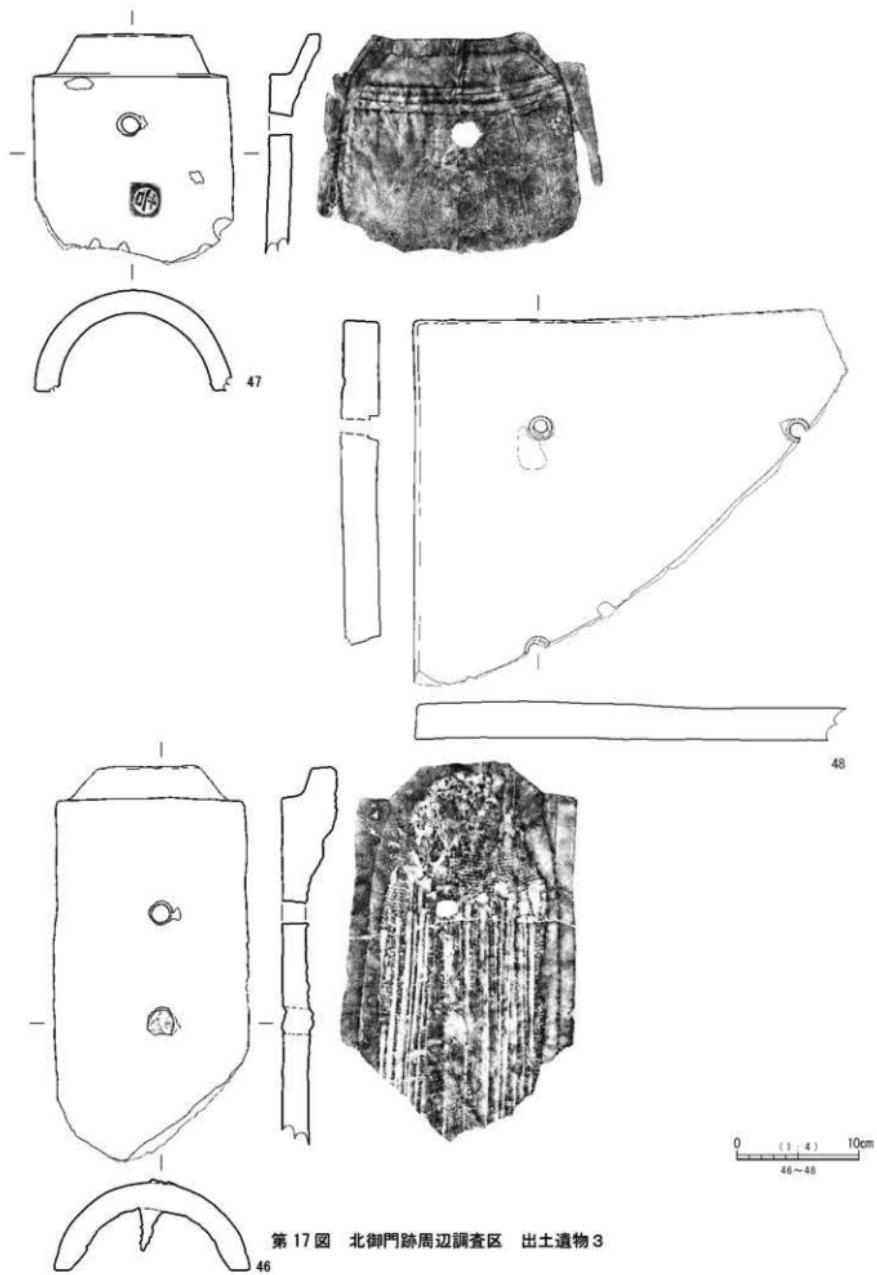
第14図 北御門跡周辺調査区 平面図・断面図



第15図 北御門跡周辺調査区 出土遺物 1



第16図 北御門跡周辺調査区 出土遺物 2

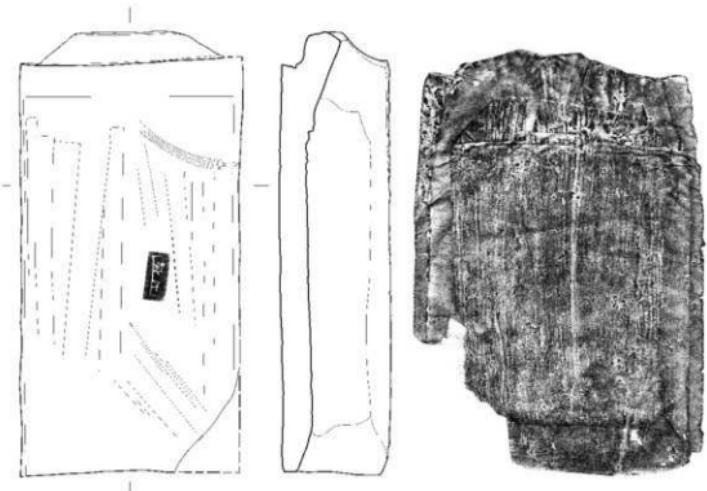


第17図 北御門跡周辺調査区 出土遺物3

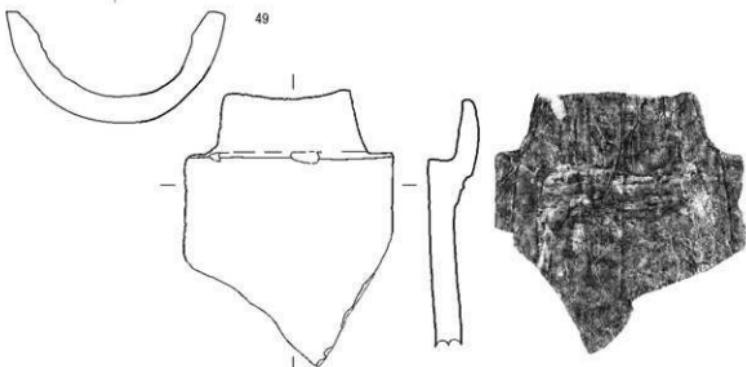
46

0  
(1 : 4)  
46-48

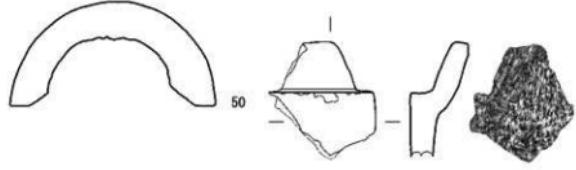
10cm



49



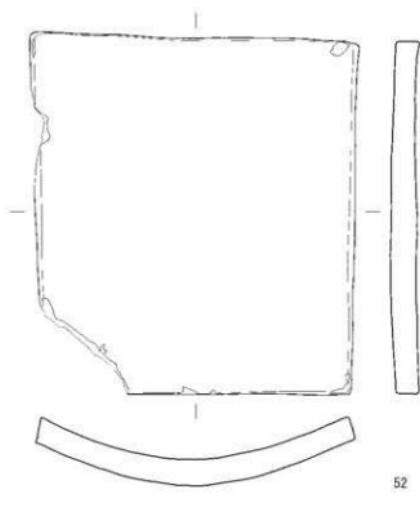
50



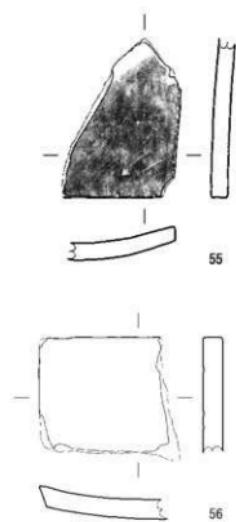
51

0 (1 : 4) 10cm  
49-51

第18図 北御門跡周辺調査区 出土遺物4

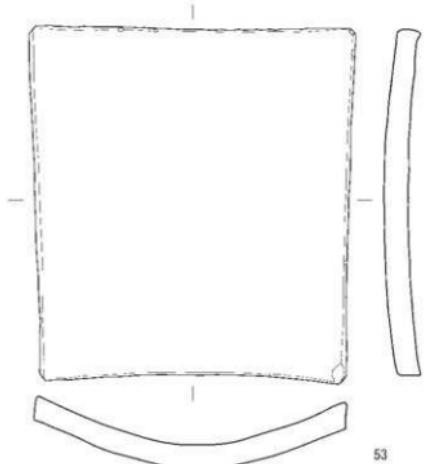


52

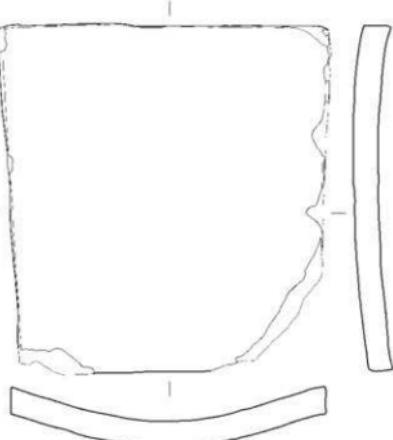


55

56



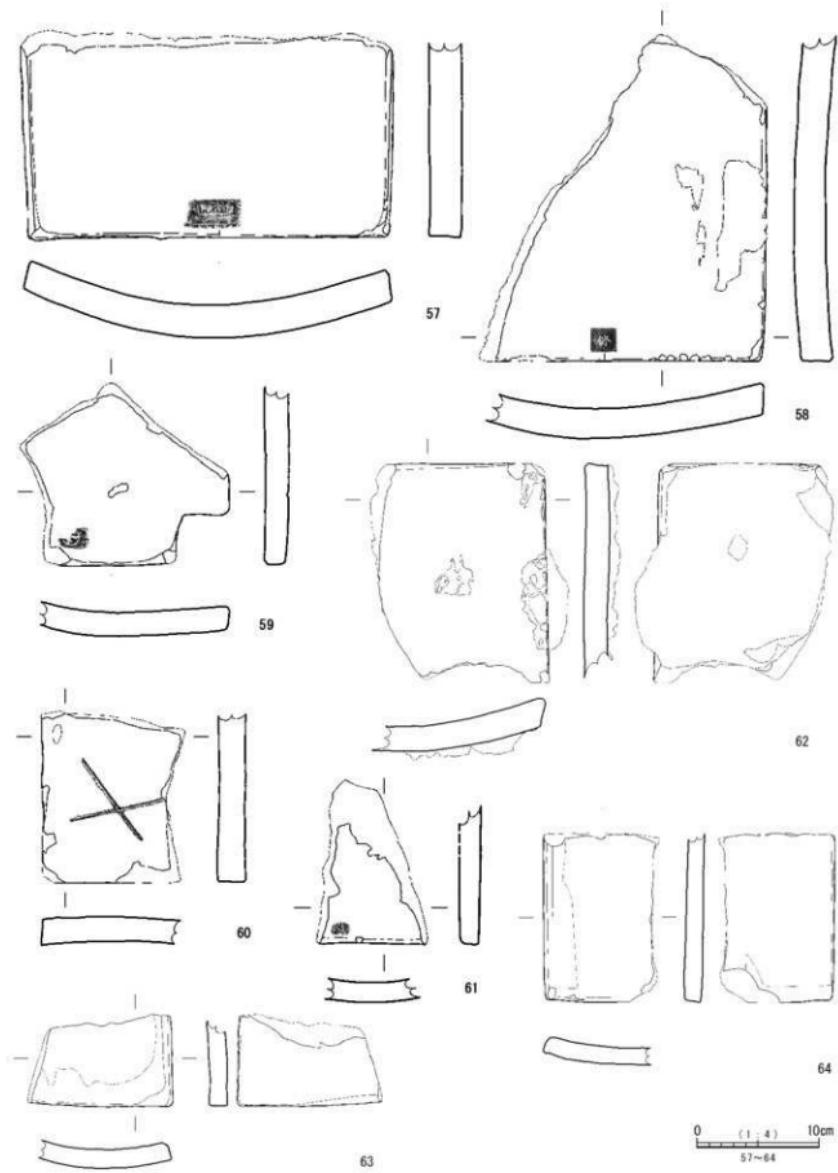
53



54

0  
10cm  
(1 4)  
52~56

第19図 北御門跡周辺調査区 出土遺物5



第20図 北御門跡周辺調査区 出土遺物 6

0 (1/4) 10cm  
57-64



第21図 北御門跡周辺調査区 出土遺物 7

丸瓦（A-016）である。37は、連珠三巴軒丸瓦（A-031）である。焼成は良好で、他の瓦と比べると、黒色を呈する。周縁はやや広い。薩摩以外で生産された可能性がある。38は、連珠三巴文軒丸瓦（不明）である。灰白色の胎土を呈しておらず、長崎で製作されたと考えられる。39は、連珠三巴文軒丸瓦（不明）である。全体が摩耗している。丸部との接合面にはキザミを入れる。40は、大坂式軒平瓦（A-045）である。瓦当周縁左側には、四角に太喜（刻印001）がある。瓦当上端および瓦下端の裏側は面取りされる。また、凹面の周縁も面取りされる。凹面は縱方向のナデ調整、41は、大坂式軒平瓦（A-045）である。瓦当上端・下端、下端裏側は面取りされている。凹面は、縱方向のナデ調整である。42は、大坂式軒桿瓦（A-058）である。瓦当上端は幅広に面取りされる。43は、その他の軒桿瓦（D-045）である。熊本城跡でも類似した范のものが出土している。周辺地域で製作され、広い地域に広がった范であるか、同じ范が広い地域で使用された可能性がある。范瓦当上端は狭く面取りする。雲母子が目立つ。44は、その他の軒桿瓦（不明）である。瓦当上端は面取りされる。雲母子が目立つ。45は小菊瓦（K-02）である。46は、軒丸瓦である。瓦当は欠損している。中央部付近には、焼成前に直径約3cmの釘穴が穿たれており、瓦当側の釘穴には、釘が残っている。凹面は、尻側の一部に布袋痕が残るが、それより頭側はケズリ調整が施され、布袋痕は消えている。47は、軒丸瓦である。瓦当は欠損している。尻側に焼成前に直径約4cmの釘穴が穿たれている。凸面中央には丸に浮彫りで吉（刻印046-6）の刻印がある。48は、海鼠瓦である。大型であるが、御樓門跡周辺で出土するものよりもやや薄い。北御門周辺や御兵具所等の建物の裝飾として使われた可能性がある。隅近くに焼成前に釘穴が穿たれる。周縁部は面取りされる。49は、丸瓦（樓門A類）である。凸面中央には、四角に太宗の刻印（刻印003）がある。凸面は、玉縁はヨコナデ、その他には縱方向のケズリの痕跡が明瞭に残る。凹面は、ナデ調整により布袋痕はわずかに残るのみである。頭側は、端部に向かつて薄くなる。50は、丸瓦である。玉縁は長い。凸面は、玉縁はヨコナデ、その他は縱方向のケズリまたはナデ調整。51は、17世紀代の古瓦の丸瓦である。黒色で小型、焼成はやや不良である。凸面には縱方向のケズリ痕、凹面には布袋痕が残る。52・53・54は、平瓦（樓門F類）である。尻側に向かつて幅が狭くなる。凹面周縁は面取りする。凸面は縱方向のケズリ調整である。54は、凹面・凸面両方に炭化しており、赤く変色した被熱瓦である。55は、17世紀代の古瓦の平瓦である。黒色で小型、焼成はやや不良である。凹面・凸面に工具による刷毛目痕が残る。56は、平瓦である。灰白色的胎土で雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。57・58

は、大型の平瓦である。凹面周縁は面取りする。57は頭側面に四角に玉水堂の刻印（刻印005）があり、58は頭側面〇に体の刻印（刻印039-3）がある。59は、桟瓦である。凹面の凹面周縁は面取りする。側面に〇に平の刻印（刻印052）がある。60は、海鼠瓦である。斜め方向のナデ調整痕が残る。隅の近くに「×」のような字が刻書されている。61は、桟瓦である。凹面上端は面取りされる。〇に嶋の刻印（刻印180）がある。62は、平瓦である。火災瓦である。凹面は赤く変色しており、凸面には焼けた漆喰が張り付いている。明治6（1873）年の大火に伴うものか。63・64は、陶器瓦の平瓦である。粘土堆积み上げ調整。63は軸尻ハート型に軸薬を2条もしくは3条で流し掛けられている、田ノ浦窯系の軸薬瓦である。凹面は縱方向の筋状の調整痕が残り、周縁は面取りされている。凸面には粘土紐を巻き上げの際の凹凸が残り、工具による縱方向のナデ調整が残る。64は、63と同様の特徴をもち、軸薬が筋状に掛けられていることから、田ノ浦窯系の陶器瓦と考えられる。

65は、瓦質の環状土製品である。口縁部内側には、四角に栗原式の刻印がある。66は、埴塙である。内部には、固まった物質が充填されていた。蛍光X線分析の結果、充填物については、ガラス（鉛ガラス）に関連する物質である可能性がある（第IV章第3節）。近世のものとすれば、鹿児島城跡では、二之丸で科学実験を行っており、そうした実験などに関わる遺物である可能性がある。

67は、銅錢である。琉球通寶である。直径4.35cmと大型の铸造錢である。琉球通寶とは、文久2（1862）年に薩摩藩が琉球救済の名目で幕府に3年間の期限付きで铸造する許可を得て同年8月に铸造した。半朱は文久3（1863）年に铸造され、1両の32分の1の頭面を持つ銅錢である。成分は主に銅と鉛。鎌で構成される。指宿市河内山鉱山跡で出土している（鹿児島県立埋蔵文化財センター-2018）。琉球通寶は、二之丸で製造実験を行っており、その実験に関連する可能性がある。68は、薄手の古銭である。麻食が進み、銘文は判読できない。

69・70は骨製品の歯ブラシの柄である。69にはライオン〇歯刷子〇と刻印があることから、昭和2（1927）年～昭和14（1941）年製造の、株式会社小林商店（現：ライオン）の歯ブラシであると考えられる。

71～77はガラス製品。71は、水ハミガキ。ライオンのエンボスがある。口縁部に維ぎ目が見られない形状から昭和10（1935）年前後の物か。72は、大阪宇野製外用サリチール水とのエンボスがあるため、当時の皮膚科で皮膚真菌症の治療薬として使用したサリチル酸コロチウムの瓶ではないかと考えられる。73は、本舗山田安民ロート目薬とエンボスがある。信天堂山田安民薬房（現：ロート製薬）製の目薬である。この瓶では明治42

(1909) 年～昭和 6 (1931) 年頃。74 は、美濃水のエンボスがある。桃谷順天館 (現：明色化粧品) の製品で、瓶の形状から、明治 18 (1885) 年～明治 35 (1902) 年までの発売当初のものである。当初、薬として販売された化粧水である。75・76 は、白髪染めの瓶である。スクリューキャップであるため、少なくとも昭和 35 (1955) 年以降か。77 は、密閉容器であり合わせの蓋がついている。底部の記号から山村硝子 (現：日本山村硝子) の製品である。

### 小結

調査区は、宝曆 5 (1755) 年の天保 14 (1843) 年「天保年間鹿児島城下絵図」(第 145 図⑥) 等の御兵具所跡がある。建物基礎石列は、その北西端にあたる可能性がある。御兵具所跡の幅は、石垣天端から排水溝 1 までの約 6m であると考えられる。排水溝 2 は、石垣や排水口に到達せず、途中で途切れていることから、元禄 9 (1696) 年「鹿児島城絵図」(第 144 図②) 等に描かれる堀の段階の排水溝の可能性がある。その場合、堀の幅は約 1.8m が想定される。

### 3 北御門跡周辺石垣修復 (第 22 図～第 33 図)

**概要** 平成 27 年 6 月に本丸と北堀を挟んで対岸の北御門跡周辺石垣の一部が崩落し、同年 12 月までに応急工事を実施した。翌 28 年度には修復工事に係る調査、測量、設計を計画し、平成 30 年度に設計、令和元年にボーリング調査を実施した。令和 2 年度には、石垣の修復工事が行われることとなり、崩落した石垣の修復復元工事に先立ち、石垣と背面構造、堰幅の確認を目的とした調査を計画・実施した (第 29 図)。掘削部分の道路側は矢板により補強し、土層崩落防止対策を講じた。調査は北御門跡周辺の石垣崩落箇所の歩道と堀を含めた長さ約 20m、幅約 4m の範囲で実施した。発掘調査は、石垣の解体工事と同時並行で行い、2か所にベルトを残しながら、石垣を 3～5 段取り外し、その都度平面遺構検出・石垣背面構造の確認を行いながら掘り下げた。石垣は本丸北堀の下まで埋まっていたため、石垣前面にあたる本丸北堀の一部についてもトレチを設定し、掘り下げた。平面図は必要箇所にとどめ、石垣の土層断面図については、各工程で随時作成し、最終的に接ぎ合わせて完成させた。

石垣は、布崩し積み石垣と谷崩し積み石垣の接合部分で崩落していたことが確認できた。それぞれの背面構造を記録するため、それぞれの石垣に 1 か所ずつ、2 組の計 2 か所のベルトを残しながら、発掘調査を行った。

**調査成果** 発掘調査の結果、布崩し積み石垣・谷崩し積み石垣とその背面構造、石垣構築以前の堀と考えられる腐植土層・ユリカス層などが確認され、3 段階の石垣構築過程とそれぞれの背面構造が明らかになった。

#### ①谷崩し積み石垣 1 段目・布崩し積み石垣 1 段目 (第

#### 24 図①・第 28 図・第 29 図)

##### 布崩し積み石垣 1 段目背面

現代の擾乱で削平されているが、幅約 1m の裏込めが残存していることを確認した。裏込めは、拳大～人頭大の礫が隙間なく充填されており、礫の中には石垣の石材の破片など、加工されたものも多く含まれていた。布崩し積み石垣では、裏込めは 1 段目しかなく、下段に続かない。1 段目のみが新しく積み直された石垣と考えられる。

##### 谷崩し積み石垣 1 段目背面

谷崩し積み石垣は、最大長約 50cm、幅約 50cm の三角柱の石材を用い、その間に裏込めが充填される。裏込めは現代の擾乱で削平されているが幅約 1m は残存している。谷崩し積み石垣の裏込めは、谷崩し積み石垣最下段まで続いている (第 29 図 X a 層)。裏込めの中には、拳大～人頭大の角礫とともに、被熱して溶けた近代のガラス片やコンクリート片、陶磁器、瓦が多く混じる。近世の陶磁器も含まれてはいるが、近代以降の火災の片付け層を裏込めに使用したと考えられる。

#### ②布崩し積み石垣 2 段目・3 段目 (第 25 図②・第 28 図)

##### 布崩し積み石垣 2・3 段目背面

2 段目は、長さ約 80cm、幅約 30cm の長方形の石材を用いる。本来は、石垣最上段の地覆石であると考えられる。3 段目は、長さ約 60～90cm、幅約 50～60cm の長方形の石材を並べている。どちらにも裏込めは充填されない。

#### ③布崩し積み石垣 7 段目 ④布崩し積み石垣 10 段目 (第 25 図③・④・第 28 図)

##### 布崩し積み石垣 7 段目 (第 25 図③・第 28 図)

布崩し積み石垣 7 段目は、長さ約 60～90cm、幅約 30～60cm の長方形の石材を並べている。背面に裏込めは充填しない。調査区北側に泥炭層 (X V 層) を確認した。この泥炭層は、西側まで広がっていたため、10 段目まで石垣を解体した後で、調査区全体で遺構検出を行った。

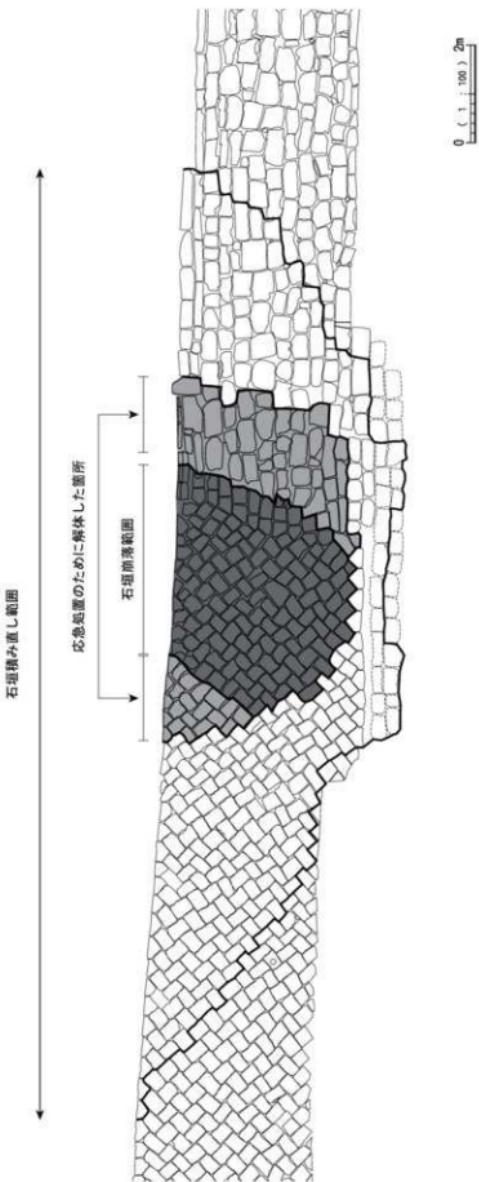
##### 布崩し積み石垣 10 段目 (第 25 図④・第 28 図)

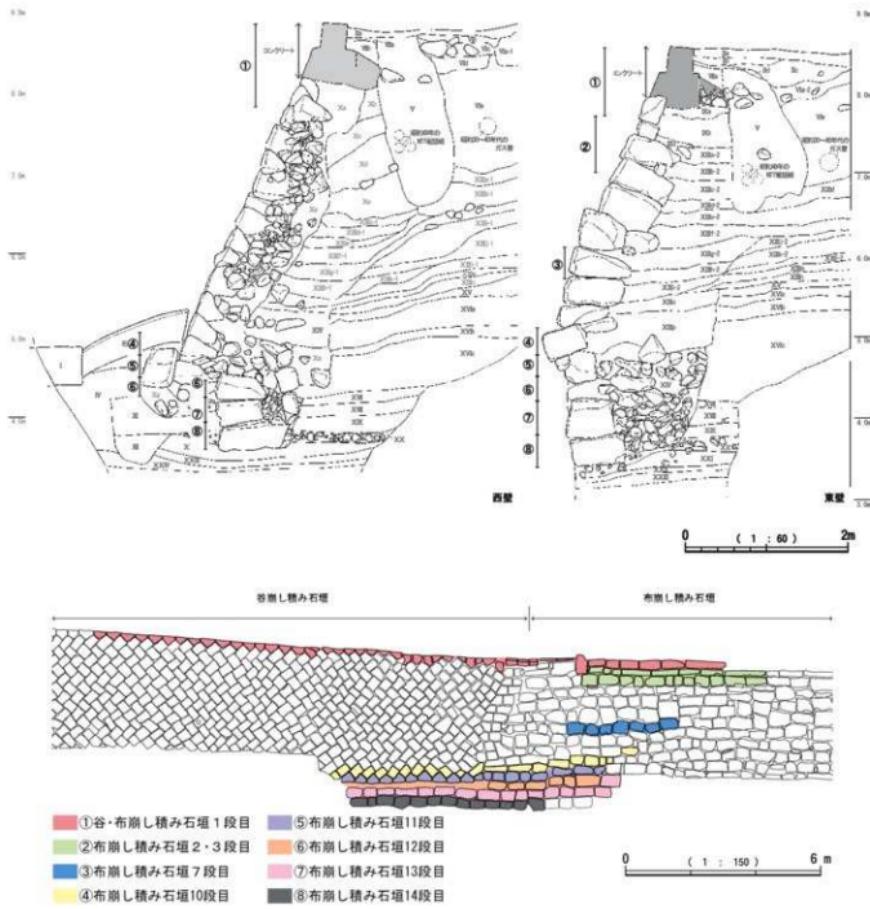
布崩し積み石垣 10 段目は、長さ約 50～60cm、幅約 30～60cm の長方形の石材を並べている。背後に裏込めは充填しない。この背面の X III p 層から出土した、89～105 の瓦は、すべて 17 世紀前半～後半のものと考えられることから、布崩し積み石垣の構築時期は 17 世紀後半以降に下る可能性がある。

##### 石垣前段階の堀 (旧本丸北堀)

布崩し積み石垣、谷崩し積み石垣北側では、標高約 5.7m で長さ 11.8m、幅 21.6m に渡って泥炭層 (X V 層) を確認した。その泥炭層より下は、自然堆積層になってしまっており、本来は、この泥炭層の上を水が流れていったと

第22図 北御門跡周辺石垣修復調査区 立面図





第23図 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図 平面図 作成石垣位置図

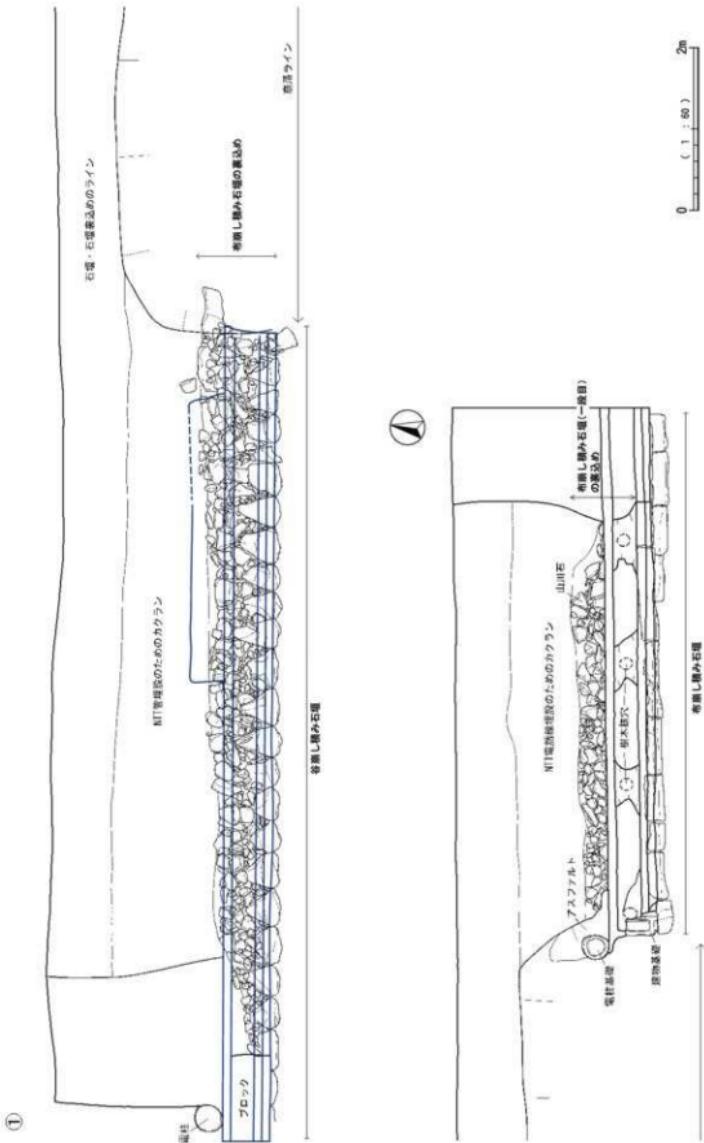
考えられる。土層の観察から、布崩し積み石垣は、この泥炭層の南側（本丸側）を160cmほど掘り下げてから構築されている。また、炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、堀で出土した炭化物の年代は1504年～1697年の可能性が最も高い（第IV章第2節）。その年代に、この泥炭層は形成されていた可能性が高い。布崩し積み石垣の構築時期が17世紀後半以降であると考えられることから、この泥炭層が鹿児島城築城時の本丸北堀の底面であったと考えられる。

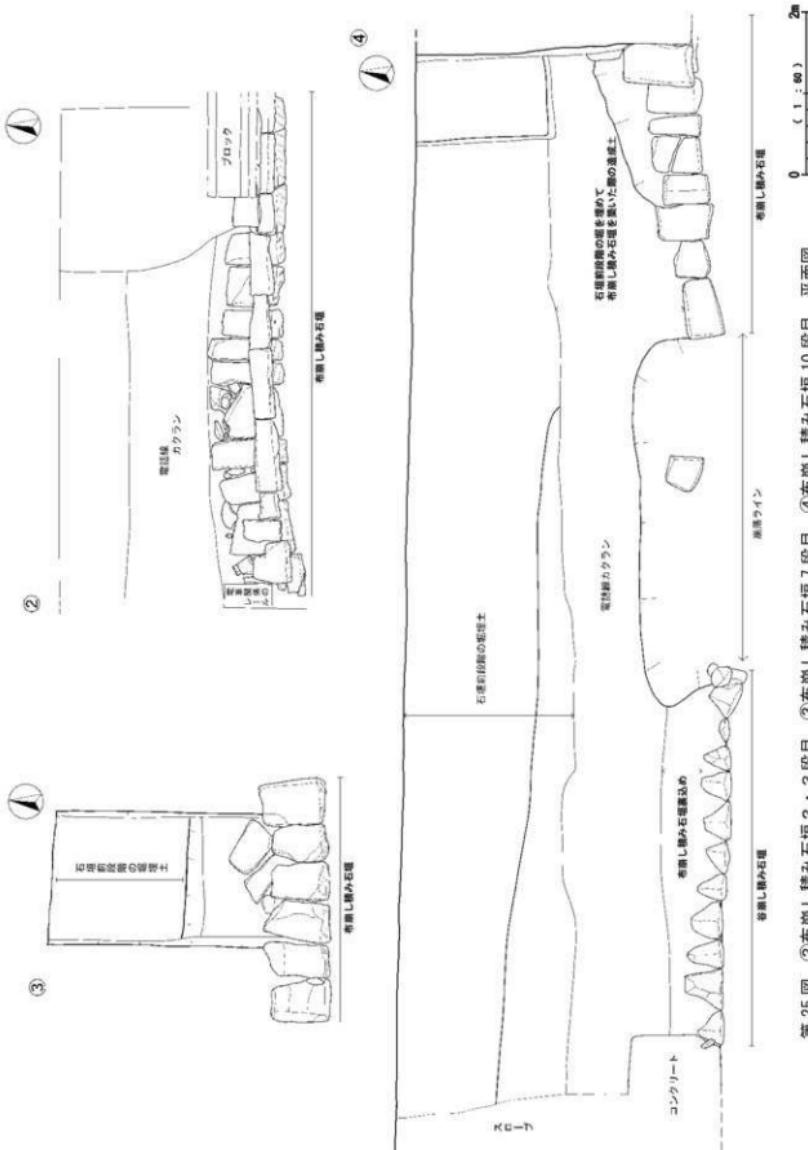
⑤布崩し積み石垣 11段目 ⑥布崩し積み石垣 12段目

⑦布崩し積み石垣 13段目 ⑧布崩し積み石垣 14段目  
(第26図～第29図) 堀トレンチ(第27図～第28図)

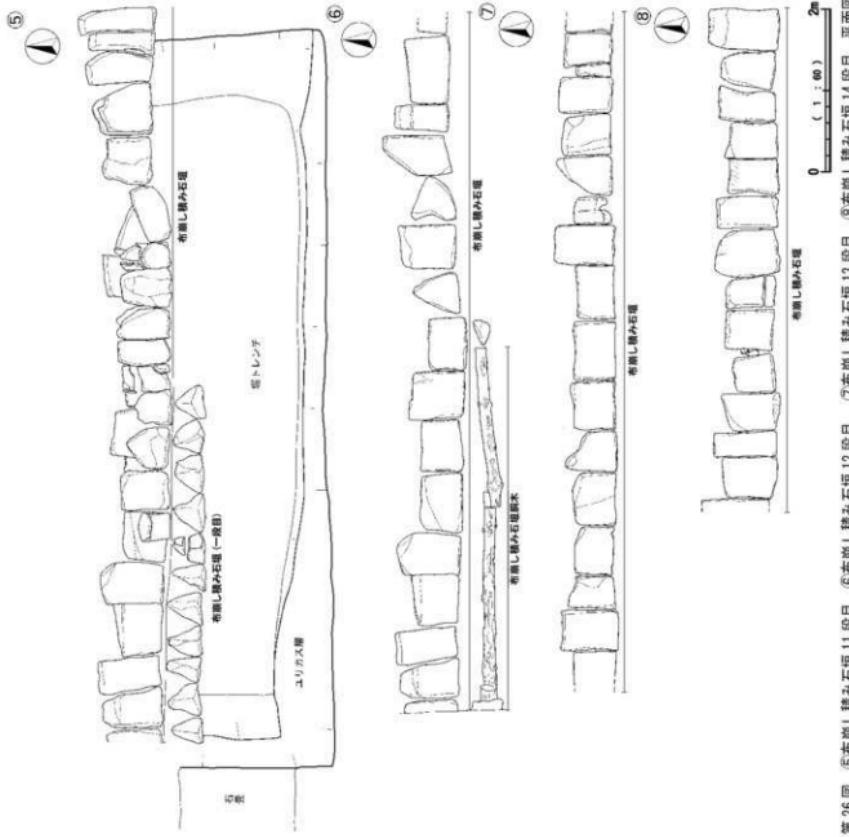
布崩し積み石垣11段目を調査したのち、現在の本北堀の堀底下に続く石垣確認のため、本丸北堀に長さ600cm、幅140cmのトレンチを設定した。石垣の解体と並行してトレンチを掘り下げた。標高4.4mで谷崩し積み石垣最下段の裏側に布崩し積み石垣11段目が埋まっていることを確認した。さらに、谷崩し積み石垣最下段の下位からは樹木を検出した。布崩し積み石垣は、さらにその下まで埋まっており、14段目まで

第24図 ①谷前し積み石垣1段目・布崩し積み石垣1段目 平面図





平面図  
④布崩し積み石垣 10段目  
③布崩し積み石垣 7段目  
②布崩し積み石垣 2・3段目  
25図



第26図 ⑤布崩し積み石垣11段目 ⑥布崩し積み石垣12段目 ⑦布崩し積み石垣13段目 ⑧布崩し積み石垣14段目 平面図

を確認した。また、堀トレンチの土層断面の観察から、本来の堀底に、黎明館建設に合わせて堀を埋めた際の造成土が最大で120cm堆積しており、本来の堀底が、現在よりも標高約3.6mであったことを確認した。

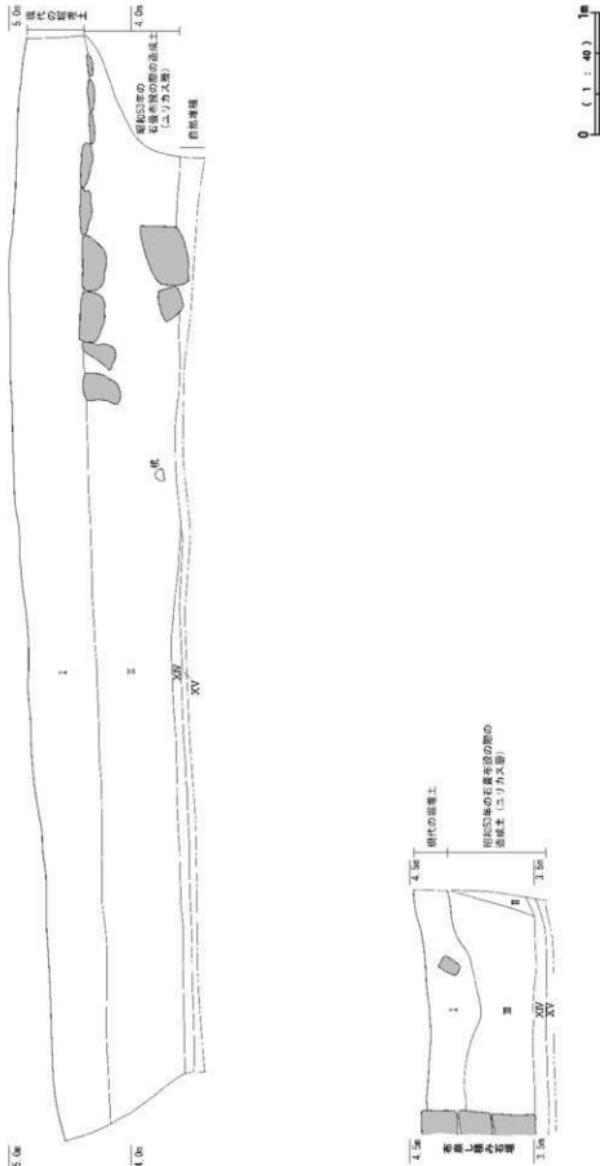
#### 谷崩し積み石垣下段・胴木

谷崩し積み石垣最下段は、布崩し積み石垣11段目の前面で確認された。その下位からは、標高約4.4mで直径約20cmの胴木2本を検出した。胴木同士は、金属のボルトでつなげられていた。谷崩し積み石垣は、布崩し積み石垣構築後、堀が埋まつたあとに、その堀を掘って胴木を設置した上に築かれていた。谷崩し積み石垣の裏込めには、近代のガラス製品等の破片

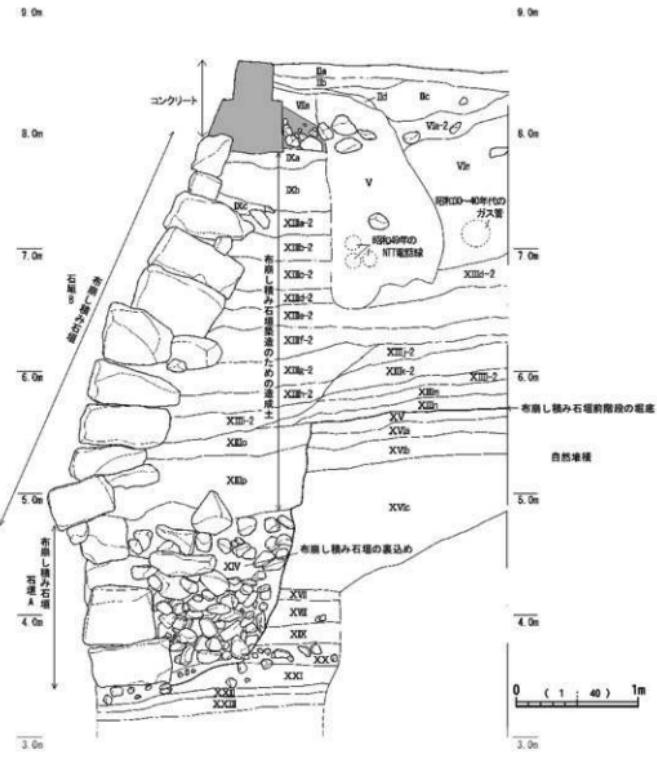
した遺物が多く含まれている。現在、黎明館屋外展示ゾーン付近にあった第七高等学校造士館の寮は、昭和2(1927)年に火災に遭っており、その際の片付け層が利用した可能性がある。このため、谷崩し積み石垣は、昭和2(1927)年以降に構築された可能性がある。

#### 布崩し積み石垣11段目～14段目

布崩し積み石垣11段目～14段目は、石垣前段階の堀の南側(本丸側)を約160cm深く掘って構築した石垣である。石材の大きさは揃っておらず、長さ約30～70cm、幅約20～40cmのものが並べられている。石垣10段目より上の石垣は上に向かって傾斜するが、石垣は直立する。また、これより上段の布崩し積み石



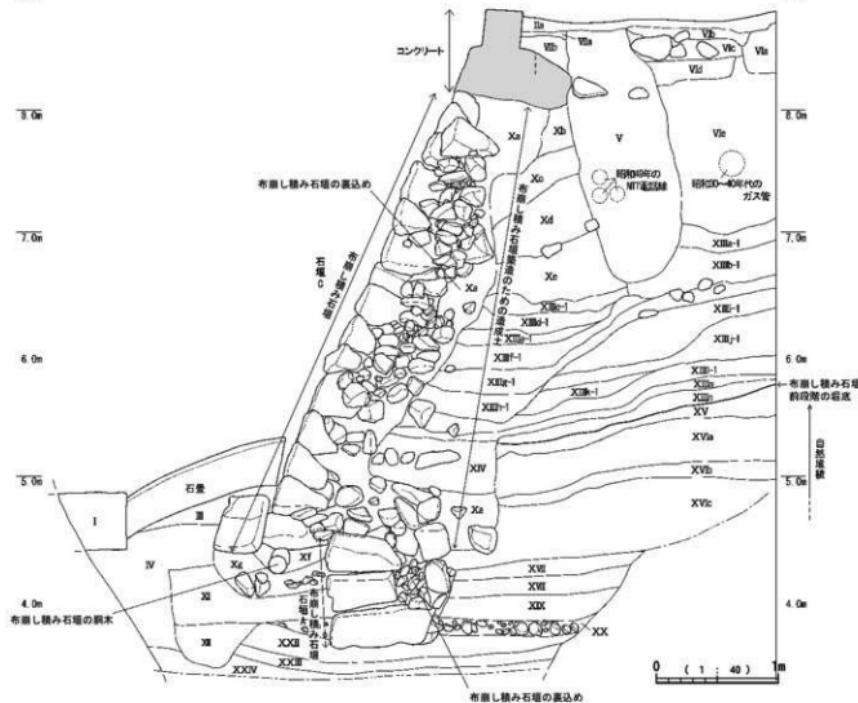
第27圖 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図(南壁・東壁)



原	色(記号)	色名	特徴
II a		西壁と同じ	
B b	10YR4/2	暖褐色土	きのの細かい砂層。3cm～帯大的根を多量に含む
II c	10YR4/2	にふい 黄褐色土	糞砂土。3～5cmの根を含む
II d	10YR3/2	暖褐色土	きのの細かい砂層。3～5cmの根を含む。固くしまる
V		西壁と同じ	
VI a-1	10YR6/2	にふい 黄褐色土	シラバ層。3～5cmの根を含む
VI e		西壁と同じ	
VI a		西壁と同じ	
IX a	10YR4/3	にふい 黄褐色土	土器大・人頭大の根球を多量に含む。瓦、陶器器出土
IX b	10YR4/3	にふい 黄褐色土	きのの細かい砂層。1～5cmの根を含む
IX c	10YR5/4	にふい 黄褐色土	土器と同量が、多量の根を含む。(糞便も混入)
XIII a-2	10YR5/3	にふい 黄褐色土	きのの細かい砂層。3～5cmの根球を含む
XIII b-2	10YR5/4	にふい 黄褐色土	きのの細かい砂層。3～5cmの根球を含む
XIII c-2	10YR7/1	灰白色土	きのの細かい砂層。1～5cmの小根を含む。鉄分を含む （紅色の黄色土バストを含む）
XIII d-2	10YR4/2	灰褐色土	きのの細かい砂層。1～5cm小根を含む。鉄分を含む （く金色）
XIII e-2	10YR5/8	明褐色土	きのの細かい砂層。1cm～帯大的根を含む。上面固くしまる
XIII f-2	10YR2/2	灰褐色土	きのの細かい砂層。1cm～帯大的根を含む
XIII g-2	10YR4/4	褐色土	きのの細かい砂層。1～5cmの根球を含む
XIII h-2	10YR5/6	暖褐色土	きのの細かい砂層。1～5cmの根球を含む
XIII i-2	10YR6/4	にふい 黄褐色土	きのの細かい砂層。3～5cmの根球を含む。

原色	色(記号)	色名	特徴
X-III-2	10YR5/3	にふい 黄褐色土	きめの細かい砂層。3cm～春大の円錐を含む。上面に鐵分の跡ができる。
X-III-2	10YR5/2	灰黃褐色土	きめの細かい砂層。1～5cmの小礫を含む。鐵分が多く含む。やや起砂性あり。
X-II-2	10YR5/4	にふい 黄褐色土	きめの細かい砂層。3cm～春大の円錐を含む。
X-III		西壁と同じ	
X-III		西壁と同じ	
X-III	10YR7/2	明黃褐色土	きめの細かい砂層。3cm～春大の円錐、石垣片や瓦を含む。
X-III	10YR8/4	黃褐色土	きめの細かい砂層。1cm～春大の円錐を含む。
XIV	10YR4/1	褐灰色土	春大～人頭大的粗粒 圓錐からなる砂層
XV		西壁と同じ	
XVI-a		西壁と同じ	
XVI-b		西壁と同じ	
XVI-c		西壁と同じ	
X-VI	10YR3/2	褐褐色土	1～5cmの砂層。(白緑) 鉄石を多く含む
X-VI	10YR4/3	褐褐色土	XIV層に似るがやや強化が強い。
XC-IV	10YR4/1	褐灰色土	きめの細かい砂層。1～5cmの小礫、鉄石を多く含む
XCI-IV	10YR4/1	黑褐色土	きめの細かい砂層。2cm～春大の円錐を多く含む
XXI	10YR4/1	褐灰色土	きめの細かい砂層。1～5cmの鉄石を多く含む
XXII	2.5YR5/2	褐褐色土	粘性土質。粘土層
XXIII	10YR4/1	褐灰色土	きめの細かい砂層。1～5cmの円錐、鉄石含む

第28図 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図（東壁）



層	色(記号)	色名	特徴
I	10YR1.7/1	黒色土	粘性強い。大小の礫、瓦、人頭大の石(石垣の跡が)含む。
II a	10YR3.3	褐灰土	きめの細かい砂層。3cm~拳大の礫を含む。
III	10YR3.2	黒褐色土	2cm~拳大の礫を含む。粘性強い。
IV	10YR3.1	黑褐色土	1~6cmの多量の貝殻層。粘性強い。プラスチック片と瓦片混じる。
V	10YR3.3	褐褐色土	きめの細かい砂層。3cm~拳大の礫を多量に含む。瓦出た。修士を多く含む。
VI a	10YR6.2	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む。
VI b	10YR4.3	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。拳大~人頭大のコンクリートブロックを含む。
VII c	10YR3.0	褐褐色土	礫を多く含む。3~5cmの砂層。コンクリートブロックを含む。斜面部。
VII d	10YR5.3	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む。
VII e	10YR5.3	にがい黄褐色土	田代 30~40 年代のガス管
VII e	10YR3.1	褐褐色土	きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む。上面は圓く盛る。
VII b	10YR4.3	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む。
X a	10YR2.1	黒褐色土	きめの細かい砂層。礫を多量に含む。ガラス、瓦、陶器部。拳大~人頭大の礫。斜面部。
X b	10YR3.3	褐褐色土	きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む。
X c	10YR4.3	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む。
X d	10YR4.1	褐褐色土	きめの細かい砂層。礫を含む。ガラス、瓦、拳大~人頭大の礫。コンクリートを含む。
X e	10YR3.2	褐褐色土	きめの細かい砂層。3cm~拳大の礫を含む。
X f	10YR4.1	褐灰色土	きめの細かい砂層。1~5cmの小礫を含む。
X g	10YR4.1	褐褐色土	きめの細かい砂層。1cm~拳大の礫石。小礫を多く含む。
XI	10YR3.2	黒褐色土	粘性強い。1~5cmの小礫を含む。
XII	10YR3.3	褐褐色土	粘性強い。拳大の礫が多く入る。
XIII a-1	10YR5.6	褐褐色土	きめの細かい砂層。3~5cmの円鏡を含む。
XIII b-1	10YR6.3	にがい黄褐色土	粗く盛る。粗面層。1~3cmの小礫を含む。1~5cmの円鏡を含む。
XIII c-1	10YR5.4	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。3~5cmの円鏡を含む。

層	色(記号)	色名	特徴
XIII d-1	10YR5.6	黄褐色土	きめの細かい砂層。1~3cmの小礫を多く含む。1~3cmの黄褐色のミクス含む。
XIII e-1	10YR4.5	褐褐色土	きめの細かい砂層。1~3cmの小礫を多く含む。1~3cmの黄褐色のミクス含む。
XIII f-1	10YR5.4	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。1cm~拳大の円鏡を含む。
XIII g-1	10YR6.4	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。1cm~拳大の礫を含む。
XIII h-1	10YR6.2	灰黄褐色土	やや粘性あり。1cm~拳大の礫(角、円)を含む。瓦出立。
XIV i-1	10YR5.3	褐褐色土	きめの細かい砂層。斜面部を含む。
XIV j-1	10YR5.3	褐褐色土	きめの細かい砂層。1cm~拳大の礫を含む。
XIV k-1	10YR5.4	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。1~5cmの円鏡を含む。
XIV l-1	10YR6.3	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。1~5cmの円鏡を含む。
XIV m-1	10YR5.4	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。1~5cmの円鏡を含む。
XIV n-1	10YR4.3	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。1~5cmの円鏡を含む。
XIV o-1	10YR4.1	褐褐色土	拳大~人頭大の礫石。円鏡からなる砂層。
XV	10YR4.3	にがい黄褐色土	きめの細かい砂層。1~5cmの円鏡を含む。上面は鉄分が固くしまった面になっている。
XVI a	10YR5.2	灰黄褐色土	シルト層。やや粘性あり。1~3cmの小礫を含む。鉄分多く含む。
XVI b	10YR6.1	褐褐色土	シルト層。XVI a 層よりやや粘性が強い。
XVI c	10YR2.1	黒色土	泥炭層。粘性強い。炭化物を含む。陶器部出土。
XVI d	10YR3.2	褐褐色土	1~5cmの小礫を(白)鈍石を多く含む砂層。
XVI e	10YR3.4	褐褐色土	泥炭層に埋るやや粘性強い。
XIX	10YR4.1	褐褐色土	きめの細かい砂層。1~5cmの小礫。鈍石を多く含む。1~5cmの円鏡含む。
XX	10YR1.1	黒褐色土	粗面層。粗面部。
XXI	2.5YR3.3	褐褐色土	粘性強い。粘土層。
XXII	10YR4.1	褐褐色土	きめの細かい砂層。1~5cmの円鏡。鈍石含む。
XXIII	10YR3.2	黒褐色土	きめの細かい砂層。1~5cmの円鏡。鈍石含む。

第29図 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図（西壁）

垣と違い、石垣背面に幅約120～140cmの裏込めをもつ。裏込めは、10cm～人頭大の円礫を充填している。裏込めの中からは、わずかに瓦（107・108）が出土した。瓦は、17世紀後半のものであり、この布崩し積み石垣が築城当時のものではなく、17世紀以降に構築されたことを裏付ける。石垣下に胴木はなく、自然堆積層面にそのまま石垣を構築している。

**出土遺物** 北御門跡周辺石垣修復調査区では、78～108が出土した。遺物は、出土層位ごとに報告する。

#### V・VI層出土遺物（N T T電話線やガス管埋設のための現代の造成土・搬乱層）

78は、中国景德鎮窯系の青花碗である。16世紀末～17世紀第1四半期。外面に唐草文が描かれる。79は、瀬戸美濃の磁器小碗である。内面見込みには、透明感のある釉薬で文様が描かれる。縦軸で、疊付は釉剥ぎされる。80は、豊前の陶器壺である。福岡県北九州都市小倉の名物であった三官胎の容器である。近代。81は、その他の軒平瓦（D-044）である。灰白色の胎土で雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。瓦当上端は幅広く面取りされる。82は、陶器瓦の平瓦である。凹面は釉尻ハート型に釉薬が二条掛けられており、田ノ浦窯系のものと考えられる。凹面周縁は面取りされる。被熱しており、釉薬がただれています。83は、棟瓦である。近代のプレス瓦である。被熱しており、赤く変色している。

#### X層出土遺物（谷崩し積み石垣の裏込め）

85は、一本づくりの下駄である。胴木の埋土から出土した。隅丸長方形で、直線的な二本の肉厚な歯を有する。84、86～87は、谷崩し積み石垣裏込めから出土した。84は、肥前系の磁器小碗である。19世紀前半～中頃。86は、堅野系の白薩摩とよばれる白色陶胎の皿である。縦軸だが、疊付は釉剥ぎされる。見込みの上には白色陶胎が張り付いているが、これが文様を意図したものかは不明である。18世紀後半～19世紀。87は、連珠三巴文軒丸瓦（A種不明）である。連珠は大きく、立体的である。尻側には直径3cmの釘穴が穿たれる。凹面の布袋痕は、工具によるケズリによってわずかに残るのみである。88は、嘲瓦。上面周縁は面取りされる。隅に直径2cmの釘穴が穿たれる。周辺の崩などに用いられたと考えられる。

#### XIII p層出土遺物（裏込めをもたない布崩し積み石垣の造成土）

89は、連珠三巴文軒丸瓦（A-049）である。瓦当周縁は広く、文様区は狭い。丸瓦部から瓦当上端に掛けではややそり上がる。灰白色の胎土で、雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。90は、丸瓦である。小型で焼成はやや不良。古式を呈する。凹面は、尻側に

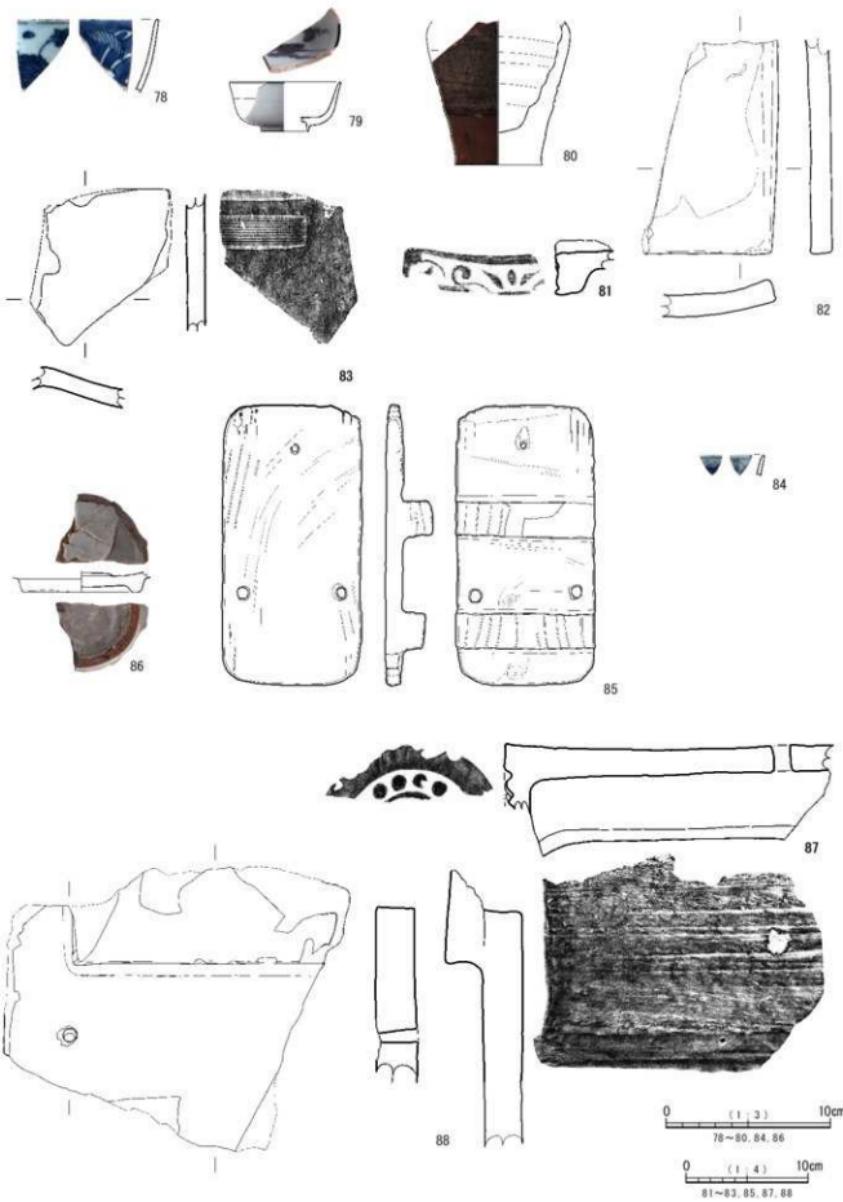
布袋痕、それより頸側にはコビキBが残る。91は、丸瓦である。小型で焼成はやや不良。古式を呈する。凹面には布袋痕が残る。凸面は、縦方向のケズリ痕が残る。92は丸瓦である。全体が鉄分を帯びており、調整等はみえない。灰白色の胎土で、きめは細かく雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。93は、平瓦である。小型で焼成はやや不良。古式を呈する。凹面の周縁はわずかに面取りされる。灰白色の胎土で、きめは細かく雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。94は、平瓦である。小型で焼成はやや不良。古式を呈する。凹面の周縁はわずかに面取りされる。薩摩以外で製作された可能性がある。95は、17世紀代の古瓦の平瓦である。黒色で小型、焼成はやや不良である。96は、朝鮮系瓦の丸瓦である。小型で焼成はやや不良。凸面はタキによる幾何学模様が描かれる。

97～102は、陶器瓦である。97は、その他の軒丸瓦（C-012）である。被熱しており、釉薬はただれています。同范の瓦は、苗代川系の堂平窯跡で出土している。98は、その他の軒平瓦（D-037）である。瓦当貼付け技法。凹面は幅広に面取りされ、瓦当との接合部付近から尻に向かって縦方向に筋状の調整痕が残る。被熱しており、釉薬はただれています。同范の瓦は、苗代川系の堂平窯跡で出土している。99と100は、丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法で、凹面には、粘土紐を積み上げた部分に強いヨコナデ調整が残る。凸面は釉尻ハート型に釉薬が2条もしくは3条流し掛けされており、田ノ浦窯系の釉薬瓦と考えられる。被熱しており、凹面には炭がついでいる。101は、丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法。尻側に焼成前に直径2cmの釘穴が穿たれる。凹面には横方向に筋状の調整痕が残る。堂平窯跡系の陶器瓦である。被熱しており、釉薬はただれています。102は、平瓦である。凹面は釉薬が釉尻ハート形に二条掛けられており、田ノ浦窯系のものと考えられる。凹面周縁は面取りされる。被熱しており、釉薬がただれています。釉薬瓦は、すべて被熱していた。

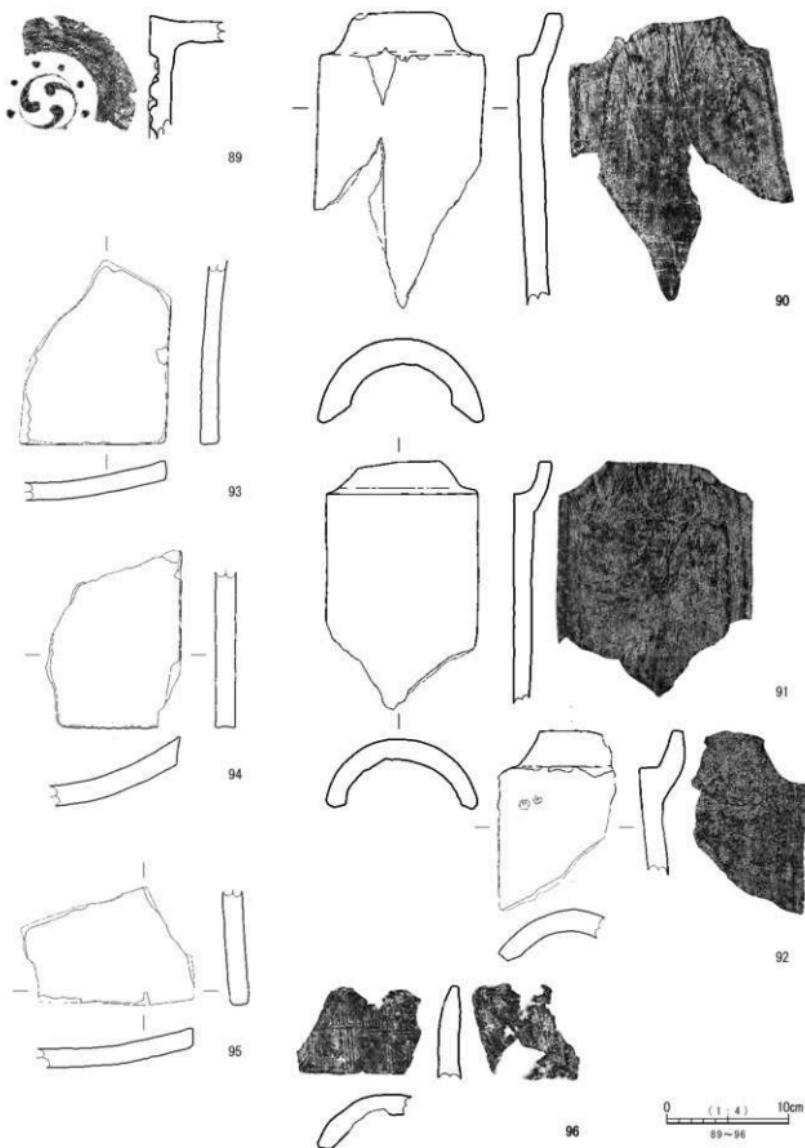
103は、17世紀代の古瓦の丸瓦である。凹面には布袋痕が残る。凸面には縦方向のケズリ痕が残る。黒色で小型、焼成はやや不良である。104は、平瓦である。古式瓦と考えられるが、その中では大型で焼成も良好である。凹面の周縁はわずかに面取りされる。105は、平瓦である。小型、凹面はわずかに面取りされヨコナデ調整痕が残る。凸面は斜め方向のケズリ痕が残る。106は、木製品。何らかの栓であると考えられる。

#### XIV層出土遺物（裏込めをもつ布崩し積み石垣裏込め）

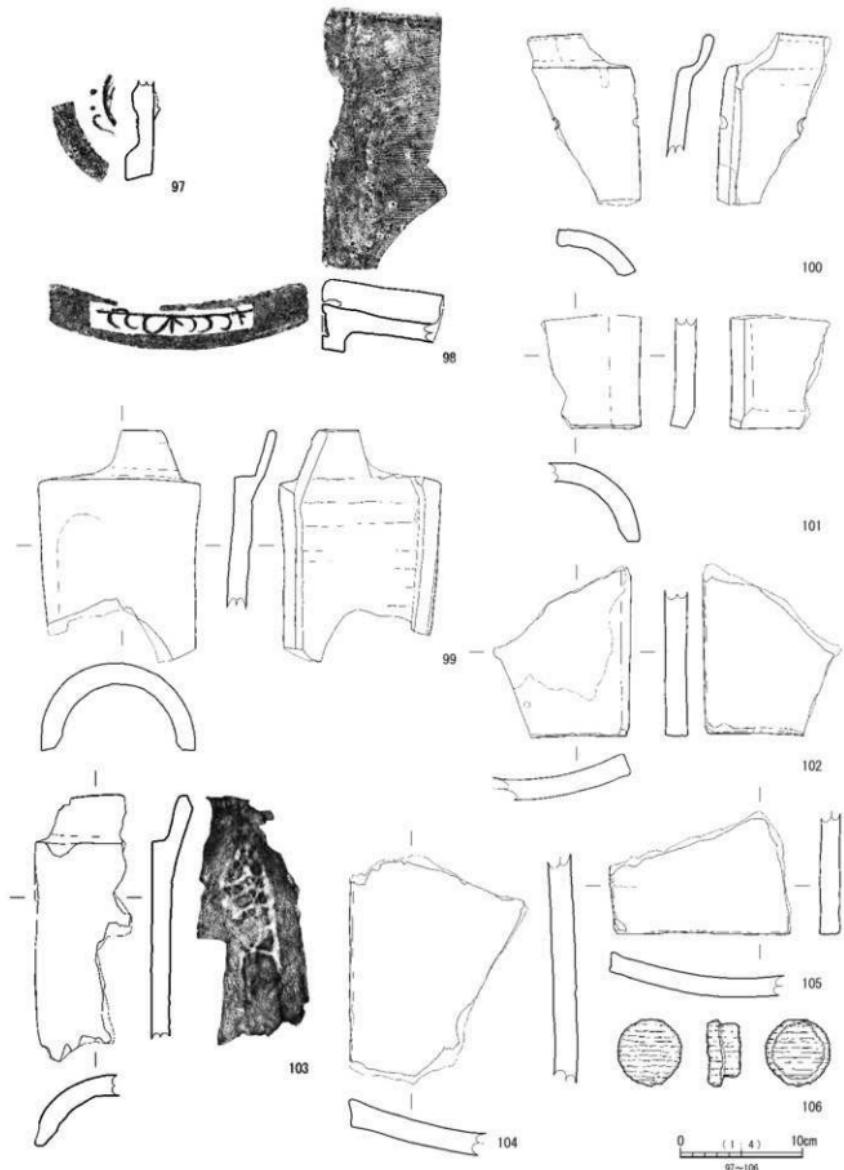
107は、丸瓦である。凹面には布袋痕が残る。凸面は縦方向のケズリ痕が残る。灰白色の胎土で雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。108は、陶器瓦の丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法で、粘土紐



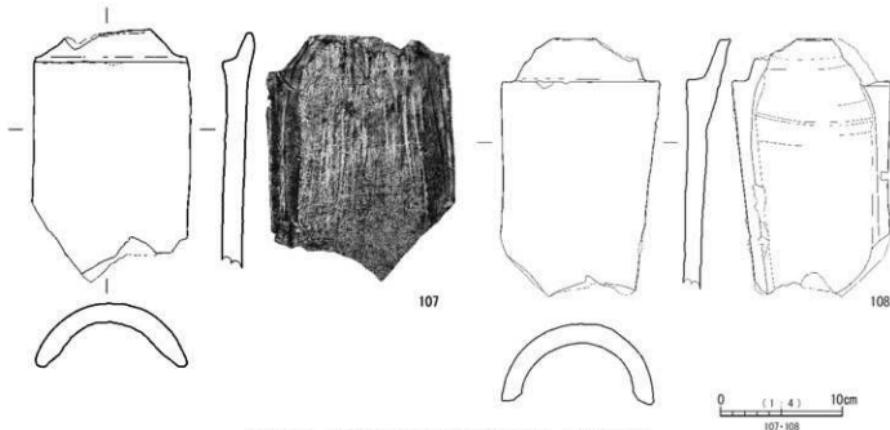
第30図 北御門跡周辺石垣修復調査区 出土遺物1



第31図 北御門跡周辺石垣修復調査区 出土遺物2



第32図 北御門跡周辺石垣修復調査区 出土遺物3



第33図 北御門跡周辺石垣修復調査区 出土遺物4

を積み上げた部分に強いヨコナデ痕が残る。被熱しており、釉薬はただれています。

#### 小結

石垣は背面構造の違いにより、円礎の裏込めをもち直に立ち上がる布崩し積み石垣（布崩し積み石垣11～14段目、以下石垣A）、裏込めをもたない傾斜する布崩し積み石垣（布崩し積み石垣2～10段目、石垣B）、角礎の裏込めをもつ布崩し積み石垣（以下、石垣C）、谷崩し積みの石垣（以下石垣D）の4種類に大別できる。ここでは、石垣の構築過程とそれに伴う本丸北堀の変遷について述べる。

鹿児島城築城時は、石垣前段階の堀（XV層）が本丸北堀であったと考えられる。本丸北堀は、現在よりも北側まで広がっていたと考えられる。北岸に石垣があったかどうかは判断できない。その後、その堀の南側（本丸側）を深く掘り下げ、石垣Aを構築している。石垣前段階の堀の直上には、固く締めた砂層（XIII n層があるが）、これは堀を埋める際に固く締めた砂層を敷き、その上を作業路として石垣Aを構築した可能性がある。石垣Aを構築したことで、本丸北堀は現在と同じ幅まで狭くなり、160cmほど深く掘り下げられた。石垣Aの構築時期については、108の瓦が被熱していることから、元禄9（1696）年の大火以降の可能性がある。

その後、石垣Bが構築される。石垣A裏込め出土の瓦と石垣B裏側の造成土で出土瓦にはほぼ時期差もないことから、同時期の可能性もあるが、背面構造などの構築方法が異なっているため、同時期の石垣で構築過程が違うのか、時期差があるかは判断できない。

その後、石垣Cが築かれる。石垣Cは裏込めに被熱したガラス片やコンクリートブロックを含むことから、近代以降のものである。昭和2（1927）年の第七高等学校造士館の寮の火災からの片付け層と考えられる層を含んでいること、昭和2（1927）年に鹿児島電気軌道（現在の鹿児島市電）上町線が開通していることから、この時期に石垣Cは構築された可能性がある。石垣Dは、石垣Cの勾配に合わせて石垣Dの上に積み足したものと考えられる。

堀はその後、昭和53（1978）年の黎明館建設に伴う工事で約120cm埋められ、現在の深さになった。

今回の発掘調査では、鹿児島城の石垣の背面構造をはじめて考古学的に調査できた。その結果、石垣の積み方と背面構造から石垣の種類を分類できること、石垣の変遷を追うことができたこと、石垣構築前に堀があり、現在の堀よりも浅く広かったことを確認できた。

遺物は近世～近代の瓦、陶器、ガラス、木製品が出土した。瓦は、特に、陶器瓦やコピキ瓦をもつ丸瓦など、鹿児島城内の他の調査地点に比べ、17世紀代のものが目立つ。

#### 4 御兵具跡（第34図～第39図）

**概要** 「御兵具所」は、石垣と長屋が一体となった多間檜型式の建物である。天保14（1843）年「天保年間鹿児島城下絵図」（第145図⑥）には、御楼門から北の石垣隅欠部、北御門にかけてL字状に描かれている。また、明治初期の古写真（第147図③）では、本瓦葺きで外壁を海鼠瓦で庇蔽された建物が写っている。なお、元禄9（1696）年「鹿児島城絵図控」（第144図②）では堀とし

て描かれており、18世紀以降に扉が多間檜型式の建物に変わったと考えられる。

御兵具所跡は、平成28年度の調査で、御門側のL～N-27・28区において、南端が本丸東側の石垣と一体となって検出されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター2020）。建物は、布基礎の上に基礎石を列状に巡らした構造で、石列内側には4間の梁間をもつ坪地業と礎石を検出している。その周囲には、幅約50cmの露台と排水溝を巡らしている。なお、石垣上端から排水溝までの御兵具所跡の幅は約8mである。排水溝側石の標高は10.8mで、深さは約20cmである。石材はすべて溶結凝灰岩である。

今回の調査は、「御兵具所」と付帯施設の確認とそれに関する石垣の背面状況確認を目的として実施した。

### 51 トレンチ（第35図）

**概要** 本丸跡北石垣側の御兵具所跡を確認するために、K～L-34～35区に設定した。規模は4×2.5mで、園路と重なる部分については、安全確保のため保全した。

表土から約1.3mは黎明館建設時の緑地整備の際に使用したシラス等の造成土であり、遺構はその下位の標高11m前後で確認した。

**遺構** 遺構は、坪地業と排水溝と組み合う石列を確認した。

#### （1）坪地業（第35図）

標高10.8m前後で、坪地業5基を検出した。坪地業1～2は梁間方向、坪地業2～4が桁行方向に並ぶ。坪地業1～2間の1間は1m95cm、坪地業2～4間では1m94cmを測る。坪地業2～3間は97cm、坪地業3～4間は97cmありおよそ半間の規模である。なお、坪地業3は南側が削平されている。坪地業5は、坪地業4に隣接しており、建て替えや補強された痕跡の可能性がある。排水溝上にも柱痕がみられる。

これらの坪地業は、穴を掘り溶結凝灰岩と河原石を混ぜ、木榼等で潰し固めて充填したものである。柱の沈下を防ぐための地固めで、この上に建物の基礎石を載せる。

#### （2）石列・排水溝（第35図）

石列は、石垣と平行して東西方に向く2石検出している。石列の角石は幅26cm、厚さ30cm、長さ約40cmで、面調整が鑿で斜状に施され、4列の刻みが見られる。調整痕から判断すると、下段の角石にあたるとと思われる。また、南側には一段低い板石があり、板石の下と石列の石垣側には栗石を敷きこんでいる裏込め石が見られる。これらは、建物の基礎石にあたり、礎石下部と排水溝を組み合わせている。位置は、昭和53・54年度の調査の基礎石と排水溝と重なる。

排水溝は、底石を確認した。溶結凝灰岩製である。

#### 出土遺物（第38図 109～112）

109は、肥前系の磁器碗である。いわゆる小広東碗で

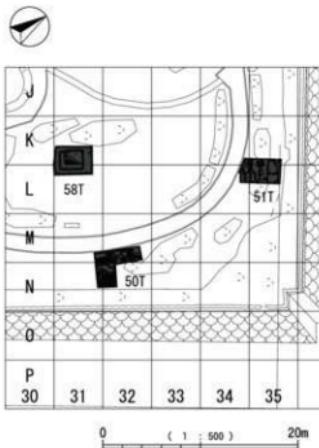


図34 図 御兵具所跡調査区トレンチ配置図

ある。外面には梵字文・内面見込みには虫文が描かれる。1770～1810年。110は、加治木・姶良系の陶器鉢である。龍門司三彩である。近代。111は、苗代川系の陶器鉢。折り曲げ口縁である。18世紀後半。112は、大坂式軒平瓦（A-011）である。瓦当貼り付け技法。内面には横方向のナデ調整痕が残る。

**小結** 排水溝と組み合う本丸跡北側石垣天端の幅は、約8mである。石列の内側に坪地業、外側に排水溝をもつ構造は、『御門跡周辺』で確認された御兵具所跡と同様である。また、この幅は、北御門跡周辺調査区の御兵具所跡の石垣天端から石列と排水溝1の幅と同様であることから、北御門跡側の御兵具所跡の一部が確認されたと考えられる。

### 50 トレンチ（第36図）

**概要** 本丸跡東石垣側の御兵具所跡を確認するため、N-M-31～32区にL字形で設定した。位置としては、鬼門除けの隅欠から約15m南にあたる。51トレンチと同じく、標高約11mまでは盛土である。

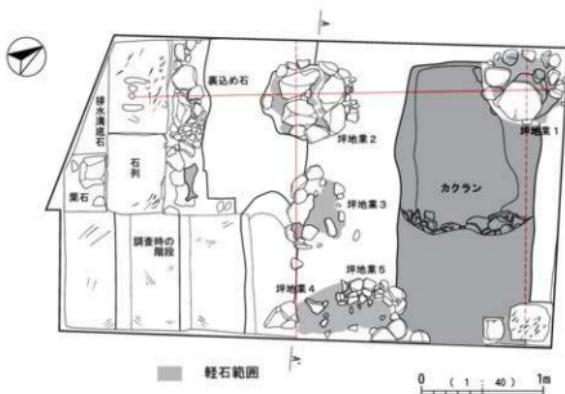
**遺構** トレンチ東側において、石垣の裏込めを検出した。また、トレンチの西側では、溶結凝灰岩を小さく割り、敷き固めた布基礎を南北方向に検出した。

#### （1）裏込め（第36図）

土層断面を確認したところ、検出面から西に向けて、時期の新しい円礫が重なり、下位に大きめの円礫が潜り込んでいる様子が覗えた。

#### （2）布地業（第36図）

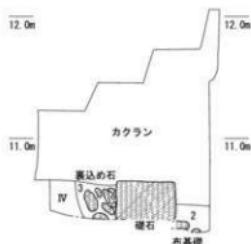
途中2か所で、溶結凝灰岩を充填する東西方向に延び



51T(西壁)



51T(南壁)

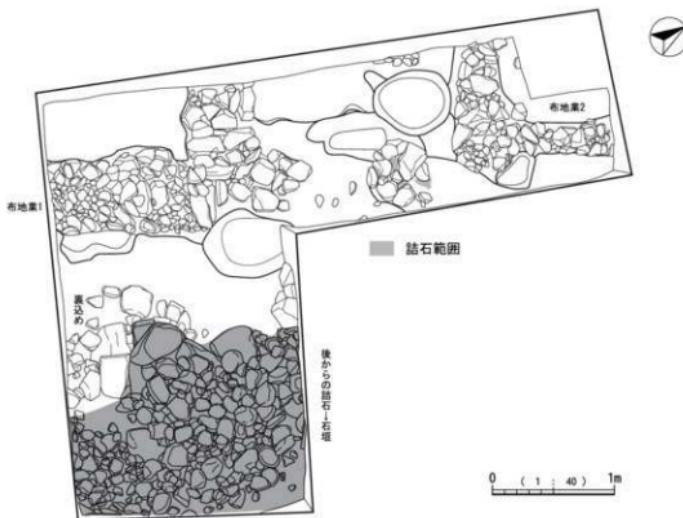


51T A-A'

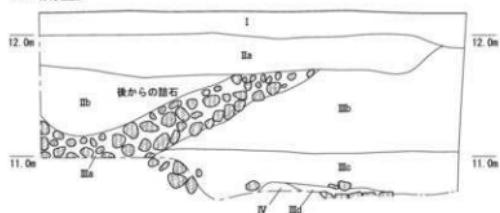


層	色(記号)	色名	特徴
II	10YR3/1	黒褐色土	
III a	10YR3/2	黒褐色土	
III b	10YR4/1	褐灰色土	
III c	10YR4/2	灰黒褐色土	
IV	10YR5/4	にぶい黄褐色土	灰白 (10YR7/1) ~ 明黄褐色風化縞 (10YR7/6) ブロック状混在土
1	10YR4/2	黒褐色土	砂質が多く含まれる (粒径 5 mm)
2	7.5YR4/2	灰褐色土	砂質が強く 2 ~ 4 cm の円縞が多く含まれる。また土層にかかっていない部分に凝灰岩、軽石の中継も含まれる
3	10YR3/1	黒褐色土	凝灰岩 10 ~ 20 cm 程と円縞が多く入る。多間隔基礎埋設時土

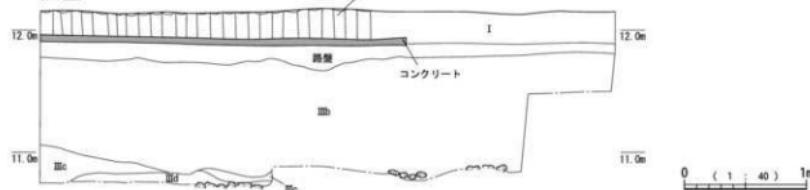
第35図 51トレンチ遺構配置図・土層断面図（西壁・南壁・東西壁）



50T(南壁)

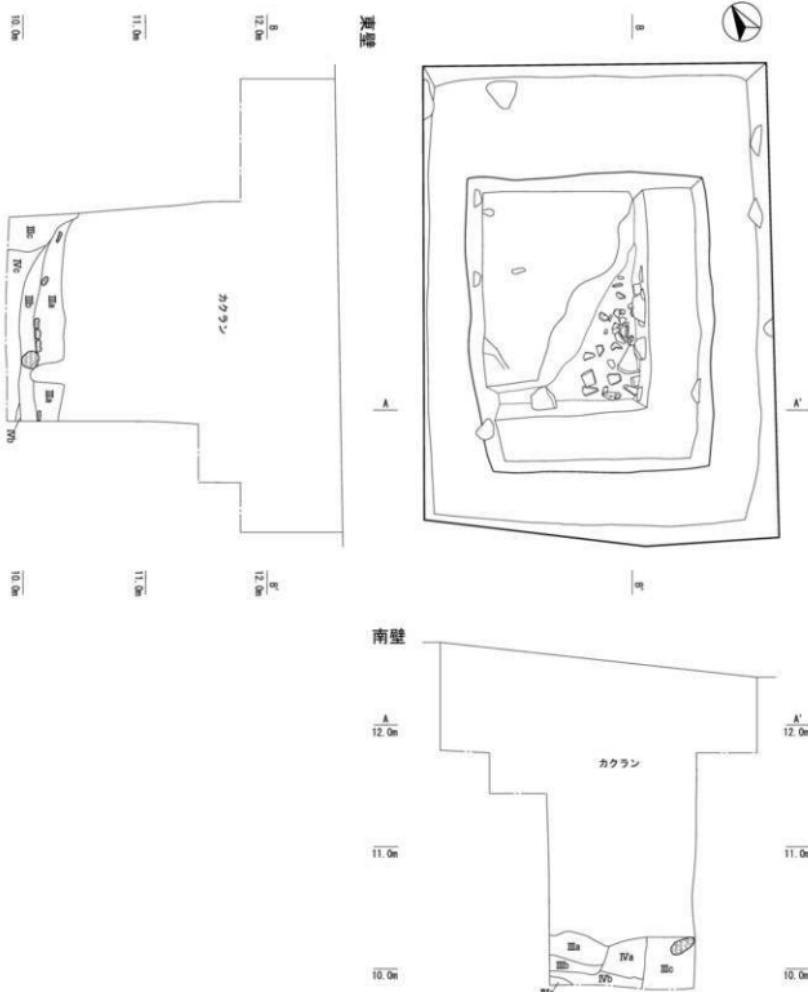


50T(西壁)



層	色(記号)	色名
I	10YR2/1	黒色土
II a	10YR3/3	茶褐色土
II b	10YR2/2	黒褐色土
III a	10YR4/3	にぶい黄褐色土
III b	10YR4/3	にぶい黄褐色土
III c	10YR4/1	褐灰色土
III d	10YR5/3	にぶい黄褐色土
IV	10YR5/6	黄褐色土

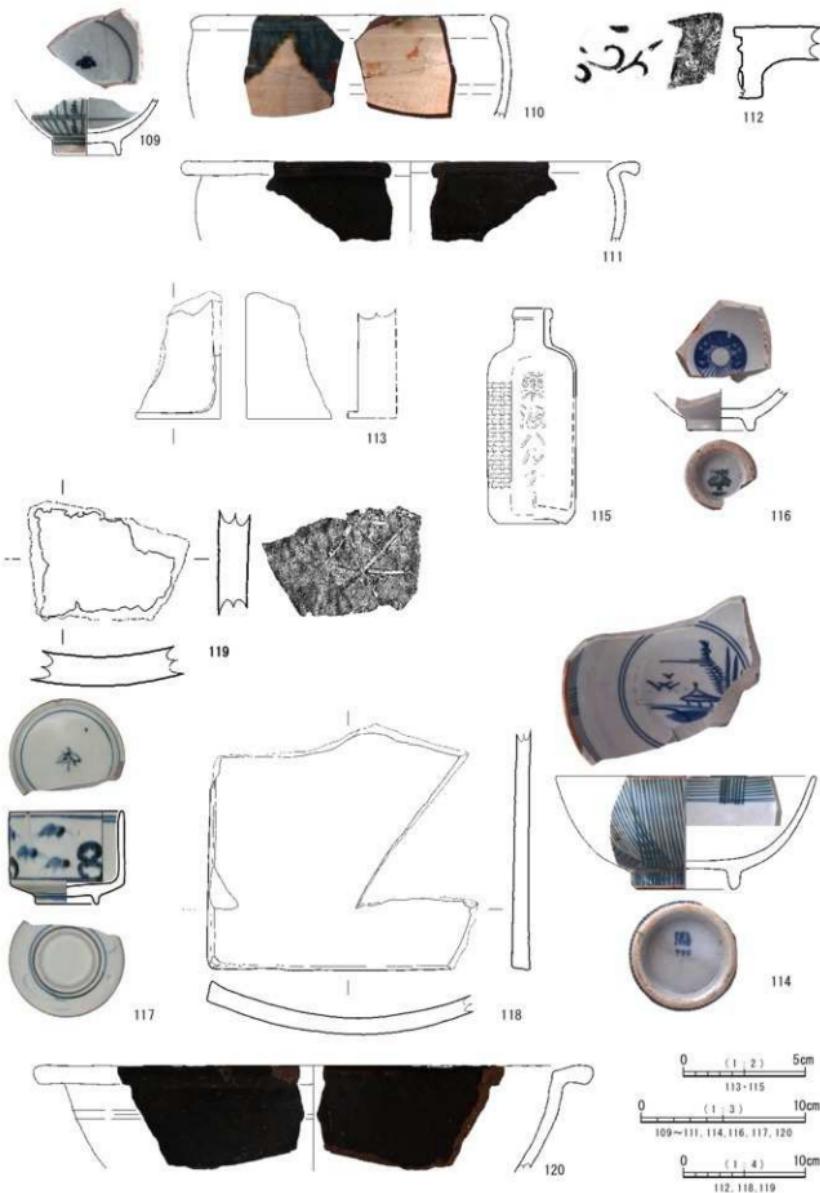
第36図 50トレンチ遺構配置図・土層断面図(南壁・西壁)



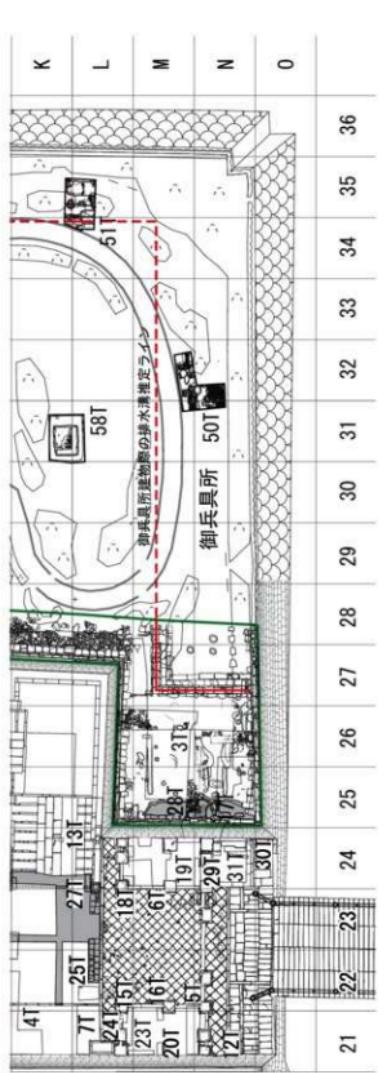
層	色(記号)	色名	特徴
III a	10YR3/3	暗褐色土	炭化物、硬が多く含まれる
III b	10YR3/2	黒褐色土	炭化物を含む
III c	10YR7/4	にぶい黄橙色土	明褐色、白灰色のブロック(風化塊? K 固結粘土?)を多量に含む。(城山層主体造成土)一部墨色土を含む
IV a	10YR4/1	褐灰色土	均質土
IV b	2.5Y7/6	明黄褐色土	ブロック状堆積土
IV c	10YR3/1	黒褐色土	遺物を多く含む

0 ( 1 : 40 ) 1m

第37図 58 トレーンチ遺構配置図・土層断面図(東壁・南壁)



第38図 御兵具所跡調査区 出土遺物



第39図 御兵具所建物際の排水溝推定図

る布地業も確認された。地業間の間隔は1m 95cmで一間ある。布基礎は布地業に対して直角に造られていることから間仕切りの布基礎と推定される。

#### 出土遺物 (第38図 113~116)

113は、小型の硯である。周縁は薄く小型。114は、瀬戸の磁器碗。高台内側には統制番号770が描かれる統制食器である。内面見込みには樓閣山水文が描かれる。第二次世界大戦中。115は、薬液ハルナーというエンボスがあるため、橋本ケミカル合資会社の医薬品、薬液ハルナーである。皮膚疾患の一般治療薬であった。これは口録部の形状から明治から戦前までの瓶であると考えられる。116は、肥前の磁器碗である。第二次世界大戦中。

**小結** このトレンチでは布基礎と石垣の裏込めが確認された。このトレンチ外側では、昭和53・54年度の調査で、建物の基礎石と排水溝が確認されており、それが御兵具所跡の外側である。今回のトレンチは、その内側にあるため、布地業は、御兵具所跡建物の内部施設に関わる物である可能性がある。

#### 58トレンチ

58トレンチは、御兵具所番所(I・J-27・28区)の範囲を確認するため、K・L-31区に設定した。この地點は、擾乱が深さ2m以上続くことが確認されたものの、築城時の造成土を検出することができたが、遺構は検出できなかった。

#### 出土遺物 (第38図 117~120)

117は、薩摩磁器碗である。腰部で折れ、直線的に立ち上がる筒型碗である。見込みと外側には昆虫文が描かれる。18世紀末~19世紀初頭。118は、平瓦である。凸面には、×が刻まれる。119は、平瓦である。凹面は面取りされている。灰白色の胎土で雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。120は、苗代川系の陶器鉢である。折曲げ口縁である。18世紀後半。

**小結** 近世遺物は確認したが、御兵具所の範囲からは外れており、遺構は確認できなかった。

#### 小結 (第39図)

平成27年度の御楼門跡周辺と今回北御門跡周辺調査区、51トレンチの成果をあわせると、「御兵具所」は、北御門跡側は約6m(3間)、御楼門跡側は約8m(4間)の梁間をもつ建物で、天保14(1843)年「天保年間鹿児島城下絵図」や明治6(1873)年の「鹿児島屋形及びその周辺図」で描かれているように、北御門跡から御楼門跡周辺まで続いていると考えられる。第39図は、その推定線である。また、その規模は、本丸跡北側石垣と本丸跡東側石垣で異なっていたことも確認できた。

## 5 御楼門跡南側石垣周辺（第 40 図～第 63 図）

**概要** 調査地区は、御樓門跡から御角櫓跡までの間の本丸跡東石垣に沿った場所にあたり、区としては K～N-7～17 区である。

この地区的石垣は、0-8 区より南は、平成 11 年に積み直されているものの、鹿児島城跡では比較的古いと考えられる粗加工石材の布積みが石垣下側で全長約 60m に及ぶ。今回は、解説および周辺施設の確認のため、石垣に平行して 5 本のトレンチを設定した。また、将来の石垣保全のための石垣の背面構造と排水施設を確認することを目的とした。ここでは、御樓門側から順に報告する。

この調査区は、黎明館建設に伴う昭和 53・54 年の発掘調査で排水溝部分のみ調査されており、その周辺部分の土層は擾乱を受けている。

### 43 トレンチ（第 42 図～第 45 図）

**概要** 43 トレンチは当初 M・N-17 区に  $2 \times 4\text{m}$  で設置した。その後、N-16 区を南に 1m 拡張した。石垣側は石垣の天端の上に地覆石があり、その上に近代以降に二段の溶結凝灰岩の切石を積んでいる。現地表面は、下の築角石の天端で標高は 11.60m である。地層は、石垣側が植樹のため大きく擾乱され、排水溝の上位は前回の調査で擾乱されている。I c 層は、コンクリート片が混在しており、近代の擾乱である。瓦溜りは土層 IV a 下部より掘り込まれ漆喰も含まれており、IV a 層が江戸期の城内生活面と考えられる。

**遺構 遺構は、裏込め、排水溝を確認した。**

#### （1）石垣と石垣背面構造（第 49 図）

石垣築石は、前面が広く、後方がやや狭まる形態で、上面に矢穴が見られるが、丁寧な造りが認められる。地

覆石は幅 14 cm、高さ 15 cm、長さ約 1 m 20 cm を測る。裏込めは拳大から人頭大までの河原石と溶結凝灰岩を入れ、一部には漆喰が付着した瓦片もみられた。埋土は、城山層が混ざった造成土で覆われている。瓦溜りの下部から裏込めが出土したことから、石垣上部の裏込めの幅は約 3 m であったと考えられる。

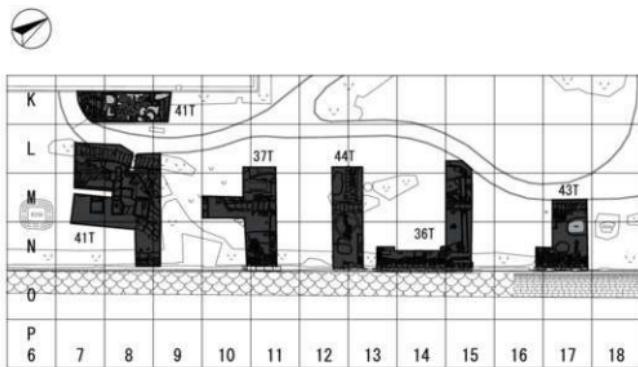
#### （2）排水溝（第 49 図）

石垣を保護する機能をもつ排水溝は、石垣から城山側へ 6 m 離れた位置で、石垣と平行に検出した。暗渠排水溝であるが、一部の蓋石は、ない状況で検出した。石材は溶結凝灰岩で外面の整調整は粗いが、側石や底石の内面調整は丁寧である。なお、蓋石は長矩の規格性がない。排水溝の側石の面は標高 10.85m に位置し、幅は 40 cm、深さ 70 cm である。

蓋石は約 20 cm 前後と考えれば、石垣の天端 11.08m と近くなる。よって、排水溝の蓋石は、視覚確認ができる露出の可能性がある。側石の横には、補助用の板石と思われるものがあるが、定位置としては疑わしい。また、その下には栗石がある。この栗石は土層 V a 内にあり、溶結凝灰岩の平石も混入しているため、回数は補修工事をしていると考えられる。蓋石の散乱は細工した板石もあり、随時取り換えた可能性も考えられる。排水溝の一部は、砂や泥を掃除することもあったと考えられる。

#### 出土遺物（第 43～45 図 121～160）

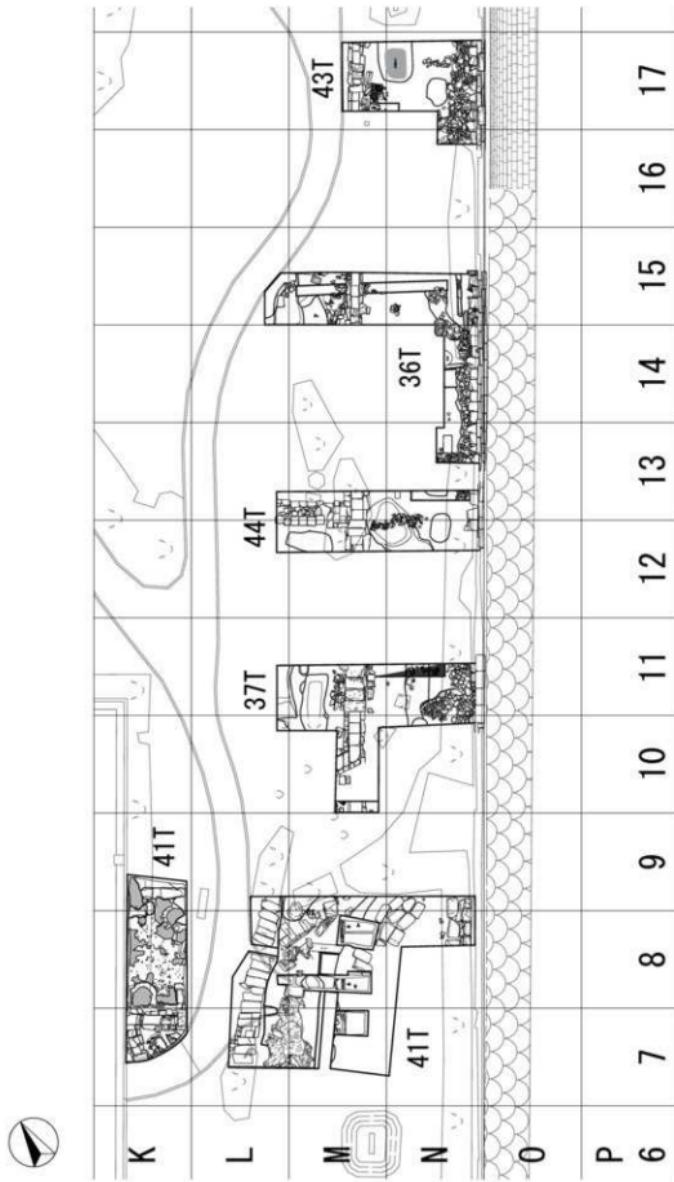
121～128 は陶器皿である。121 は、古武雄と呼ばれる肥前の陶器皿である。内面には連続した刷毛目文が描かれる。口縁部下には 1 段、段がつく。外面上には強いヨコナデ。17 世紀後半～18 世紀初頭。122 は、堅野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の陶器碗もしくは鉢である。白色土に黒色土を練り込んで成形する。口縁は波状、外

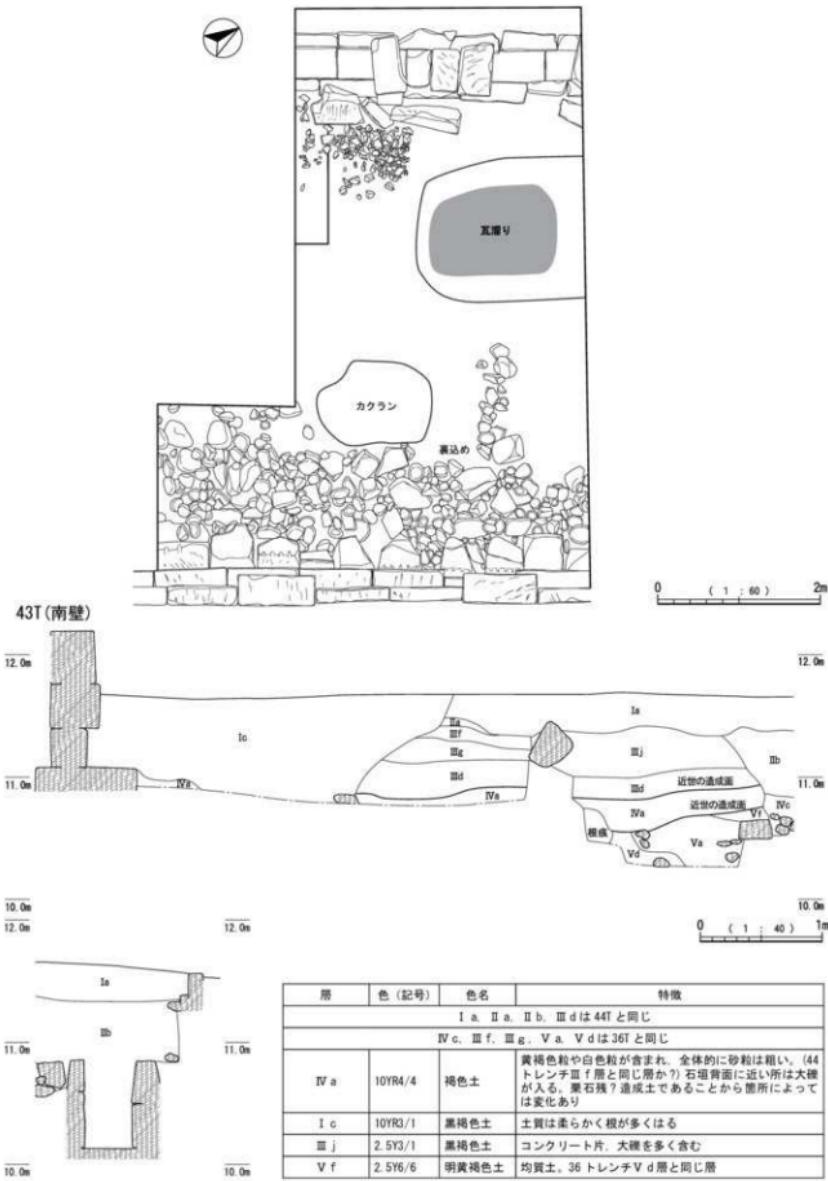


第 40 図 御樓門跡南側石垣周辺調査区トレンチ配置図

0 ( 1 : 250 ) 10m

第41図 御樓門跡南側石垣周辺調査区 遺構配置図

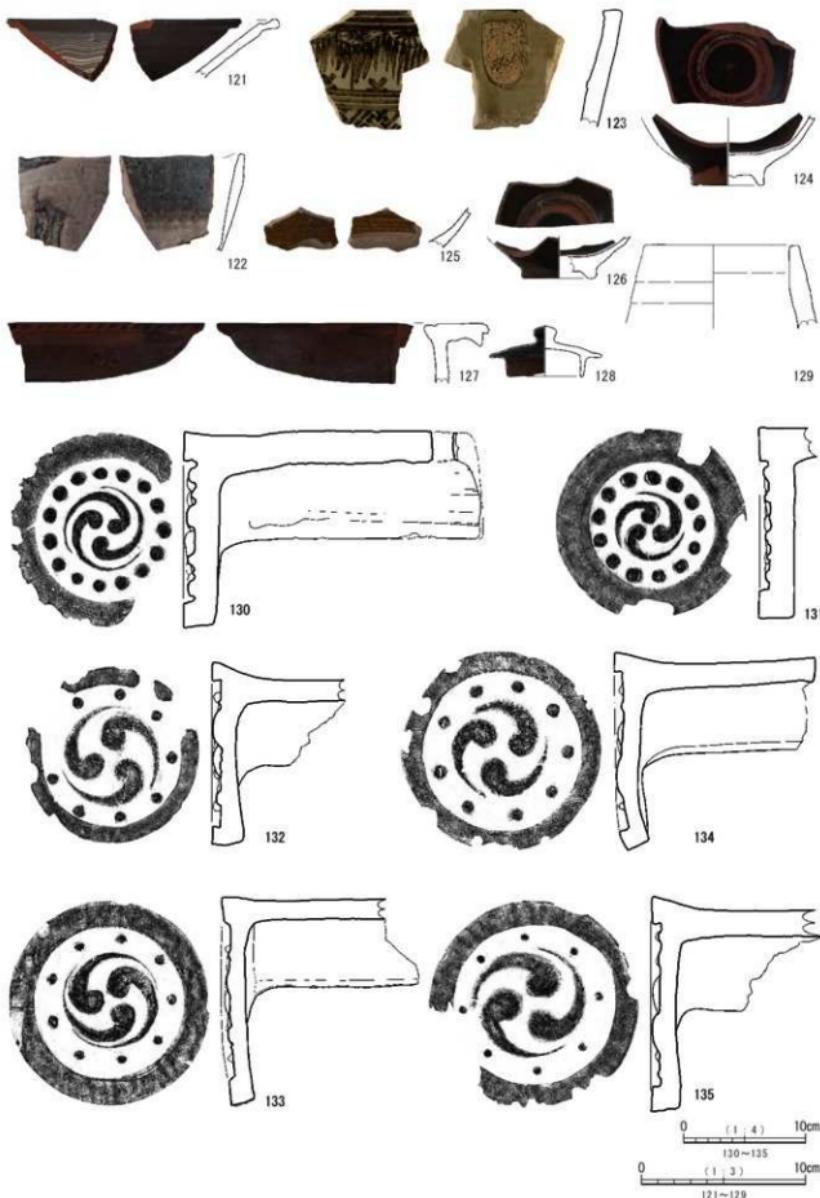




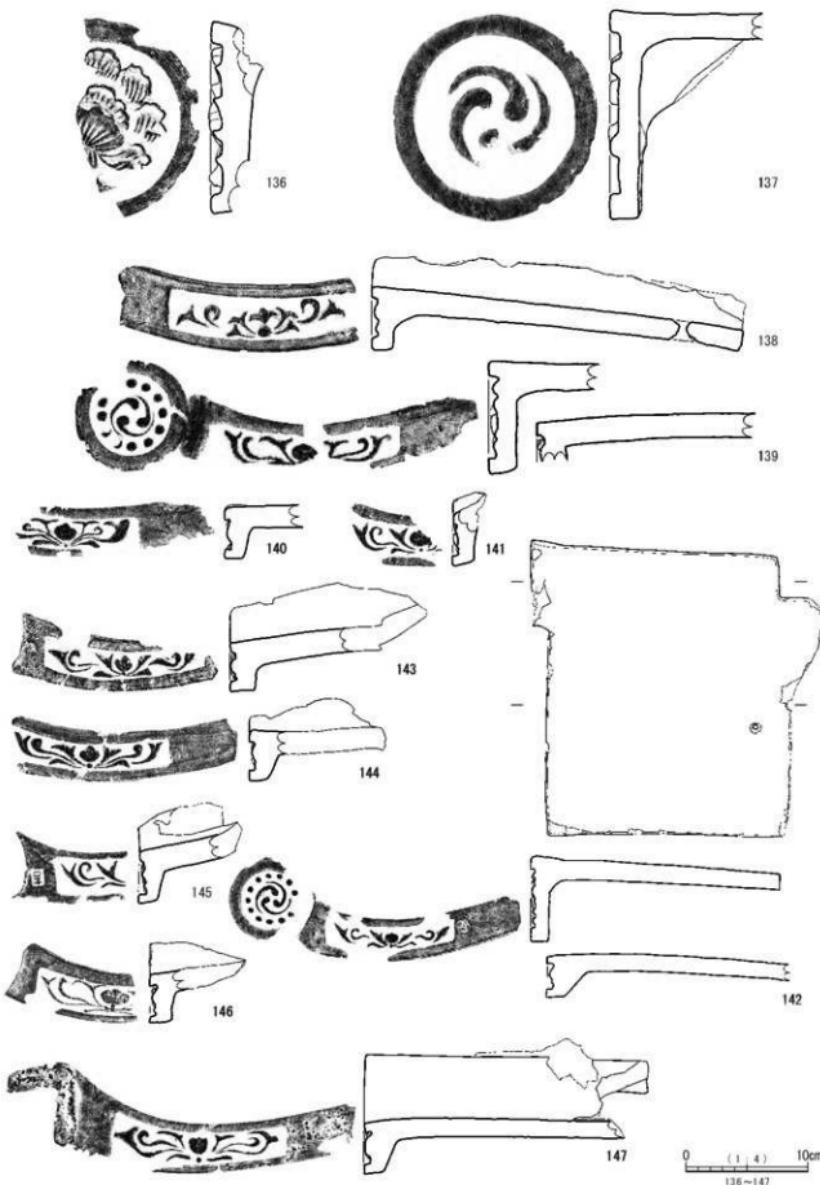
第42図 43 トレンチ平面図・土層断面図（南壁）

面は凹凸をつける。18世紀～19世紀。123は、堅野系の宋胡録写の風炉である。欠損しているが、内面には突起がつく。外面には竹などが描かれる。18世紀～19世紀。124・126は、加治木・始良系の半陶半磁の透明釉の碗である。初期龍門司窯で焼かれたと考えられる。高台は露胎で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。125は、加治木・始良系の陶器碗である。飴釉が施され、内面は蛇の目釉剥ぎされる。内面には輪轂目が残る。127は、琉球陶器鉢である。植木鉢か。口縁端部にはキザミがあり、外側には文様が線刻される。128は、苗代川系の陶器土瓶蓋である。18世紀後半以降。外側のみ釉薬が掛かる。129は、瓦質の土製品である。外面には筋状調整痕が残る。130～159は、瓦である。130は、連珠三巴文軒丸瓦(A-001)である。ナデ調整。凸面は、瓦当との接合部はヨコナデ、それより尻側には縱方向のケズリ痕が残る。凹面には布袋痕が残る。131は、連珠三巴文軒丸瓦(A-011)である。凹面は瓦当との接合部には強いヨコナデがある。132は、連珠三巴文軒丸瓦(A-012)である。三巴文は上面が平らで浮き上がらない。瓦当幅に比べて丸部の幅は狭く、瓦当は上端に向かって反り上がる。凸面の瓦当と丸部の接合部はヨコナデでそれより尻へは縱方向のケズリ痕が残る。凹面は、布袋痕がナデ消されている。薩摩以外で製作されたと考えられる。133は、連珠三巴文軒丸瓦(A-046)である。連珠は小型で少なく、三巴文は上面が平らで浮き上がらない。凸面には縱方向のケズリ痕が残る。凹面は布袋痕がナデ消されている。134は、連珠三巴文軒丸瓦(A-014)である。連珠は数が少なく、三巴文は巴同士の間隔が短い。瓦当周縁は狭い。瓦当幅に比べて丸部の幅はやや狭く、瓦当は上端に向かってやや反り上がる。凸面は瓦当と丸部の接合部はヨコナデでそれより尻へは縱方向のケズリ痕が残る。凹面は、布袋痕がナデ消されている。135は、連珠三巴文軒丸瓦(A-019)である。連珠は数が少なく、三巴文は大型。瓦当周縁はやや狭い。瓦当幅に比べて丸部の幅はやや狭く、瓦当は上端に向かってやや反り上がる。丸部は他の瓦と比べて厚い。凸面の瓦当と丸部の接合部はヨコナデでそれより尻へは縱方向のケズリ痕が残る。凹面は、布袋痕がナデ消されている。136は、牡丹紋軒丸瓦(B-004)である。文様は花弁の上面が浮き上がる。周縁はやや狭い。割面では、瓦当と丸部の間に接合のためのカキメが残る。137は、その他の軒丸瓦(C-014)である。連珠のない巴文で、巴上面は平たくくびれない。周縁はやや狭い。丸部はやや厚みがある。凸面は縱方向のケズリ痕が残る。凹面は、布袋痕がナデ消されている。138は大坂式軒平瓦(A-040)である。瓦当貼付け技法。文様区の上下、瓦当上端および凹面周縁は面取りされる。尻側に直径1.5cmの釘穴が焼成後に穿たれる。139は、大坂式軒桟瓦(A-026)である。瓦当は貼付けで

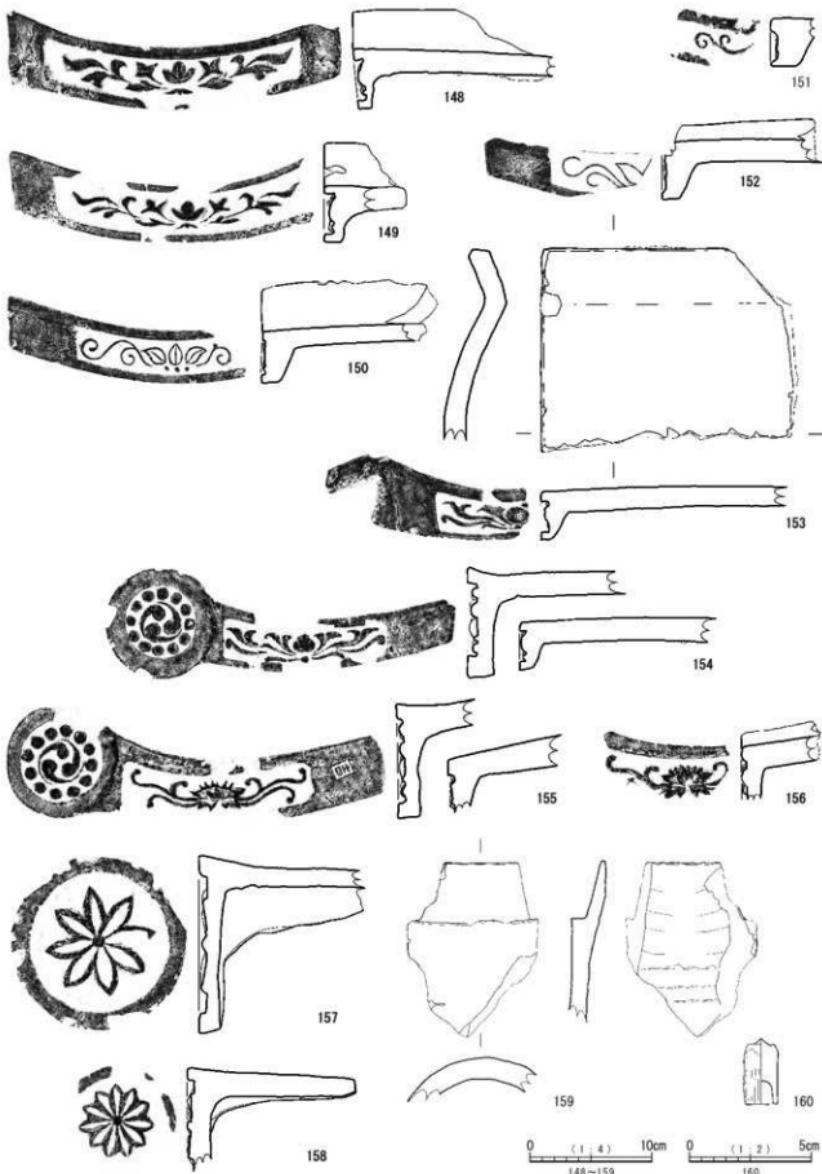
ある。瓦当上端は面取りされる。右上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ(江戸切り)、凹面周縁部も面取りされる。140は、大坂式軒桟瓦(A-051)である。瓦当は顎貼付けである。瓦当上端・下端は面取りされる。瓦当面には雲母子が目立つ。141は、大坂式軒桟瓦(A-044)である。瓦当は顎貼付けである。瓦当上端・下端は面取りされる。文様区は狭い。142は、完形に近い大坂式軒桟瓦(A-049)である。瓦当は顎貼付けである。焼成は良好。文様区は狭く、瓦当右周縁に丸に吉の刻印(刻印040-7)がある。右上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ(江戸切り)、凹面周縁部も面取りされる。143は、大坂式軒桟瓦(A-054)である。瓦当は顎貼付けである。焼成は良好。瓦当左周縁に丸に記号の刻印(刻印085)がある。瓦当上端・下端は面取りされる。144は、大坂式軒桟瓦(A-056)である。瓦当は顎貼付けである。文様区は狭い。瓦当上端・下端は面取りされる。右上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ(江戸切り)、凹面周縁部も面取りされる。145は、大坂式軒桟瓦(A-040)である。瓦当は顎貼付けである。瓦当左周縁に四角に吉の刻印(刻印040-8)がある。瓦当上端は面取りされる。146は、大坂式軒桟瓦(A-053)である。瓦当は顎貼付けである。焼成は良好。瓦当上端は面取りされる。147は、大坂式軒桟瓦(A-052)である。鎌桟瓦。瓦当は顎貼付けである。焼成は良好。瓦当上端は面取りされる。凹面周縁も面取りされる。148は、大坂式の変形の軒平瓦(C-005)である。瓦当貼付け技法。右上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ(江戸切り)、凹面周縁部も面取りされる。149は、大坂式の変形の軒平瓦(C-005)である。148よりも文様に横線はない。瓦当上端は面取りされる。凹面周縁も面取りされる。150はその他の軒平瓦(D-005)である。文様区は狭く周縁部が広い。瓦当上端と瓦当裏側下端を面取りされる。胎土が灰白色を呈し、表面には雲母が目立つ。長崎で製作された瓦である。151は、17世紀以前の古瓦の軒平瓦(D-034)である。瓦当正面は面取りされる。薩摩以外で製作された可能性がある。152は、その他の軒平瓦(D-003)である。文様区は狭く周縁部が広い。瓦当上端と瓦当裏側下端を面取りする。胎土が灰白色を呈し、表面には雲母が目立つ。長崎で製作された瓦である。153は、鹿児島式軒桟瓦(B-023)である。鎌桟瓦。文様区は狭い。瓦当上端は面取りされる。154は、鹿児島式軒桟瓦(B-023)である。文様区は狭い。瓦当上端は面取りされる。右上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ(江戸切り)、凹面周縁部も面取りされる。155・156は、その他の軒桟瓦(D-035)である。155には瓦当右周縁には四角に吉の刻印(刻印040-8)がある。瓦当上端は面取りされる。右上端部は、凹面尻側に向かって



第43図 43トレンチ 出土遺物 1



第44図 43トレンチ 出土遺物2



第45図 43トレンチ 出土遺物3

て三角形に面取りされ（江戸切り）、凹面周縁部も面取りされる。福岡県久留米市善導寺ではほぼ同様の瓦当文様を確認している。広範囲に流通する範用いた可能性がある。157は、大型の小菊瓦（K-07）である。尻から瓦当に向かって反り上がる。158は、小菊瓦（K-04）である。尻側に向かってすぼまっている。159は、陶器瓦の丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法で、凹面と凸面の丸部に強いヨコナデ痕が残る。被熱しており、釉薬はただれている。160は、エンフィールド銃の銃弾である。先端部は強い衝撃で潰されている。石垣や建造物等にぶつかったためか。

**小結** 43トレンチでは、IVa層上面で排水溝を確認した。また、121や122、123といった一般集落ではほとんど出土しない上級武士の暮らしを示す陶器が出土している。また、瓦では、長崎瓦（150）が出土している。

### 36 トレンチ（第46図～第48図）

**概要** 36トレンチは、L～N-13～15区に設定した。ここでは、排水溝の構築方法を確認するため、トレンチ内にサブトレンチを入れて下層を確認した。

**遺構** 遺構は、近世の裏込め、建物基礎の可能性のある切石、排水溝を確認した。現代では、鹿児島大学医学部の北側動物舎の礎石と排水管（土管）を確認した。

#### （1）近世

##### ①石垣と石塀背面構造

南北トレンチでは、石垣の築石は控えを面取った四角形のものがN-14・15区に、尖るものが13区に見られる。石垣の天端は平坦に抑え、高さ18cmの地覆石載せている。裏込め石は拳大から頭大の川原石が目立つ。裏込め石の覆土には、幅15cm深さ5cmの細い溝が確認されているほか隙間係の遺構は確認されなかった。

##### ②切石

南側のN-13区には44×22cmの切石が検出した。この切石の北側にはやや僅み暗茶褐色の層の落ち込みが確認されている部分があり、柱等の抜き跡窩可能性がある。遺構の性格は、建物基礎石と思われる。

##### ③排水溝

排水溝は、石垣線から6m40cmで石垣と平行に検出した。暗渠排水溝である。蓋は3枚確認されたが、他は被っていたくなかった。側石の幅は40cm、深さは80cmで、底石の標高は10mである。側石は、60～70cmの角石を2段積み上げ、底石は60cm前後の切石で内面を丁寧に整調している。標高は約10mで、接合面は水漏れが無いようく合している。これらの石材は溶結凝灰岩である。

サブトレンチでは、排水溝の構築方法等の確認のため、石垣の裏込め石から排水溝を切った。石垣近くは、おもに拳大の川原石が裏込め石として使用され、石垣から排水溝までは、平坦な土層が互層でみられ、暗渠排水溝の

両脇は崖み状の埋め立て線があり、小さく割た溶結凝灰岩の角石を詰めている。そして、城内中心側は平坦な土層が見られる。この層位を見ると、排水溝は築城の造成を平坦に造り整地した後から造り埋めている。暗渠蓋と整地表面の関係は、昭和53・54年度の発掘調査にいる擾乱で確認できなかった。しかし、この状態から観察すれば石蓋の厚みによるが暗渠蓋は10～20cm埋まっている状況である。場所によっては、露見しているところもあったと思われる。

#### （2）現代

##### ①土管

土管は西側屋根と東側屋根からの合流し、近世の排水溝に抉り穴をあけ、排水を流し込むようになっている。

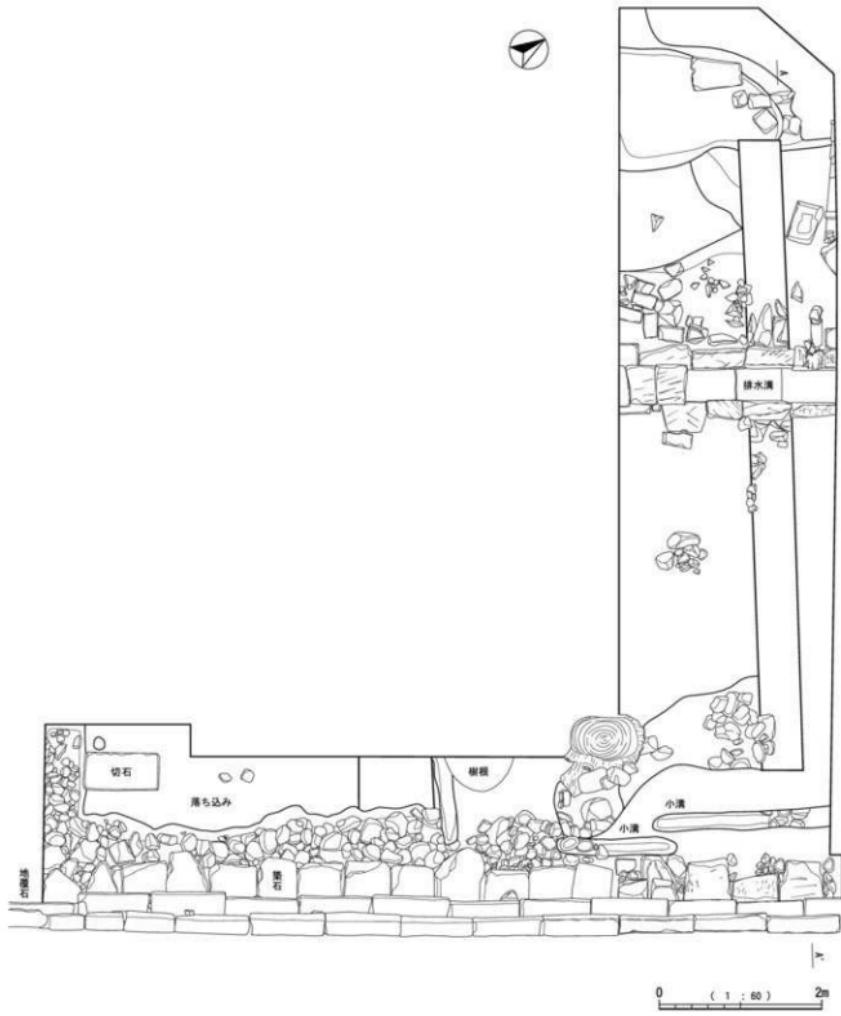
##### ②鹿児島大学医学部の北側動物舎

礎石は溶結凝灰岩の切石で、築城面の上に設置している。南側には栗石の痕跡があり、その間は190cmを測る。この動物舎はサブトレンチの断面をみると黄褐色の造成土（土層IIc）が鹿児島大学医学部の旧表層と思われる。築城造成土の上に平石があるが擾乱部である。

##### 出土遺物（第48図161～176）

161～170は、陶磁器である。161は、中国景德鎮窑系の青花皿である。底部外面が菖蒲底になる小野分類染付皿III群である。内面見込みには鳥が描かれる。162は、肥前系磁器の輪花皿もしくは鉢である。型打ち製品である。外面上には山文が描かれ、内面の文様は海藻か。19世紀初頭～幕末。163は、肥前の磁器小碗。文様は型紙借りで両面に描かれる。明治・大正時代。164は、堅野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の碗か。外面上の文様は、島津家の家紋である「丸に十の字」の可能性がある。18世紀～19世紀。166は、瀬戸美濃の磁器筒型碗である。統制食器で、外面上には二条線の下に「國立高田…」と書かれる。施設名は不明である。165・167は、堅野系の灰色陶胎の小碗である。総釉で、高台付近は露胎。165は端反碗で、167は高台小さい。18世紀～19世紀。168は加治木・姶良系の陶器小碗である。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。被熱しており、釉薬はただれている。18世紀後半以降。169は、陶器屏風立てである。前面には同心円文、側面には花文が描かれ、内面も施釉されるが、背面は露胎である。屏風の押さえとして使用されたと考えられる。170は、苗代川系の陶器甕である。内面・外面上に横方向の調整痕がある。

171～174は、瓦である。171は、鹿児島式軒平瓦（B種）である。瓦当貼付け技法。瓦当上端・下端は面取りされる。172は、埠瓦である。上面には、同心円状の文様が彫られている。173は、17世紀代の古瓦の平瓦である。凹面・凸面ともに、コビキアが残る。凹面には、タタキ系の工具痕が残っている。朝鮮系瓦の影響か。174は、埠瓦である。埠瓦にしては薄い。釘穴は穿たれていない。上面

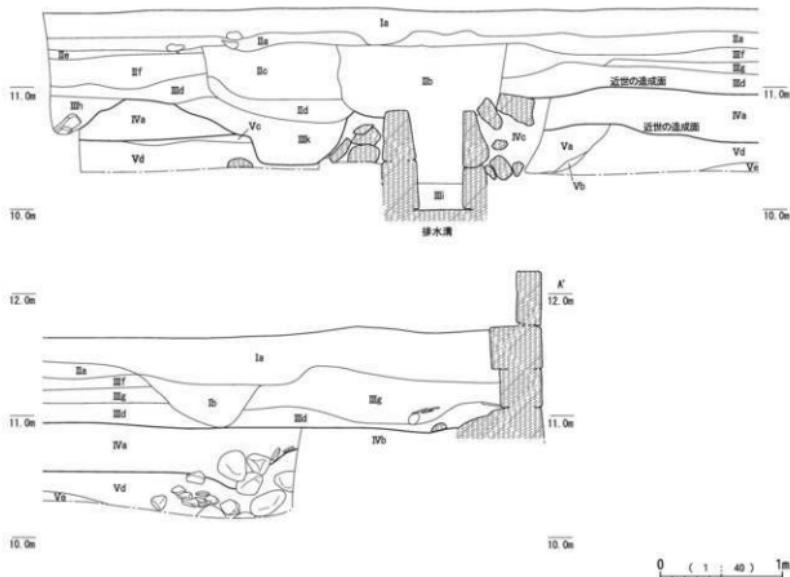


第46図 36 トレンチ平面図

## 36T( A-A' )

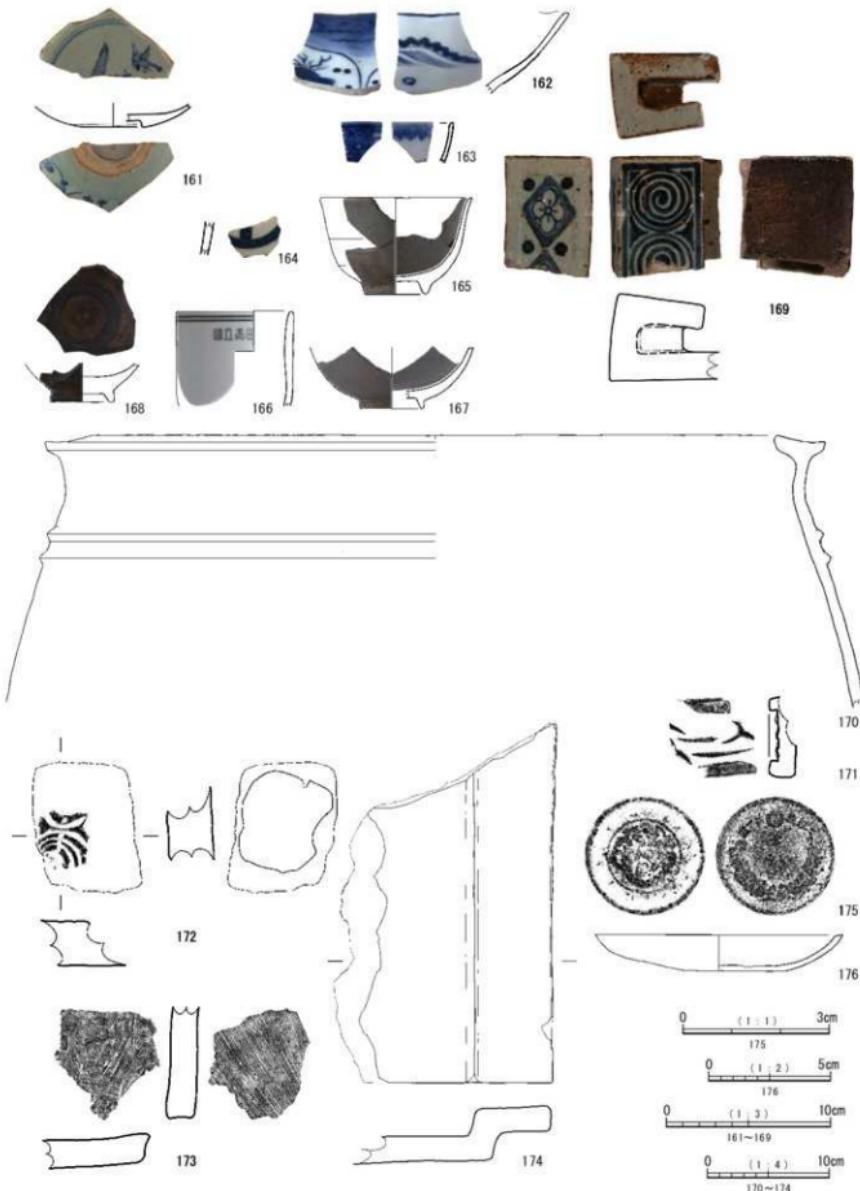
A  
12.0m

12.0m



層	色(記号)	色名	特徴
		I a, II a, II b, II c, II d, II e, II f, III d	I a, II a, II b, II c, II d, II e, II f, III d は 44T と同じ
III h	2.SY4/2	暗灰黄色土	白色粒が多く含まれ、瓦が多く出土。遺構か?
IV b	10YR4/4	褐色土	黄褐色風化深。白色粘粒など含み、土質はしまる。(排水溝端部、石垣天端に近いレベルの為、薄政期造成土か?)
IV c	10YR5/4	にぶい黄褐色土	土質は柔らかく均質。(排水溝裏込め)角状、破碎、凝灰岩が多く入る
III i	10YR3/1	黒褐色土	褐灰色砂土(10YR4/1)互層(排水溝機能時か発掘調査時の埋戻しまでの水成堆積かは判断できず)
III f	2.SY4/2	黒褐色土	やや粘性がある
III g	2.SY4/1	黄灰色土	砂粒が粗く、針金(番線)、瓦が入る
IV a	10YR4/4	褐色土	黄褐色粒や白色粒が含まれ、全体的に砂粒は粗い。(44トレンチIII f層と同じ層か?)石垣背面に近い所は大礫が入る。礫石残?造成土であることから箇所によっては変化あり
III k	7.SYR4/1	褐灰色土	1cm未満の礫が多く含まれる
V a	10YR4/2	灰褐色土	礫、凝灰岩片が多く入る
V b	10YR4/1	褐灰色土	細かい凝灰岩破碎礫層
V c	7.SYR6/2	灰褐色土	細かい凝灰岩破碎礫層と砂の混合層
V d	10YR3/1	黒褐色土	砂質が強く0.5~3cmの礫が多く含まれる
V e	10YR4/3	にぶい黄褐色土	均質層

第47図 36トレンチ土層断面図(北壁)



第48図 36トレンチ 出土遺物

の周縁は面取りされている。

175は、銅錢である。明治11（1881）年の半錢である。

176は、鉄製の皿である。内面見込み中央部周辺は円形に削られている。近代以降のものと考えられる。

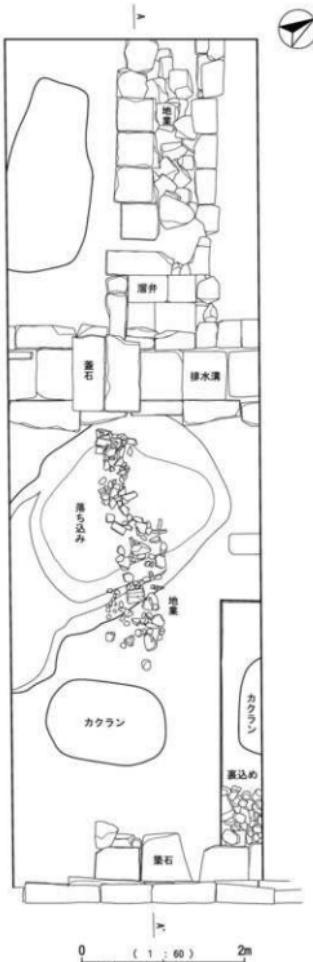
**小結** 切石は、建物の基礎石の可能性がある。明治6年(1873)年「鹿児島屋形及びその周辺図」(第145図⑦)では、能舞台が奥御書院・サギ之間・麒麟之間と龍之間・熊之間に北・西・南を囲まれ、囲み東は直線の堀で囲んである。明治初期の古写真(第147図⑥)では、サギ之間及び麒麟之間の能舞台側に堀が写っている。この堀は庭園奥の方まであり、位置的には熊之間からも離れたと思われる。よって何になるか、確定はできなかった。

近世の造成面であるIV b層より下で確認された石垣と排水溝の間の栗石は、排水溝と石垣の天端ラインより低く、掘り込みラインがないので造成土の中の円錐集中と思われる。遺構であるとすれば、この付近に庭園が築かれる以前のものである可能性がある。

陶器屏風立て(169)の出土は、藩主の私的空间としての意味合いの強いこの周辺にあった建物に、屏風が立てられていたことを示唆する。

は厚さの異なる溶結凝灰岩の板石を使用し、内面の接着  
は工廠に面取りしている。

東西の暗渠排水溝は、動物舎の布基礎部に当たったため約50cm幅で暗渠の中には、暗渠蓋を壊し、頭大の円礫や角礫を暗渠の中に詰めていた。暗渠蓋は溶結凝灰岩で約1.3m～0.4m程と思われる。廃絶時には、排水溝蓋の真ん中に差し泡立・円礫や瓦等を詰め込んでいた。



第49図 44トレンチ平面図

#### 第 44 トレンチ（第 49 図～第 53 図）

**概要** 44 トレントは N～L-12・13 区に設定した。昭和 53・54 年度の調査では、熊之間から石垣に向かう排水溝が確認されていなかった。今回の調査では、能舞台の橋掛りと熊之間の一部が確認されたため、それらの施設からの排水溝を確認することも目的とした。

当初は、 $2\text{m} \times 10\text{m}$  トレンチの調査範囲で進めたが、コンクリート基礎と布基礎が検出されたため、幅を 1m 拡げ、 $3\text{m} \times 11\text{m}$  トレンチで調査した。

土層は、排水溝上面まで、大半が近代建物遺構で搅乱されていた。近世の造成面及び遺構は、IV層と排水溝蓋の上面である。そのため、遺物は大半が搅乱層でコンクリートブロックや鬼瓦と混在している近代の造成土中で出土している。

**遺構** 遺構は、裏込め、近世の排水溝2列、現代の鹿児島大学医学部の南側の動物舎、土管を確認した。

### (1) 近世

### ①石壩と石壩背面構造

石垣の天端を出し、一部裏込め石を検出した。天端の上には高さ 14 cm の地覆石を置き、頭大から拳大の裏込めを確認した。

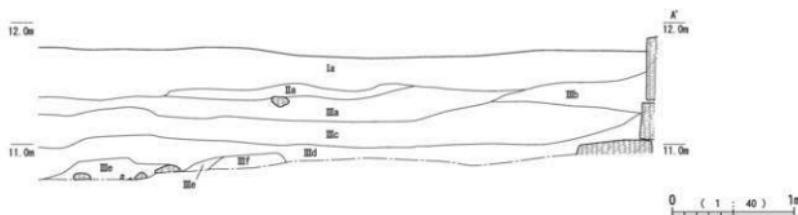
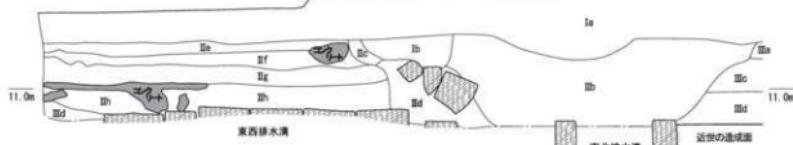
## ②排水溝

排水構は南北方向と東西方向がT字型に検出された。南北方向の暗渠排水構は昭和53・54年度に検出されているものである。排水構蓋は標高10.94mと10.92mで、側石高が約10.7mを測る。土台は標高10.1mで、幅約60cm、高さ約70cmの暗渠排水構である。この排水構

44T(A-A')

A  
12.0m

12.0m



番	色(記号)	色名	特徴
I a	7.SYR4/3	褐色土	明褐色土(7.SYR5/6) ブロック土が多く含まれる
I b	7.SYR4/3	褐色土	明褐色土(7.SYR5/6) 樹根
II a	2.SY5/2	暗灰褐色土	砂質が強く、土質はしまる。(トレーナによっては部分的に有無)
II b	10YR3/2	黒褐色土	コンクリート、磚、瓦が多く含まれる
II c	10YR4/3	にじい黄褐色土	均質土。土質は柔らかい
II d	10YR5/3	にじい黄褐色土	凝灰岩切石。コンクリート廃棄坑?溝状?
II e	2.SY4/1	黄灰色土	土質は固くしまる
II f	10YR6/4	にじい黄褐色土	土質は固くしまる
II g	10YR4/1	褐色土	炭化物、白色粒が含まれる
II h	10YR4/2	灰褐色土	コンクリートが多量に入り、コンクリート構造物基礎が残存
III a	10YR5/3	にじい黄褐色土	φ 1~5mm 砂が多く、砂質が強い
III b	10YR3/1	黒褐色土	土質は非常に柔らかい
III c	10YR3/2	黒褐色土	砂質が強く、崩れやすい。瓦が多量に含まれる
III d	10YR4/2	灰褐色土	砂質土。φ 2~4mm の砂が含まれる
III e	10YR4/3	にじい黄褐色土	砂質土。瓦片、漆喰片が多く含まれる
III f	10YR4/4	褐色土	砂質土。黄褐色土粒が多く含まれる

第50図 44 トレーナ土層断面図（北壁）

東西方向の排水溝は、南北方向の暗渠排水溝へ通ずる接合部は、幅 86 cm、奥行き 72 cm、深さ 59 cm の鉢形排水調整施設になっている。底石は角石 4 枚で平坦面である。調整板石は、東西側石の一部に支柱を立てて必要時に開けるように、周りに隙間が見られる。そして、奥には溶結凝灰岩に枘を切り、そこに板を差し込み、水流の調整をする施設ある。南北排水溝等の側石は小柱を立て、四角石 1 枚を外せる細工が見られる。よって、この部分の廃液調整池は、開渠の可能性も考えられる。この施設は、奥にある能舞台や熊之間関連の排水溝と城郭を回る

排水溝等と考えられる。これらの石材は全て溶結凝灰岩製である。

## (2) 近代・現代

### ①鹿児島大学医学部南側動物舎

建物は鹿児島大学医学部の南側の動物舎にあたる。この動物舎は当時の配置図では 36 トレーナで検出した北側の動物舎より若干大きめである。排水溝を絶気に、その上にコンクリート基礎を置いていた。

### ②土管

コンクリート基礎より南側に土管が並行して検出され

た。土管は地下に埋設されており、当時の地表と思われる切り石が一段上に検出されている。

### ③その他

円錐や瓦片等が列状に集められている。この遺構の下からも間層を得て漆喰を含む瓦廻りが行われた落ち込みが確認された。上層には焼け瓦に入るが、下層には焼け瓦が混入していない。下層の瓦溜りは、暗渠排水溝の側石まで及んでおり、城放棄後のものと思われる。よって、円錐等列状は近代遺構と考えられる。また、石垣側にも、同様な瓦溜りもみられる。

### 出土遺物（第51～53図 177～213）

177～187は、陶磁器である。177は、中国景德鎮窯系の青花碗である。清朝磁器である。外面には牡丹唐草文が描かれる。高台内側には文字文がある。17世紀末～19世紀。178は、磁器壺か。外面に「鹿児島大学医学部」と書かれている。昭和32(1957)年～昭和49(1974)年の間に用いられたものと考えられる。179は、産地不明の陶胎染付碗である。薩摩の可能性があるが、類例は今のところ確認されていない。ベトナムの安南染付の模倣か。厚手。内部は一条線の下に、外面は二条線の間とその下に草花文が描かれる。18世紀～19世紀。180は、薩摩の陶胎染付小碗である。外面は、高台付近に一条線、その上に文様が描かれる。高台まで総釉だが疊付は釉剥ぎされる。18世紀～19世紀。181は、堅野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の碗か皿である。高台裏側には4か所にハリの痕が残る。チャツに入れて焼かれたものか。高台まで総釉だが疊付は釉剥ぎされる。18世紀後半以降。182は、宋胡録写の碗等の小片である。18世紀後半～19世紀。183は、堅野系の茶入である。器壁が厚く、肩衝型で胴部が直線的になる（関分類I-1-①）。御里窯製のものか。17世紀前半。184は、加治木・姶良系陶器碗である。赤褐色系胎土に鉄釉を掛ける。18世紀後半以降。185は、苗代川系陶器鉢である。口縁部がT字型を呈す。18世紀。186・187は、陶器壺か。無釉で、花や唐草を浮彫りする。近代か。

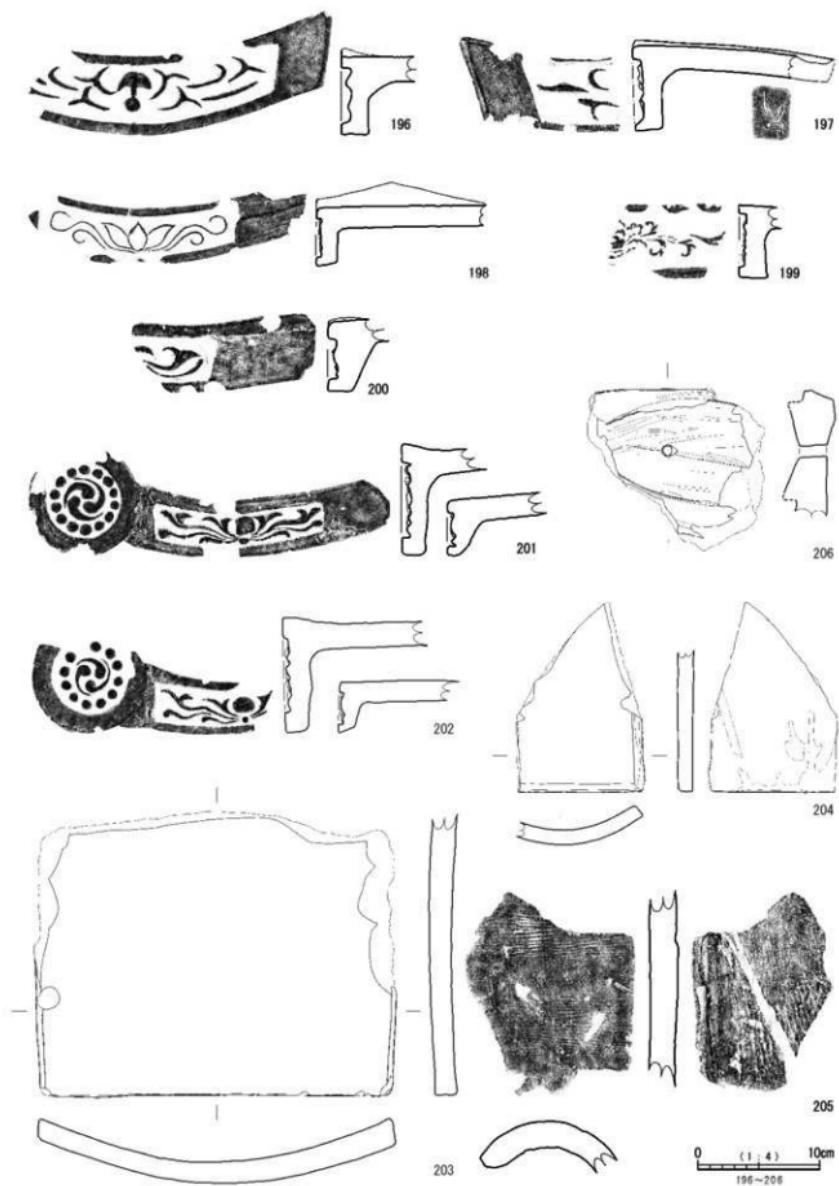
188～210は、瓦である。188は、連珠三巴文軒丸瓦(A-024)である。連珠は大型だが数は少なく間隔は広い。瓦当周縁は狭く、側面には強いナデの痕が残る。189は、連珠三巴文軒丸瓦(A-058)である。瓦当は厚く、周縁は広い。瓦当表面には雲母子が目立つ。190は、連珠三巴文軒丸瓦(A-057)である。大型だが、連珠は小さい。巴文は頭が大きい。瓦当裏側は、周縁に沿ってナデの痕が残る。191は、連珠三巴文軒丸瓦(A-059)である。瓦当周縁には、板状の圧痕が残る。凸面は瓦当と丸部の接合部はヨコナデでそれより尻へは縦方向のケズリ痕が残る。凹面は、布袋痕がナデ消され、瓦当との接合部は、指オサエの痕が残る。192は、連珠三巴文軒丸瓦である。瓦当周縁は広い。瓦当表面には雲母子が目立つ。193は、

連珠三巴文軒丸瓦(A-064)である。連珠は小型で、巴文は長い。丸瓦部から瓦当上端に掛けてはやや反り上がる。灰白色の胎土で雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。194は、連珠三巴文軒丸瓦(A-060)である。大型だが、連珠は小型で少ない。凹面は、布袋痕がナデ消される。195は、牡丹紋軒丸瓦(B-003)である。丸部から瓦当にかけてやや反り上がる。凸面は瓦当と丸部の接合部はヨコナデでそれより尻へは縦方向のケズリ痕が残る。196は、大型の鹿児島式軒平瓦(B-016)である。瓦当右周縁を面取りする。瓦当は、瓦当貼付けである。瓦当との接合部には、強いヨコナデ痕が残る。197は、大坂式の変形の軒平瓦(C-003)である。瓦当は、瓦当貼付け。瓦当上端と左周縁を面取りする。文様区下側を強くなる。凹面はヨコナデ調整。凸面には、旧字の「ゐ」のような字が線刻される。198は、その他の軒平瓦(D-003)である。瓦当正面は面取りされる。灰白色の胎土で雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。199は、その他の軒平瓦(D-039)である。瓦当は瓦当貼付け。瓦当には面取りしない。200は、軒平瓦(分類不明)。文様区は狭く、周縁が広い。瓦当上端を面取りする。201は、鹿児島式軒枝瓦(B-008)である。瓦当上端・下端は面取りする。瓦当右周縁から凹面尻側に向かって三角形に面取りされる(江戸切り)。202は、鹿児島式軒枝瓦(B-008)である。瓦当上端・下端は面取りする。203は、平瓦である。凹面・凸面の瓦当周縁は面取りする。凹面には、水が流れた痕が残る。204は、陶器瓦の平瓦である。粘土紐巻き上げ技法で成形され、凸面にはタタキ痕が残る。凹面周縁は面取りされる。釉薬は凹面全面に施されており堂平窯跡で製作されたと考えられる。被熱しており、釉薬はただれています。205は、朝鮮系瓦の丸瓦である。凸面は、タタキによる文様がある。場の凹面には布袋痕が残る。朝鮮系瓦にしては厚く、意図的な文様でもないことから、朝鮮系瓦の技術を用いた在地瓦か。206は、鬼板瓦である。鱗状の表現が見られる。207は、丸瓦である。凸面に四角に木藤の刻印(刻印025)がある。凹面の布袋痕は、ナデ消されて残らない。玉縁と玉縁との接合部には、強いヨコナデの痕が残る。208は、丸瓦である。凸面には、土山弥右衛門の刻印(刻印172-1)がある。熊本県益城町の土山瓦のものである。凹面には、布袋痕が残る。胎土は、在地のもと似ているが、灰色がかっている。209は、平瓦である。凹面に六角形に「太左衛門」の刻印(刻印026-2)がある。凹面の周縁は面取りされている。凸面には、縦方向のケズリ痕が残る。210は、輪違いである。凸面には、丸に兵の刻印(刻印070)である。凸面周縁は面取りされる。

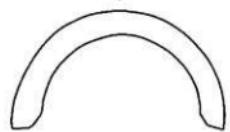
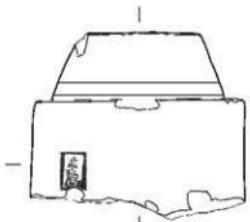
211は、コンクリート製の標識である。表面に油性ペイントで書かれたと思われる表記があるため戦後のものか。



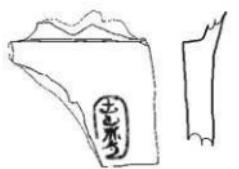
第51図 44トレンチ 出土遺物 1



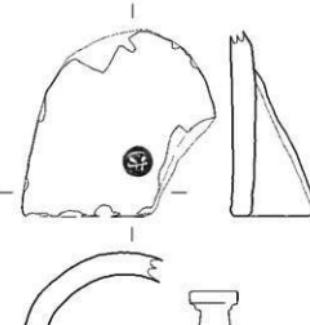
第52図 44トレンチ 出土遺物2



207



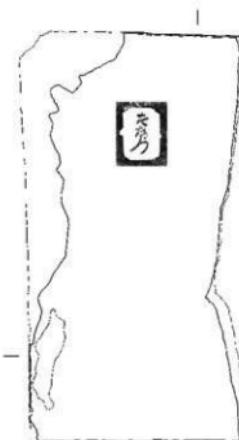
208



210



208



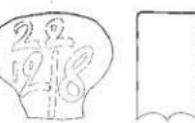
209



213



212



211

0 (1 : 1) 3cm  
212

0 (1 : 2) 5cm  
211-213

0 (1 : 4) 10cm  
207-210

第 53 図 44 トレンチ 出土遺物 3

212は、銅錢である。寛永通寶の新寛永である。213は、注射器または滴管器のプランジャーである。登録商標のあるマークが刻印されているが、詳細は不明。

**小結** 東西方向と南北方向の排水溝の接合部では、溜弁を用いた水量調整を行っていたことが確認できた。

遺物では、長崎瓦（198）、肥後の土山瓦（208）が出土している。土山瓦とは、熊本城築城時に熊本市小山で瓦を焼いていた瓦職人が、18世紀初頭に益城町土山に移り住んで焼いた瓦で、熊本城だけでなく、近隣の豪商の商家などにも用いられたといふ。「土山瓦師頭領事績」によれば、各瓦師家（北村、猿渡、福田、坂上、芦原）の初代は加藤清正に瓦師の任命を受けたとされており、御作事頭に所属する藩直轄の時期と郡直轄の時期があるものの、基本的には藩の管理を受ける御用瓦師であった。土山瓦は、北村、猿渡、福田、坂上の家のそれぞれ瓦師の頭領を階級しており、芦原家のみ瓦師横目（瓦師を管轄する役人）から瓦職人となっている。この刻印172-1は、芦原弥右衛門（天明7年（1787年）～文政8年（1825年））が用いたものである。肥後で製作されたものと考えられる。

### 37 レンチ（第54図～第57図）

**概要** L～N-10・11に設定した。この地点は、昭和53・54年の調査で、「く」の字に折れる排水溝が確認されている。今回は、石垣背面構造の確認とともに、その排水溝の再確認と水路屈曲の原因を探ることを目的とした。

最初に石垣に直交して3m×10mのレンチを設定し、その後、石垣と平行に2m幅で5m拡張した。土層は、第1層～第f層までは現代整地層と近代特に鹿児島大学医学部関係層で、コンクリートブロック、土管等出土している。近世の造成面は、標高約10.3mで確認された。遺構 遺構は、近世の裏込めと排水溝、現代の鹿児島大学医学部動物学者の一部を確認した。

#### （1）近世

##### ①石垣と石垣背面構造（第54図・第55図）

石垣の積み方は、石垣天端の上に地覆石が乗りそのままに第七高等学校以降の石垣が見られる。

石垣裏込めは、頭大から拳大の石が確認されているが、調査区南側には、特に大きい石が目立つ。

##### ②排水溝（第54図・第55図）

昭和53・54年度で確認した形排水溝は、蓋が4枚見られる。蓋の両脇には同レベルで動物舎のセメント造構が残り、当時は排水溝と同じ使用面と考えられる。

排水溝が「く」の字状に折れた部分は、切り石が溝内に埋められていた。その切り石を取り上げて排水溝の中を確認した。

「く」の字に折れる部分の北側排水溝の側石は2～3段積の四角形もしくは多角形の切り石の技法が見られ、

石材表面は鑿調整で平滑に整えられていた。しかし、「く」の字に折れる西側の排水溝の側壁は石面が小まな鑿調整で測取りを施したものと枘穴のある二次使用板石を積み上げている。また、北側排水溝が直進した場合の延長線上にサブトレーナーを設定したところ、排水溝を検出した。この側溝の幅は約60cmで「く」の字に折れる北側の排水溝の規格と共通する。これらの技法・規格の違いや南北に直進した場合の排水溝が確認されたことから、排水溝はもともと南北に直線的に伸びていたものが、あとから「く」の字7に曲がるように付け替えられたと考えられる。

#### （2）現代

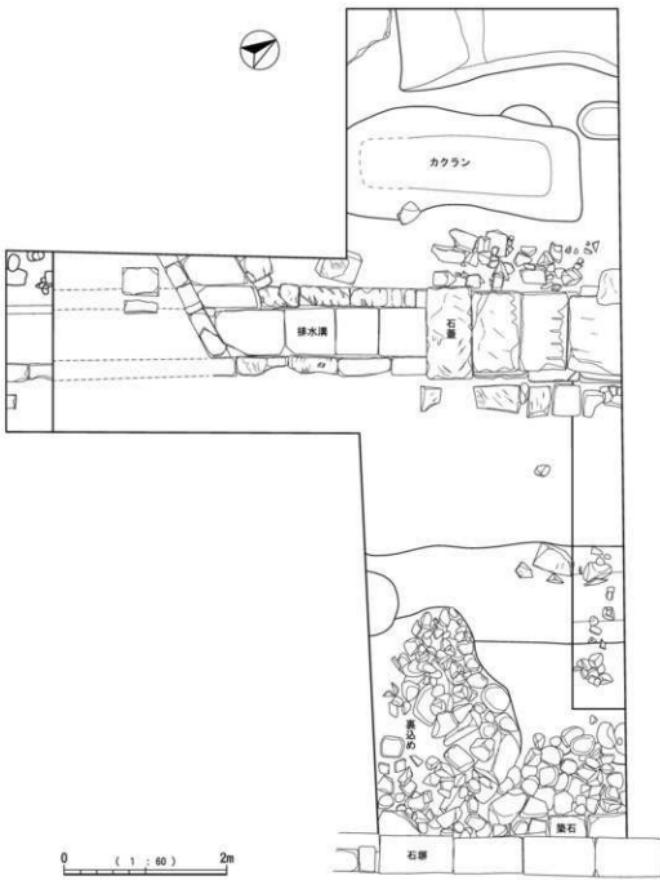
##### ①鹿児島大学医学部南側動物舎

第II b層検出の土管は、江戸時代の暗渠排水溝の蓋と側石に枘穴を加工し接続できるようにしている。また、M-11区には動物舎の基礎と思われる漆喰混じりのブロックが掘りこまれ上面にモルタルが塗られている。これらの層には漆喰粒子が混ざり、かなり攪乱を受けた様子が伺えられる。括張部では石垣と平行する水路と平行に約5mの土管緊目を漆喰で巻いた状態で検出した。これらは、鹿児島大学医学部動物舎跡と考えられ、標高は土管の下部が標高約11mである。

##### 出土遺物（第56図～第57図 214～229）

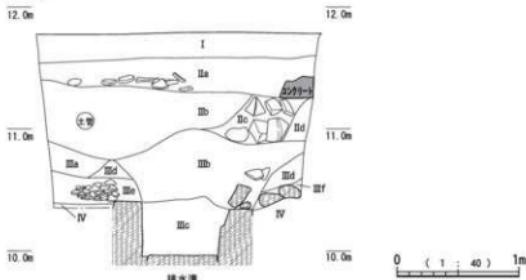
214～217は、陶磁器である。214は、中国龍泉窯系青磁の蓋である。外面には、蓮弁がある。明末のもので、14世紀後半～15世紀中頃。215は、加治木・姶良系の陶器碗である。龍門司窯で焼かれた物である。内面見込みも蛇の目剥きされる。18世紀後半以降。216は、肥前有田の器皿である。内面見込中央に草花文、その周囲には余白があり、そこから再び草花文が描かれる。高台内側には、釘書きで、「～〇次」の文字が彫られている。1820～1860年代。217は、陶器鉢である。植木鉢か。産地は不明だが、薩摩か。外面には、白化粧土と黒化粧土で線状の文様が入る。19世紀。218は、土師器壺である。底部には、糸切り痕が残る。口縁部が黒色化しており、灯明皿として使用されたと考えられる。

219～226は瓦である。219は、牡丹紋軒丸瓦（B-008）である。瓦当周縁は広く、B種の中では厚手である。220は、連珠三巴軒丸瓦（A-021）である。連珠は小さく巴は長い。瓦当周縁は広い。瓦当裏側は、周縁に沿って強くナデられており、一段低くなっている。胎土は灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。221は、大坂式軒枝瓦（A-054）である。小型で、文様区は狭い。瓦当上端・下端は面取りされる。瓦当右周縁に○に平の刻印（刻印052）がある。222は、大坂式軒谷瓦（A-050）である。瓦当上端・下端は面取りされる。大坂式軒平瓦の中では、焼成が不良である。右周縁に山に西の刻印（刻印043-1）がある。223は、



第54図 37トレンチ平面図

### 37T(南壁)



層	色(記号)	色名	特徴
I		表土	
II a	10YR6/1	褐色土	コンクリート、瓦片、多量、現代整地土
II b	10YR3/1	黒褐色土	土管埋設溝。近代
II c	7.5YR2/1	黒色土	コンクリート塊。廃棄土坑
II d	10YR3/2	黒褐色土	5mm程の礫が多く含まれる。排水溝付替後整地層
III a	10YR4/1	褐灰色土	黄褐色土混じり。近代坑
III b	10YR4/2	灰黃褐色土	砂質土。5~20cmの礫を含み、しまりがない。側石抜き取り後埋土
III c	10YR3/1	黒褐色土	砂礫層。礫は5mm程。砂粒は粗い
III d	7.5YR3/1	黒褐色土	砂質土。砂粒は粗く、5mm程の白色輕石粒を含む。抜き取り側石裏込土
III e	2.5Y/1	黒褐色土	砂礫層。基岩破碎礫層。砂混じり。排水溝上段(抜き取り部)裏側部、一部抜き取り後流れ込む。(破線部右側)
III f	2.5Y/1	黒褐色土	砂礫層。Ⅲ e層と同じ。20cm程の礫を含む
IV	10YR5/6	黃褐色土	明黄色~白色的風化礫を多く含む。側石下段裏込土

第 55 図 37 トレンチ土層断面図 (南壁)

解瓦である。上面の周縁は面取りされている。張り出しの接合部付近に、直径1.5cmの釘穴が焼成後に穿たれ、錆跡れた釘が残っている。224は、平瓦である。凸面には、×のような割刻がある。225は、丸瓦である。隅丸方形に正衛門の刻印(刻印 027-3)がある。凸面は、玉縁とその接合部付近に強いヨコナデ痕が残る。凹面には、玉縁付近に布袋痕が残り、それより頭側にはコビキBが残る。226は、鬼瓦である。鬼面の額部分と考えられる。額部分にはキザミがあり、その下には、貼付けた眉毛の粘土がとれた痕が残る。背後の支え野部分に板状の面を貼付けて鬼面を作っている。

227は、硯である。幅広で大きい長方硯で、黒川分類の黒褐色系のものである。228は、注射器または浣腸器である。登録商標のマークが刻印されているが、詳細は不明。鹿児島大学医学部と関係か。229は、ウニの瓶詰である。スクリューキャップがあるので、昭和35(1960)年以降の製品であると考えられる。底部の記号から瓶の製造元は山村硝子(または山村製場所)である。

**小結** このトレンチでは、最初の排水溝設置以降に、排水溝の付け替えという新たな造成が行われたことを確認できた。

遺物では、長崎瓦(220)が確認された。

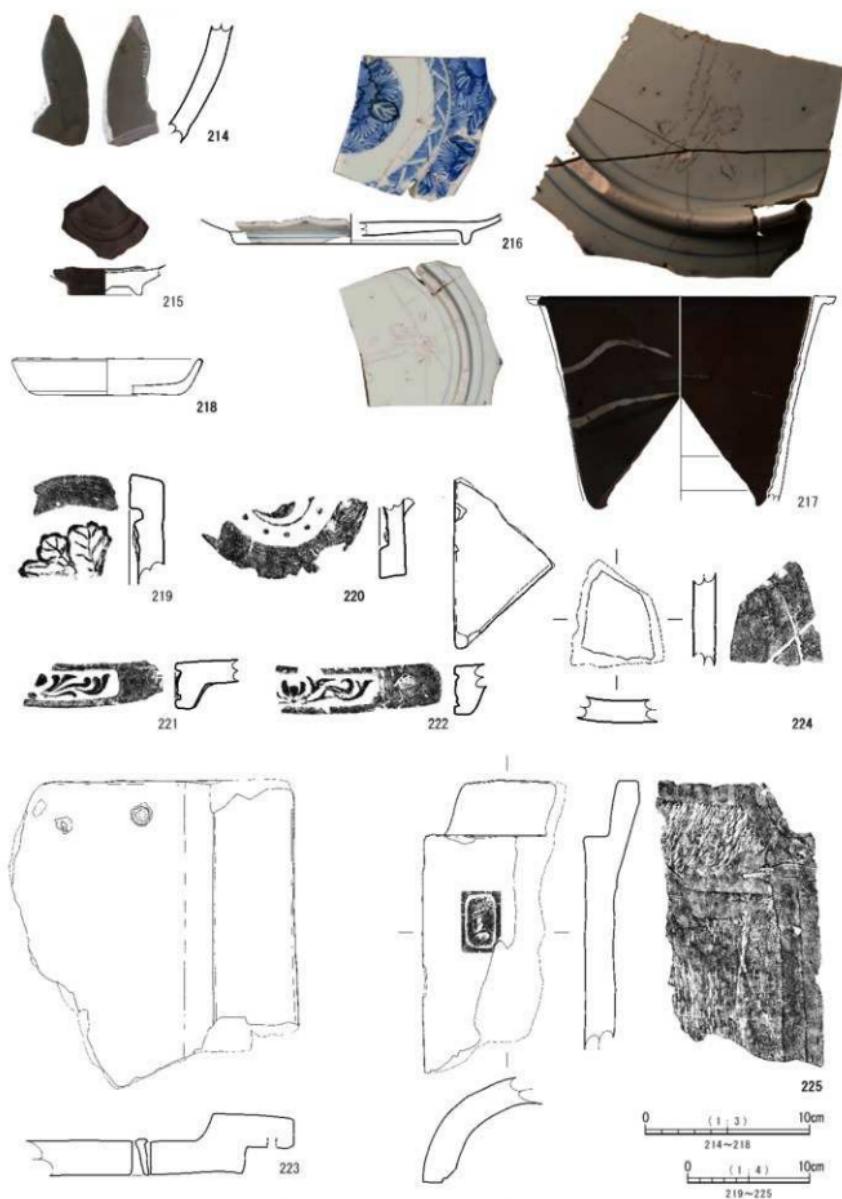
### 41 トレンチ東(第 58 図~第 63 図)

**概要** 調査区は、明治5(1872)年「島津御本丸庭園景」(第147図⑥)で、麒麟之間の東方向で築山と滝状の落水と小池が、同年「島津御本丸池畔景」(第147図⑤)で御庭があった場所に想定されている。

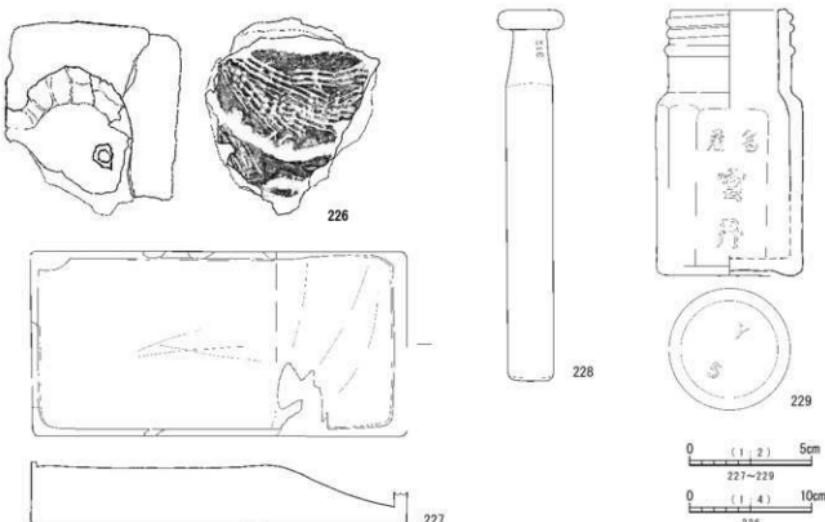
41 トレンチは、東がL・M-7~9区と西はK-7~9区の2か所に設定した。当初、37 トレンチからの排水溝延長部の確認と平成11年の石垣修復の際の掘削範囲の確認のためのトレンチを設定し、調査を行った。その後、設定したトレンチ中央部が高まりになっており、幅広の扁平板石が露出していたことから、地下に御庭に遺構が残存している可能性が高いと判断し、御庭遺構の確認を目的として調査区を西側に拡張した。その後、東トレンチで築山遺構が確認され、その西側に池があることが想定されたことから、その池を確認するために西トレンチを調査した。

### 41 トレンチ東区(第 58 図・第 60 図)

**概要** 当初設定した2m × 9mの南北方向のトレンチを設定したが、それを御庭の遺構残存状況確認のために拡張した。築山遺構の確認後、土層やその下層構造確認のためにサブトレンチを設定した。調査の結果、石垣この工事範囲を確認し、排水溝や御庭の築山を確認した。



第 56 図 37 トレンチ 出土遺物 1



第 57 図 37 トレンチ 出土遺物 2

#### 石垣工事範囲（第 58 図）

平成 11 年度の石垣修復工事の際の掘削は、石垣天端から、約 5 ~ 6 m の範囲で行われていたことを確認した。その埋土には、裏込めを詰めて整地した後、石垣修復時の残りの築石を残していた。いずれも溶結凝灰岩で保存状態は良かった。

**遺構** 遺構は、排水溝の排水溝 2 列、御庭の築山が確認された。

##### （1）排水溝

###### 排水溝①（第 58 図・第 59 図）

排水溝①は、築山の造成土確認のためのサブトレンチの下層から確認された。37 トレンチで確認された「く」の字に曲がる以前の御櫻門部分から直線的に伸びる排水溝である。37 トレンチの排水溝と同じく、御庭造営のため壊されており、その残骸の上に築山の盛土が造成されている。

排水溝は、築山造営時に廃棄されたようで、築山の造成土には、その破片が入っている。石材は溶結凝灰岩である。形が長方形で切り込みは直線、調整面は盤切痕で丁寧な仕上げである。

第 59 図 B 面や E 面・F 面で確認されたのは、北側側壁で、南側の側壁や底石は抜き取られている。C 面の 2a 層は、底石の抜き跡である。このことから、現在サブトレンチ 1 ~ 3 で確認されているものは、側壁の西壁であり、本

来はこの東側に底石、東側の側壁があったが、それらは、抜き取られたと考えられる。側壁の天端高は、10.3m である。その後、排水溝は 1 m 近く埋められており（標高 11m ~ 11.2m）、その埋土上に築山は、その上に造成された（第 58 図下）。

###### 排水溝②（第 58 図・第 59 図）

サブトレンチ 3 の F 面では、石材が密集していた。これらの石材は、溶結凝灰岩である。割れ面以外は、表面は平滑に整えられているものが多い。土層北側では、石材 2 石が 2 石重なっており、これが排水溝の側壁であると考えられる。これは、排水溝①と合流すると考えられる東西方向の排水溝である。この地点は、排水溝②と排水溝①の合流点であったと考えられる。

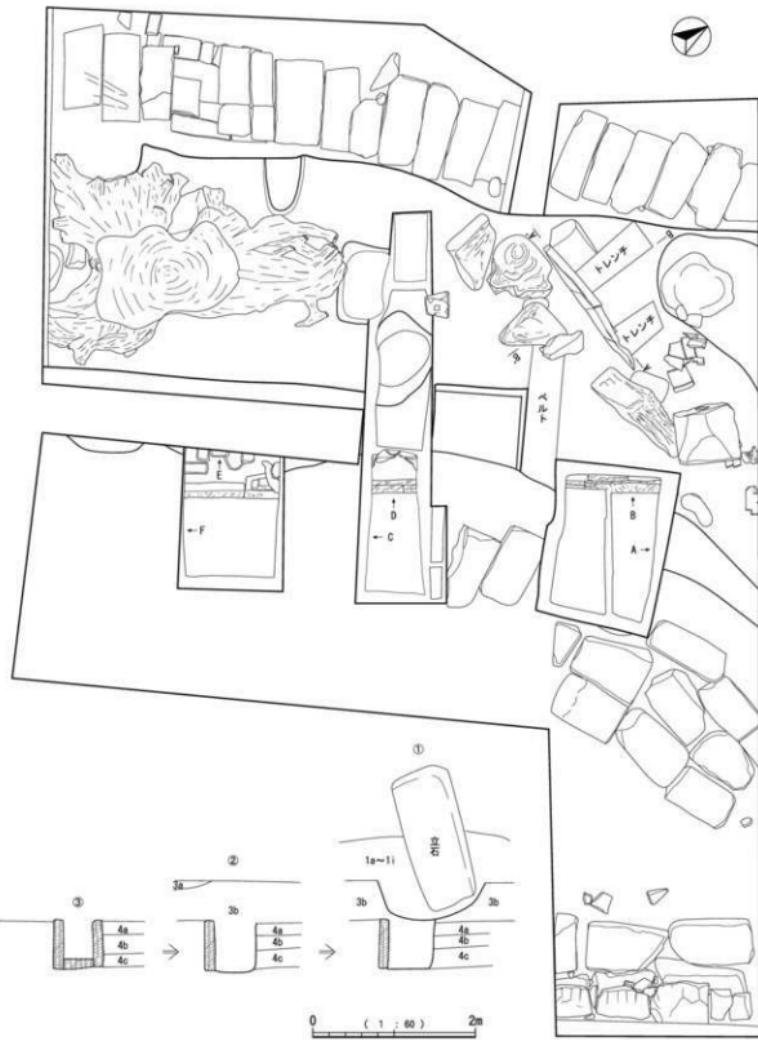
F 面下から 2 段目の石材は L 字になっており、この部分で西側からの排水の水量を調節していた可能性がある。周辺に大型の礫石は、この排水溝の残骸である。

この排水溝も、排水溝①と同じく、庭園の造成に伴つて廃棄されたものと考えられる。

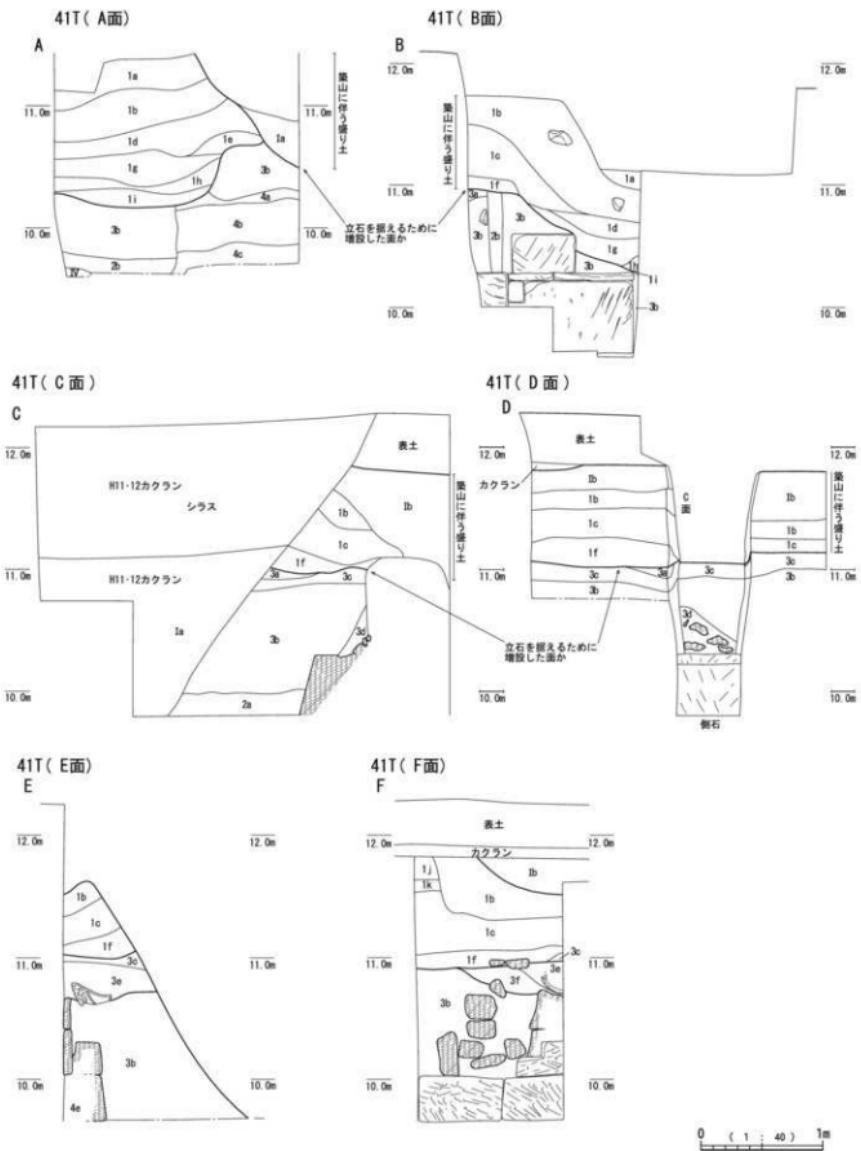
###### 排水溝③（第 58 図・第 60 図）

37 トレンチで「く」の字に折れた排水溝は、M-9・10 区で更に屈折し、この排水溝③になつていると考えられる。御庭造成時に付け替えられた排水溝である。

排水溝の標高は、北側が 11.51m、弧状部が 10.81m で、東が 10.74m である。そして、この暗渠排水溝の破損



第58図 41 トレンチ平面図・断面模式図



第 59 図 41 トレンチ土層断面図 (A ~ F 面)

第4表 41 トレント A・B・C・D・E・F 面土層注記

層	色(記号)	色名	特徴
I a	10YR2/1	黒褐色土	H11.12 年擾乱
築山 1a	7.5YR4/2	灰褐色土	白色繊維が多く含む。立石埋土、築山積土
築山 1b	7.5YR4/3	褐色土	砂礫を多く含む。立石埋土、築山積土
築山 1c	10YR4/2	灰黃褐色土	黒色粘土、灰色粘土を含む。立石埋土、築山積土
築山 1d	10YR3/2	黒褐色土	0.5 ~ 1cmの繊維が多く含む。立石埋土、築山積土
築山 1e	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質土。砂粒が粗い。立石埋土、築山積土
築山 1f	2.5Y4/2	暗灰褐色土	均質土。立石埋土、築山積土
築山 1g	10YR4/2	灰黃褐色土	砂質土。1cm程の繊維が多く含む。立石埋土、築山積土
築山 1h	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質土。淡黄色風化繊維を多く含む。立石埋土、築山積土
築山 1i	10YR4/1	褐灰色土	立石埋土、築山積土
築山 2a	10YR4/1	褐褐色土	砂質土。土質ブロック、繊維を多く含む
築山 2b	2.5Y5/4	黄褐色土	砂質土。土質にしまりがない。杭の打ち込み痕か?
築山 3a	10YR5/4	にぶい黄褐色土	砂土、粗~細かい砂粒。旧排水溝、解体時埋土
築山 3b	10YR4/4	褐色土	0.2 ~ 1cmの繊維が多く含む。旧排水溝、解体時埋土
築山 3c	7.5YR3/1	黒褐色土	砂粒の粗い砂を多く含む。旧排水溝、裏込土 or 造成土
築山 4b	10YR5/3	にぶい黄褐色土	砂質が強く、5mm程の繊維を非常に多く含む。旧排水溝、裏込土 or 造成土
築山 4c	10YR4/2	灰黃褐色土	砂質土。砂粒が粗い。旧排水溝、裏込土 or 造成土
IV	10YR5/6	黄褐色土	白色風化繊維を多く含む
I b	10YR2/1	黒褐色土	擾乱
築山 3c	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質が強く、砂粒が粗い
築山 3d		凝灰岩破片複層	排水溝裏込め複層か(もう一石積んでいた?)
築山 1j	10YR4/2	灰黃褐色土	5cmの繊維が多く含まれる。立石埋土、築山積土程の繊維が多く含まれる
築山 1l	10YR5/2	灰黃褐色土	砂土、砂粒は中程度で薄く堆積
築山 3e	10YR2/3	黒褐色土	砂質土。砂質が強く黒漆喰片が含まれる
築山 3f	10YR2/3	暗褐色土	0.5 ~ 2cm程の繊維が多く含まれ、しまりがない
築山 4e	2.5Y5/6	黄褐色土	白色軽石粒があり、しまりがない

部では、暗渠蓋が標高 10.8m、3段積側石の高さが標高 10.6m、底面は、標高 9.8m を測る。なお、暗渠排水溝に並列して検出した石列は幅 18 cm、長さ 50 cm と 52 cm である。標高は 11.55m と 11.57m を測る。石列表面は粗面である。全てに排水溝に蓋があること、江戸時代の地表面が 11m 前後でありながら、それより低いところを通ることから、地下を通る暗渠排水溝である可能性がある。

確認した排水溝は、トレント中央の高まりを避けるように微妙に弧状を描きながら南に続いている。

その西側中央に長方形の切り石を 2 石が列状に埋め込んでいることを確認した。この 2 石は検出状況からみて暗渠排水溝の補助石と思われる。

### (3) 庭園造構(築山) (第 58 ~ 60 図)

中央部には、厚さ 10 cm、高さ 1m、幅 1.8m の板石を確認した(立石 1)。この板石は一部欠損しており、下には劣化で剥がれた小片も出土した。石材は、北薩地方の安山岩である。石の下には、やや角をもつ約 50 cm の石を支え石として使用している。その石支え石の下部は硬化面があり、標高 11m を測る。この板石は、築山の莊嚴だけでなく、築山の土留石としての意味もあったと考えられる。

板石の西側には、高さ 74 cm、長さ 1.35m、幅 40 cm の三角形の立石を確認した(立石 2)。この石は、粘板岩

状堆積岩で、角が摩耗している。この石の麓にも丸石の支え石が 2 石ある。板石と同じく、築山の莊嚴と土留めの意味をもつものと考えられる。

板石の隣には摩耗した筒状で 60 cm × 20 cm × 80 cm × 50 cm の三角形の石を確認した。標高は 12.39m と 12.58m である。三角形の石は筋がみられ、石材は堆積岩と考えられる。

板石の周辺では、小型だが扁平で幅広な安山岩の切石を確認した。これらも、築山の莊嚴と土留めの意味を果たした石材であったと考えられる。こうした石材を築山の土留石に使う事例は玉里島津庭園にもあることから、ここでも築山に使用されたと考えられる。

近世の地表面は、3 層の標高約 11m ~ 11.2m で、板石の最上部が約 12.8m であることから、この築山は、1.8m 以上の高さがあったと考えられる。3 層上面には複数の箇所で莊嚴と土留めのための立石の抜き穴と考えられるビットを 4 か所で確認した。これらを立石抜き穴 1 ~ 4 とする。立石抜き跡 3 と立石抜き跡 4 は、立石 1 と立石 2 と約 1.5m 離れてほぼ平行に庭石が置かれていたと考えられる。明治 5 (1872) 年「島津御本丸庭園景」(第 147 図⑥) に写る滝状の落水はこの間にあったか。

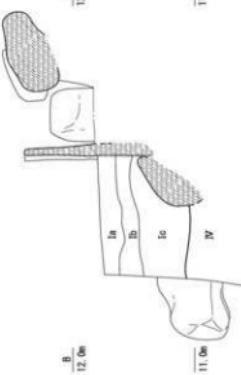
立石 2 石の麓に、縦 75 cm × 横 60 cm × 厚み 15 cm の溶結凝灰岩の石材を確認した。標高は 11.55m である。上

第60図 41 レンチ庭石(立石) 石組み見通し断面図

0 ( 1 : 40 ) 1m

11.0m

番	E' E	色(記号)	色名	特徴
I a	12.0m / 10.0m	10102/1	黒色土	表土
I b	10.0m / 3	10106/3	にぶい黄褐色土	現代盛土
I c	10.0m / 1	10103/1	黒褐色土	近現代土
IV	10.0m / 2	10104/2	灰黒褐色土	土質はしまり、砂質が無い、近世土



K  
12.0m

12.0m

11.0m



面には径 15 cm の穴があり、同じ溶結凝灰岩の栓が出土した。石材の中央部は抉られ、下部は下段と接続用に抉り部が狭くなっている。明治 5 (1872) 年「島津御本丸池畦景」(第 147 図⑤) では、築山の北奥に石製の角柱状建築物が写っている。この角柱状建築物は、各部材を漆喰で接合し、上端部からは水が零れているように映っている。これは、地中から水を引き上げる高井と思われる。今回出土したこの石材は、この高井最上段の一部と考えられる。この石材の周囲は、深さ約 20 cm の約 1 m 四方の落ち込みがあることから、高井がこの場所に立っていた可能性がある。この、高井がたっていた可能性のある落ち込みから排水溝までには、砂利が入る溝状の壅みが続いている。立石 2 の下からは、溶結凝灰岩製で約 30 cm 角の石管水道の破片が確認された。本来はこの溝状の壅みの上を石管水道が通っており、それが高井まで水を運んだ可能性がある。

昭和 53・54 年度の調査では、サギ之間、鶴鶴之間とその前面には 3 本の石管水道が確認されている。昭和 53・54 年度の発掘調査では、このトレーナー方向に向かって北から石管水道が延びてきており、その水が高井に供給された可能性がある。

**小結** ここでは、排水溝と明治 5 (1872) 年「島津御本丸池畦景」(第 147 図⑤) に写っている御庭である庭園造構（築山）を確認した。当初は、御楼門から御角櫓跡にかけて排水溝①が直線的に伸びており、それに東西南向の排水溝である排水溝②が接続していたが、御庭の築山造成のために壊された。築山は、範囲は不明だが、地表面から 1.8 m 以上の高さがあり、その周囲には莊嚴と土留めの意味をもつ立石が巡っていた。築山からは、溝状の落水があったが、その水は、昭和 53・54 年度の発掘調査で確認された石棺水道から供給された可能性があることが想定された。築山により排水溝①、排水溝②が廃棄されたため、排水溝③が新たに築山西側に築かれたと考えられる。排水溝②の埋土からは、18 世紀代の琉球陶器甕 (243) が出土していること、後述するように、文献から御庭の造成が天保年間 (1830 ~ 1843) 以降と考えられることから、御庭が造成されたのは幕末になつてからと考えられる。

#### 41 トレーナー西 (第 61 図～第 63 図)

**概要** 41 トレーナー東側では、築山が確認された。明治 5 (1872) 年「島津御本丸庭園景」(147 図⑥) には、築山前面に池が写っており、その池を確認するために調査を行った。

安全確保のため K-7 ~ 9 区に遊歩道に沿って 3.2 m × 9.5 m のトレーナーを設定して行った。

**遺構** 遺構は、庭園造構の池、排水溝を確認した。

##### (1) 庭園造構 (池) (第 61 図)

調査区中央から北側には、鉄分層が広く検出された。鉄分層の下には、水性堆積の影響を受けたと考えられる明茶褐色や灰褐色の層が堆積し、その下では一部で玉石を確認した。玉石が残存している部分は、固く締められた硬化面となっていた。さらにその下には、厚さ 5 cm 程度の明茶褐色の硬化層を確認した。この硬化面が池底と考えられる。

池底と考えられる硬化面では、鉄分が浸み込んだ赤茶色のベルト状の層があり、その層が乱れて産んでいる箇所があった。これは、築山部の石の抜き跡と考えられる。特にそれが多いところは、排水溝に近い K-8 区南西部と同区北東部である。

調査区南西部の南西部の石抜き跡は明治 5 (1872) 年「島津御本丸庭園景」(第 147 図⑥) の滝状の落水の手前右端にある丸石の抜き穴であると考えられる。その後ろには低い約 30 cm 築山がみられ、石は 1 m 位の丸石と思われる。その東南端には排水溝に沿って黒粘土(黒漆喰)を詰めて、池の漏れを防いでいる。その東側にはカギ型の抜き跡が確認されている。その東側には、80 cm × 40 cm × 30 cm の漆喰塊があり、間に鉄分の赤茶褐色層がみられた。これは、昭和 53・54 年度の調査では、この隣の石蓋から石管水道が弧を描きながら西へ検出している。これは、落水のある小池から、御池に注ぐ石管水道の取り入れ口で水口施設の一部と思われる。西側にはジグザグに抜き取り跡が確認された。ここは、明瞭な鉄分層ではなく、全体的に赤茶褐色の層であり、玉石は出土しなかった。東部から北部にかけては玉石検出層と暗茶褐色の層の層には赤茶褐色の鉄分層がベルト状に検出。石の抜き取り跡と思われる暗茶褐色の層が、南から北へ繋がって検出した。東部は約 50 cm の盛土になっている。

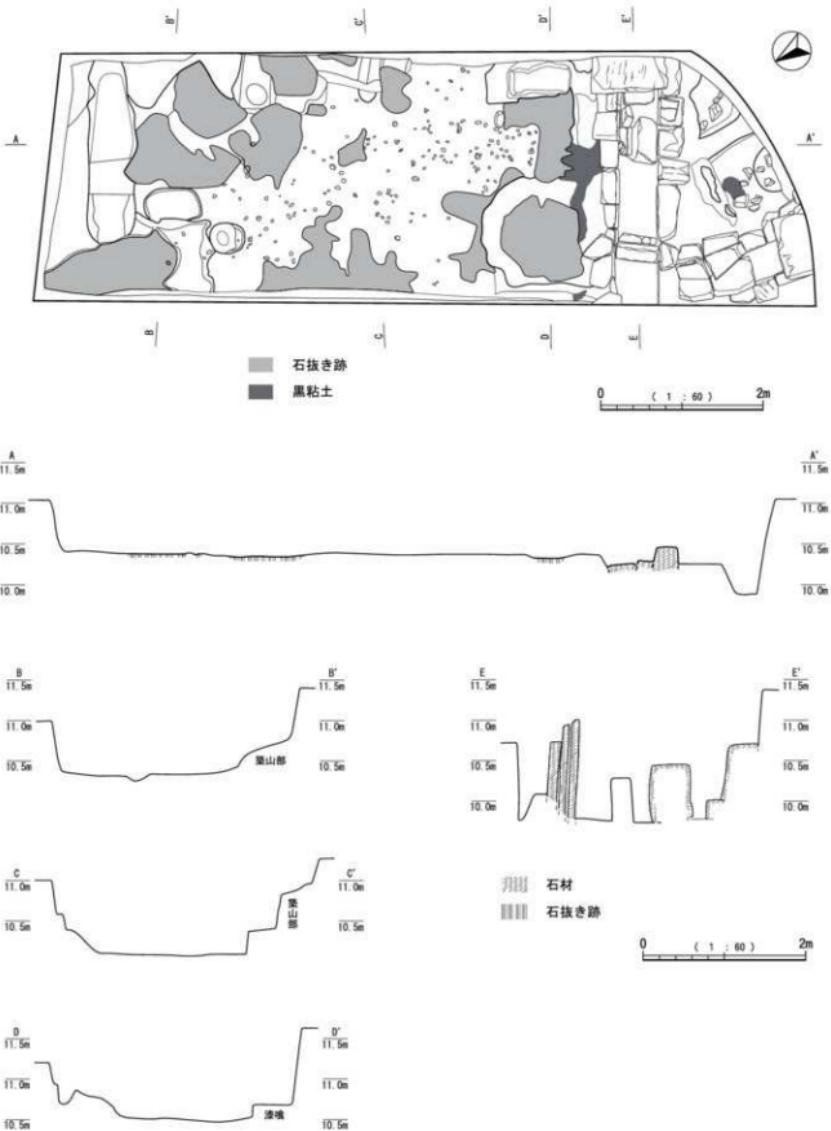
石の抜き跡が列状にあり、間は茶褐色の層がベルト状にみられる。石と石の間であると考えられる。これらは御池の北東の庭石の可能性がある。なおこの石列の東側は、鹿児島大学動物舎造成で削られていた。

##### (2) 排水溝 (第 61 図)

K-7 区には、分岐する排水溝を検出した。東西方向の排水溝の中を、西から東に向かって流れる水を弁石で堰き止め、その水を南方向に伸びる排水溝に流す構造になっている。弁石は、2 段で、下段は安定のため平石を横に敷き、上段は平石を立て、両脇を角石で挟んでいる。弁石の奥は、石の手前で砂が確認されることから、角石を組み 2 段で砂止めを行っていると考えられる。これらの石材は、全て溶結凝灰岩で作られている。

##### 出土遺物 (第 62 図・第 63 図 230 ~ 251)

230 ~ 243 は、陶磁器である。230 は、中国漳州窯系の青花輪花皿である。陶石の上に化粧土を掛け、その上に染付を行う。外面には一条線、内面には、草花文が描かれる。16 世紀末～17 世紀前半。231 は、中国漳州窯



第 61 図 41 トレンチ（池）平面図・見通し断面図

系の青花碗である。外面には一条線の下に草花文、内面には一条線が描かれる。16世紀後半。232は、薩摩磁器の筒型碗である。外面には虫文、内面には二条線が描かれる。1780年～1810年。233は、肥前有田の小碗である。高台まで総釉だが、口縁部と疊付は釉剥ぎされている。蓋物と考えられる。外面の赤い色彩は、塗っている物と考えられる。18世紀後半～19世紀初頭。234は、肥前系磁器ボットである。外面には蓮弁と唐草が描かれる。近代。235は、肥前系磁器蓋である。234と組み合うと考えられる。外面には草花文が描かれる。236は、磁器碗。高台内面には、瓢箪型に日陶製と書かれる。近世の統制食器である。237は、白薩摩と呼ばれる白色陶胎の壺か。底部付近は露胎で、底部には「〇〇〇」の墨書きがある。18世紀～19世紀。238は、白薩摩と呼ばれる白色陶胎の花入れか。外面には、突起が貼り付けられている。18世紀～19世紀。239は、加治木・始良系の陶器碗または鉢である。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされ、外面は総釉で、疊付は釉剥ぎされる。18世紀。240は、產地不明の陶器灰落としもしくは火入れか。底部から口縁部まで垂直に立ち上がる。高台は高い。241は、加治木・始良系の陶器灯明皿台である。皿部分の外面は露胎で、底部に糸切り痕が残る。台の部分には内面・外面にロクロ目が残る。18世紀。242は、苗代川系の陶器鉢である。植木鉢か。内面口縁部上面は露胎。外面に・内面に横方向の調整痕が明瞭に残る。243は、琉球陶器の大鉢である。花などの文様が線刻される。18世紀中心のもの。

244・245は土師器小皿である。高さはなく、円盤状の製品である。

246～253は、瓦である。246は、陶器瓦のその他の軒丸瓦（C-012）である。三巴文の周囲には変形瓦草文が巡り、それが連珠で区画されている。堂平窓跡で同様の範のものが出土している。被熱しており、釉薬はただれている。247は、大坂式軒桟瓦（A-055）である。鎌桟瓦である。瓦当上端は面取りする。瓦当は顎貼付けである。瓦左周縁に四角に森元の刻印（刻印020）の一つがある。248は、大坂式軒平瓦（A-043）である。瓦当の幅は狭いが、高さがある。凹面周縁は面取りされる。249は、その他の軒平瓦（D-023）である。瓦当裏側下端が面取りされ、凹面周縁も面取りされる。灰白色の胎土で、長崎とも似るが、熊本県若北町富岡城跡の出土軒平瓦と同范と考えられ、その周辺で製作されたと考えられる。250は、その他の軒桟瓦（D-039）である。瓦当は顎貼付けで、文様区はない。瓦当中央に○に中の刻印（刻印037-1）がある。雲母子が全体で目立つ。近代の瓦である。251は、桟瓦である。凹面・凸面周縁は面取りされる。凸面には滑り止めのためのカキメがある。近代。252は、朝鮮系瓦の丸瓦である。凸面にはタタキのよる幾何学文様がある。凹面には布袋痕が残る。253

は、鬼板瓦である。左右に雲文、中央に花文をもつ雲形の跨鬼で、文様上部には、○に吉（刻印040-2）の刻印がある。背面には、屋根に葺くための銅線がついたままになっている。

**小結** 東西方向の排水溝は、東トレチで、築山造営のために廃棄された排水溝②まで伸びている。本来は同一のものであったと考えられる。そのため、本来は東西方向の排水溝があり、水は石垣側に流れていたが、御庭の造成のため、その排水溝が途中で堰き止められ、その地点から新たに南方向に伸びる排水溝がつくられ、排水は南の御角櫓方向に流れるように変えられたと考えられる。

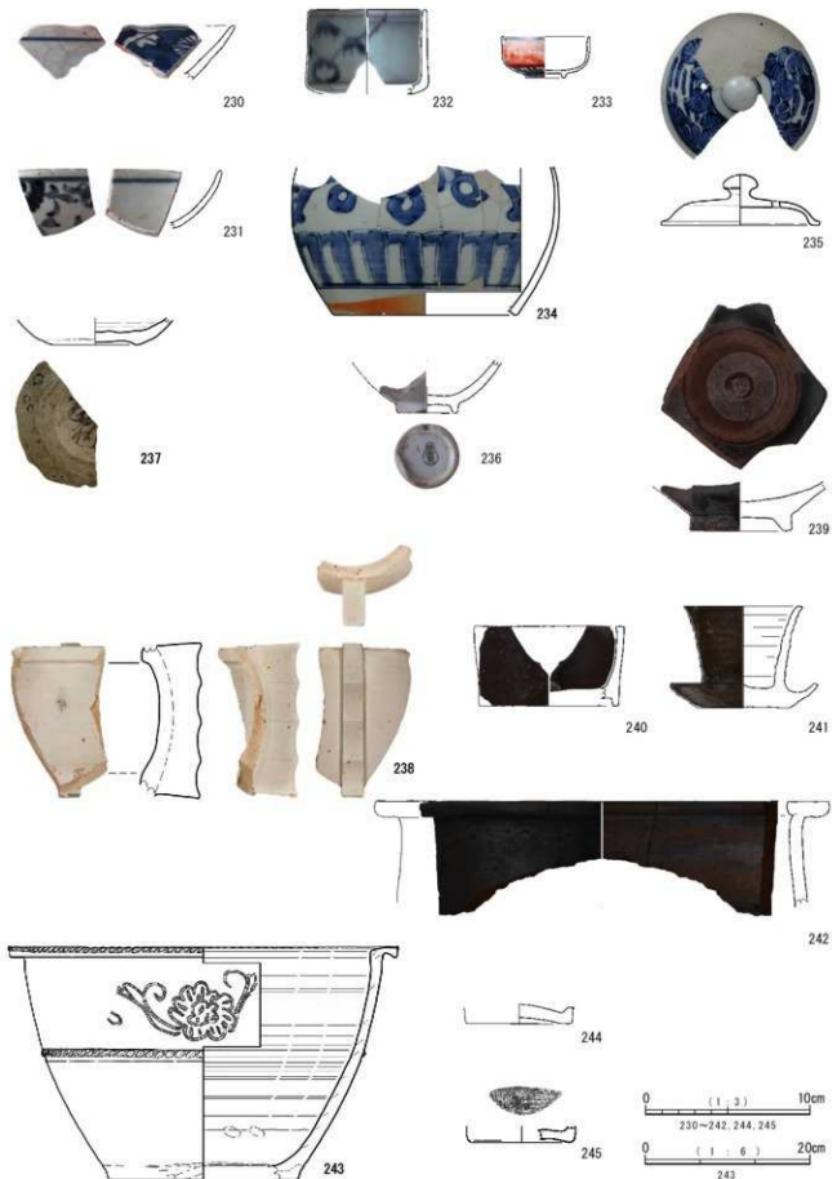
41トレチで確認された庭園遺構（築山・池）である御池については、明治26（1893）年英国人建築家ジョサイヤ・コンドルが写真を見て解説を加え、「付随する図をみたところこの庭は、他の庭園よりも違った特徴があり、鹿児島、薩摩の大名島津氏の庭の一つで東京の庭よりも手入れが難しい。大きな木がほとんど無く、大事な部分は、人工的に切られた茂みが精鍛され、芸術的であるが、どこか厳格な構成品質を与えていている。（中略）、ゾーティの群れが明白な熱帯（南国）の見た目をこの庭に与えることを助長している。」と一種独特で琉球の風貌を持った庭園と評価している。

また、昭和3（1928）年九州帝国大学農学部造園学研究室助教授水見健一による「薩藩庭園調査覚書」では、ブルーで塗されているが山下御殿の庭として調査されている。「一、山下御殿の庭 鐵太郎造修又は新造天保以後、齊興公の時 今庭城」の記載がある。また、「この庭は齊興公の時 天保以後 鋼の善八の造修又は新造と考」とある。庭師名に違いがあるが、この御庭と玉里島津侯爵別邸の上御庭は同時期に造営されており、その時期は、天保年間（1830～1843）以降であると想定されている。この御庭の造成は、東西排水溝を堰き止めて南北排水溝に水の流れを変えさせ、御門から伸び直線的な排水溝①を築山に沿って曲がる排水溝③に付け替えさせるなど、石垣周囲を巡る排水溝の導線にも影響を与えたと考えられる。また、「薩藩庭園調査覚書」によると、この御庭は第七高等学校造士館のブルー建設のためなくなつたようである。

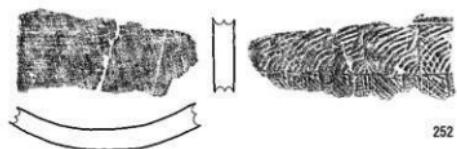
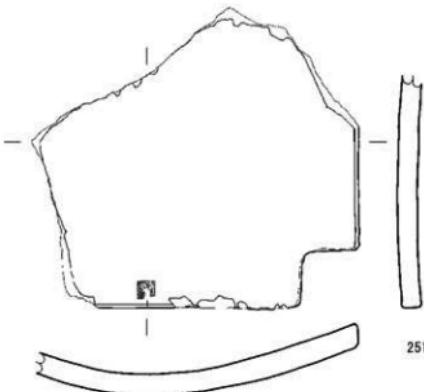
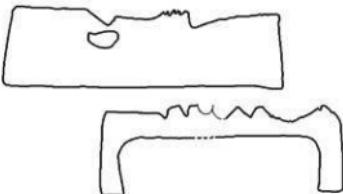
遺物としては、ここでも長崎瓦（249）と琉球陶器を確認した。

## 小結

御門跡南側石垣周辺の調査区では、石垣天端には地覆石がのり、石垣背面には約2mの裏込めがみられる、そのさらに後ろには排水溝が併行するといった石垣の背面構造、庭園遺構の確認（築山・池）、庭園遺構の造営に伴う排水溝の付け替えが確認された。遺物では、長崎瓦が多くトレンチで確認されている。御門跡周辺に比べると軒桟瓦が多く出土している。

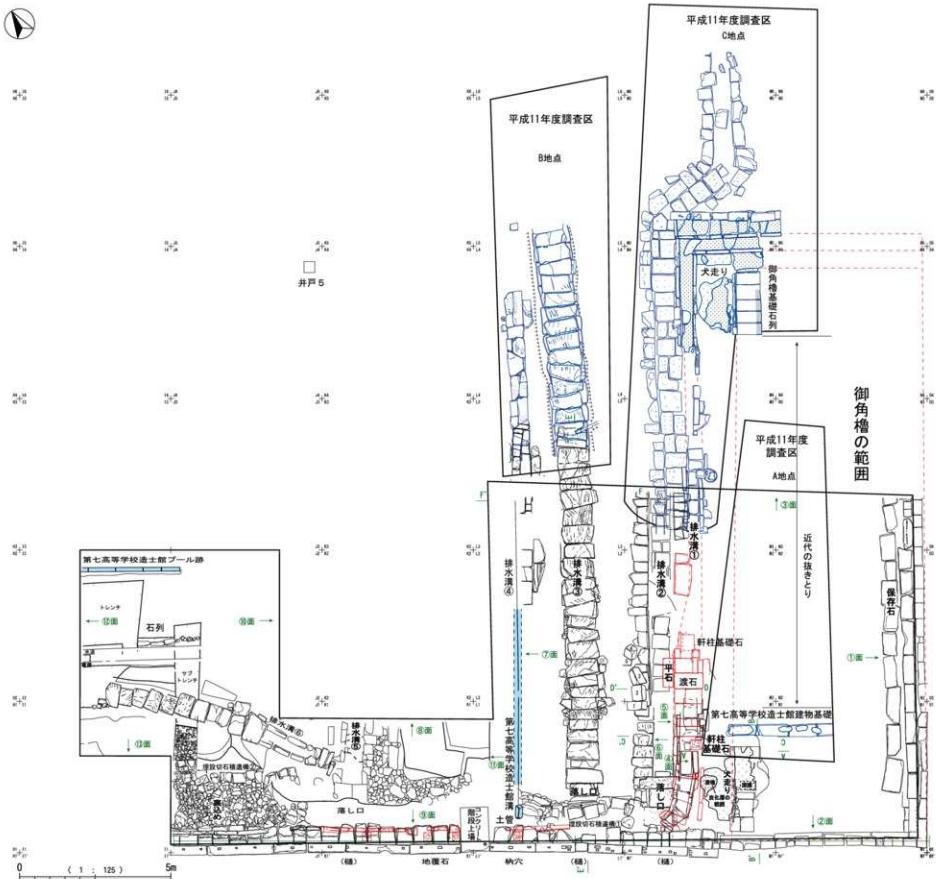


第 62 図 41 トレンチ 出土遺物 1

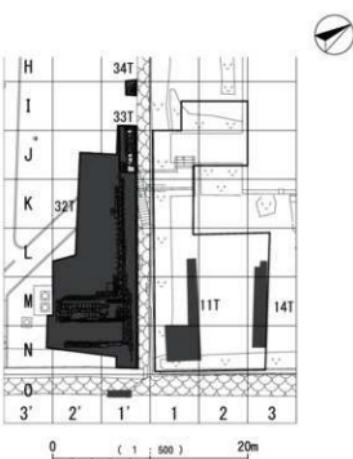


0 (1:4) 10cm  
246~253

第63図 41トレンチ 出土遺物2



第64図 御角櫓跡平面図（青：平成4・5年調査分、赤：排水溝蓋）



第 65 図 御角櫓跡調査区トレーンチ配置図

#### 6 御角櫓跡周辺（第 65 図～第 94 図）

**御角櫓** 御角櫓は、本丸南東にあった櫓である。元禄 9（1696）年「鹿児島城絵図控」（第 144 図②）では、「此櫓焼失長十二間」と書かれており、長さが 12 間あったこと、元禄の大火で焼失したことがわかる。現在の本丸跡南側石垣の石垣天端から御角櫓跡の幅は、約 21.6m であり、このときの幅とほぼ変わっていない。また、享保 20（1735）年には、「島津継豊の鹿児島の居宅内にある櫓に虫が付いて危ないため、木材の取替と修補を願い出る」（『鹿児島県史料 旧記録（追録）』4-784）とあり、少なくとも 2 回は建て替えられており、今回の発掘調査で確認された御角櫓跡の遺構は、享保 20（1735）年以降に建てられたものである。宝暦 5（1755）年「監察使問答集」（『鹿児島県史料集 通昭録』1）には、「南側に櫓が 1ヶ所あり、長さ 27 間、横 3 間半、窓 6ヶ所。」と記載されている。これだと長さが合わないがもっと広い範囲を御角櫓と認識していた可能性がある。明治 5（1872）年の古写真「島津御本丸前面景」（第 147 図①）では、石垣と一緒にになった多層式の櫓であり、本瓦葺きで外壁は海鼠瓦で庇われている。

**過去の調査** 御角櫓跡周辺の石垣は、昭和 35 年の台風によって崩落し、平成 11 年度にはその石垣修復工事を実施している。工事区の範囲は、M・N-1'～9 区で、石垣解体面積・復元面積は 340 m<sup>2</sup> である。石垣解体に伴つて本丸跡の造成土も、地表面では石垣天端から約 5～6

m ので、そこから下に向かって狭まっていく台形状に掘削された。そのため、造成土の掘削に伴い、御角櫓跡周辺の発掘調査が行われた。調査は、鹿児島県教育委員会が実施し、黎明館によって報告された（鹿児島県歴史資料センター黎明館 2001）。

調査の結果、御角櫓跡基礎石列 1 列と排水溝 3 列、石列 1 列が確認された。御角櫓基礎石列上面とその外側には漆喰が塗られた大走りがあり、その周囲を排水溝①が巡っていた。基礎石列から排水溝②までは漆喰が塗られており、御角櫓は漆喰床であったことが確認された。その外側には、排水溝③が巡っていた。工事では、石垣解体時の石垣天端の納穴、石垣面の実測と傾斜、築石の中折れ、積石間の飼石、裏込めの断面、胴木が確認され、工事報告書に記載されている（鹿児島土木事務所・（株）建設技術コンサルタント 2000）。

**概要** 発掘調査は、御角櫓跡周辺石垣の背面構造の確認、御角櫓跡の遺構残存状況確認を目的として行った。当初は、11 トレーンチ、14 トレーンチの 2 本のトレーンチを設定した。11 トレーンチは、M・N-1 区で、石列や排水溝が検出された。14 トレーンチでは、平成 11 年の石垣工事範囲の掘削範囲が検出確認された。その後、御角櫓跡全体の遺構残存状況、石垣背面構造、平成 11 年度に積み直された石垣の修復状況を確認するため、1～N-1～3 区まで調査区を拡張した。

**平成 11 年度に修復された石垣の確認（第 66 図・67 図・68 図）** 調査区の東側石垣（第 64 図・第 66 図）、南側石垣の一部（第 67 図上段）は、平成 11 年度の石垣修復工事で修復されたものである。修復前と同じく、石垣天端石の上には御角櫓の礎石の役割を果たす地覆石が、その上には、近代以降の石碑が 2 段載っている。石垣内側には、大型の石材による裏込めがあり、その上に石垣築石の保存石が列状に並べてあった。調査北壁（第 68 図）では、石垣から約 5.6m の範囲で地表面の掘削が行われたことが確認された。

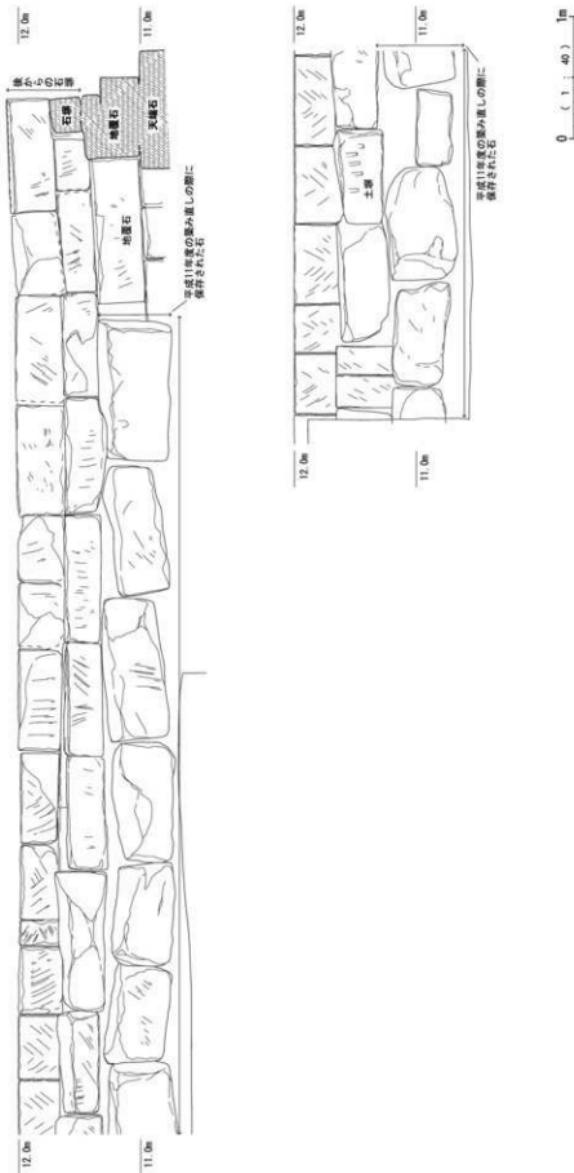
**遺構** 遺構は、近世の御角櫓基礎石列、排水溝 6 列、埋設切石積石積 2 か所、近代の第七高等学校造士館ブルーム跡を確認した。

##### （1）近世

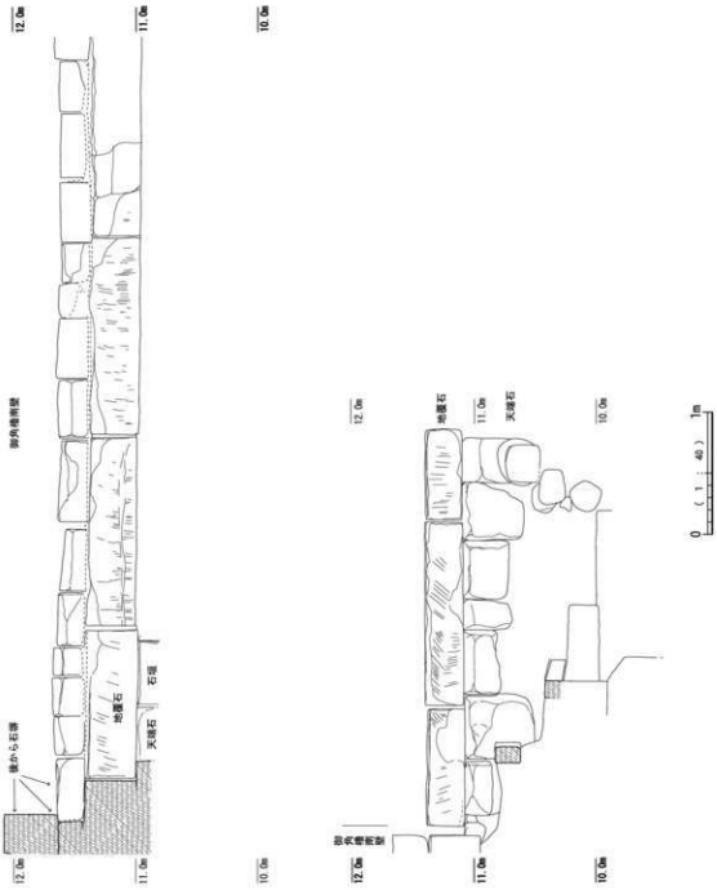
###### ① 御角櫓跡（第 66 図～72 図）

M-1 区に御角櫓の基礎と考えられる基礎石列が、本丸跡南側石垣に対し直角に検出された。平成 11 年度で確認された基礎石列と今回確認された基礎石列から、御角櫓の建物は、南北が約 18.6m、東西が 5.6m の規模であったと考えられる。

御角櫓は、御兵具所跡と同じく、石垣と一緒にした櫓で、基礎石列の周囲には漆喰床である大走りがあり、

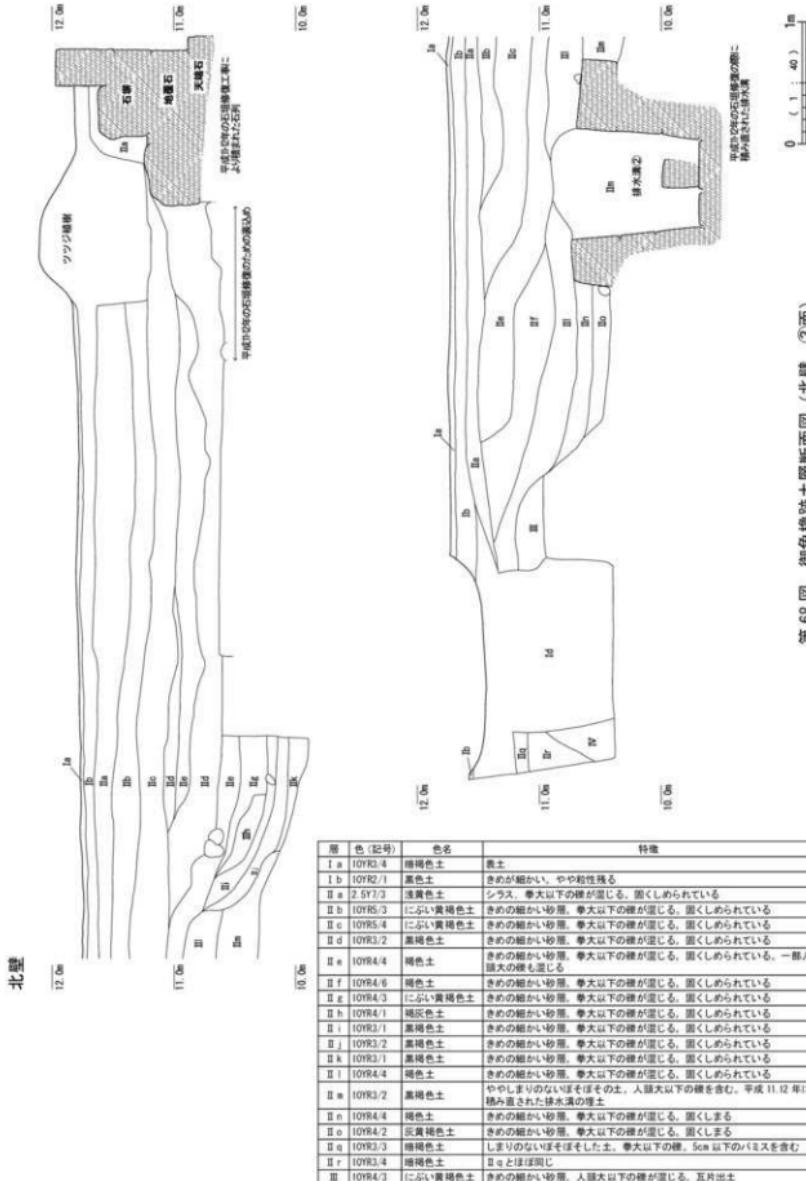


第66図 御角櫓跡東側石垣見通し断面図 (①面)



第67図 御角礎石垣見通し図(南壁、②面)

第 68 図 御角橹跡土層断面図（北壁、③面）



北壁

その周囲には排水溝が巡らされていることが確認された。この大走り及び雨落溝である排水溝①を含めると、御角櫓の規模は、南北約 21.6m、東西約 7.2m である。

#### ①-1 御角櫓基礎石列（第 64 図・第 69 図・第 71 図）

M-1 区では、標高 11m 付近で石列を確認した。石列は、8 石が確認でき、長さは約 3m である。石列から排水溝①に掛けでは、漆喰が付着していた。これは、平成 11 年度で確認された御角櫓跡と同じで、漆喰床が張られていたためと考えられる。

御角櫓基礎石列の下部構造は、 $40 \times 30 \times 100\text{ cm}$  や  $60 \times 25 \times 100\text{ cm}$  の長方形の切石を 2 または 3 段段積み重ね、その下に栗石を敷いている。切石の接着面は漆喰で固定している。これら切石の石材は溶結凝灰岩である。

基礎石は、固く締まった造成土の上に載せられ、外側の排水溝①との間の犬走りの下部は、版築で固め、基礎石が外側に崩れないように工夫されていた。犬走りの幅は、約 40cm である。

修復はされているが、この基礎石と御角櫓と一緒にとなっていた本丸東側・南側の石垣天端の高さは、ほぼ同じである。石垣の天端の上には、枘穴を持つ地覆石があり、地覆石には基礎石と同じ漆喰がみられる。そのため、本来は、基礎石の上に礎石や地覆石を漆喰で固定していかた可能性もある。

城郭石垣の構造でみられる地下構造は、この御角櫓では確認できなかった。御角櫓基礎石列は、中央部が抜き取られていたため確認できなかった。ただし、基礎石が 2 段で造られていることから、御角櫓中央部に地下構造があった可能性は否定できない。

#### ①-2 排水溝①（第 64 図・第 70 図～第 72 図）

基礎石の 1.4m 外側には、幅 60 ~ 70 cm、深さ 20 ~ 50 cm の深い排水溝が確認された。排水溝は、南側石垣方向に曲がりながら下っている。排水の落し口は旧排水溝（排水溝②）の上を利用している。この排水溝①は、平成 11 年度発掘調査で確認された御角櫓基礎石列の排水溝の延長である。御角櫓の雨落ち溝であると考えられる。平成 11 年度では蓋はなかったが、今回は蓋が確認された。石材は全て溶結凝灰岩である。

この排水溝①の礎石には、N-1・2 区に  $40\text{ cm} \times 30\text{ cm}$  角の軒柱基礎が 2 基確認された。石材は溶結凝灰岩である。軒柱基礎の間は 3m である。この部分が御角櫓の入り口と考えられ、この軒柱基礎は、御角櫓の入口屋根の出し部の柱を支える軒庇の礎石と考えられる。排水溝①の蓋のうち、この軒柱基礎の縁面の 6 枚は、他と違い石壁調整が細かい切石が用いられている。これは、排水溝①を渡るための「渡石」と思われる。

その西側には、同じような平石を横に置いた平石が石

疊状で検出した。この平石は、排水溝②の埋土の上で確認された（第 72 図）。そのため、排水溝②は、排水溝②を壊して埋めた後に造られたと考えられる。

排水溝①の渡石の係っている部分と併行する石垣②の石垣東側には、奥行きが広い石が用いられている。排水溝②が機能している段階では、ここに橋が架かっていた可能性がある。排水溝①を造る前には、排水溝②が雨落ちも溝をかねた開渠排水溝として使用されており、端を渡って入り口に入ったと考えられる。

#### ①-3 石垣地覆石

修復工事以前の石垣の工事測量図には、地覆石上面に枘穴がみられた。御角櫓その間隔は、40 cm 前後である。御角櫓は、地覆石を基礎として利用していたため、枘穴の間隔は、御角櫓の桁行であると考えられる。

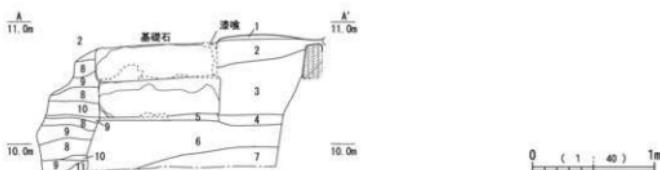
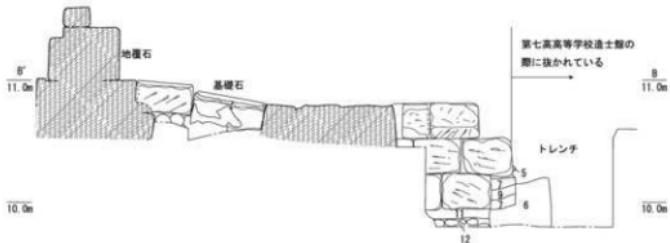
#### ② 排水溝②（第 64 図・第 68 図・第 70 図～第 72 図）

排水溝③は、L-1 ~ 3 区で確認した。平成 11 年度に確認された御角櫓西側の排水溝の続きである。この排水溝は、41 トレンチ（東）の排水溝①からの続きでもあり、御庭造営以前に、御楼門跡から御角櫓跡で直線的に伸びていた排水溝の一部である。当初は、御角櫓の雨落ち溝としても機能していたと考えられる。

排水溝②は M-5 で、御角櫓を避けるように曲がっており、その後直進し、M-1' で本丸跡南側石垣の石垣天端より 4 段下に落し口を設けている。この排水溝②は、御庭造営に伴って廃棄されたが、落し口付近は機能していたようで、その後に造られた排水溝①はこの落し口を利用していている。

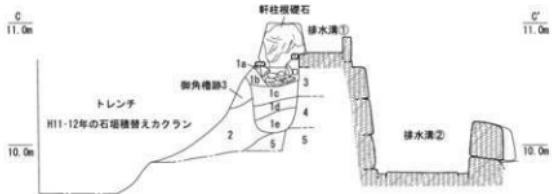
排水溝②の側石は、他の地区では 1 段だがこの地区では、落し口に向かって傾斜をつけているため深くなっている。側石上端からの深さは M-4 区で 90 cm、M-1 区で 150 cm である。排水溝②を構築する側石は、東壁では、3 ~ 5 段の布積石垣である（第 71 図中段）。築石は丁寧な盤調整がみられる切り込み剥の石材である。底石は M-1 区で外されており、落し口は蓋石と側石と底石の一部を残し破壊されていた。中央より南側の側石は、積み直されており、その石垣間に漆喰での間詰跡がみられる。この部分より上には、排水溝①が載っておりここも漆喰詰が行われている。この部分は、排水溝①を載せるために積み直されたと考えられる。西壁では、側石の石垣が、本丸跡側石垣の石垣天端と平坦になるように揃えられており、地表面に近いと思われる。

底石は、M-1・2 区にかけての約半分を外され、その下を掘削されていた。底石が外された部分は、西壁でも石垣が抜かれており、繩や瓦片を敷きこんでいた。排水溝②から排水溝①に付け替える際の造成に伴うものと考えられる。



層	色(記号)	色名	特徴
御角櫓跡 1	10YR6/2	灰黃褐色土	漆喰面。犬走り面を形成
御角櫓跡 2	7.5YR4/2	灰褐色土	土質は固くしまり若干粘性がある
御角櫓跡 3	7.5YR4/2	灰褐色土	灰白色(7.SYR8/1)の漆喰?石灰?を混ぜた土壤改良土で極めて固くしまる。御角櫓基礎石の外側排水溝、大走り等外構工事の施工に用いたと思われる(一括埋土ではなく施工しながら段階的に埋めた)
御角櫓跡 4	10YR3/1	黒褐色土	1~2cm程の礫が多く入り土質はしまらず柔らかい
御角櫓跡 5	10YR8/1	灰白色土	漆喰層。粉状の漆喰(石灰?)に0.2~1cmの礫が多く入り黑色土混じり。固い面を作るのに用いた
御角櫓跡 6	10YR4/1	褐灰色土	砂質が強く砂粒は粗い。経石混じりで土質は固くしまる
御角櫻跡 7	5YR3/2	暗赤褐色土	砂質土。砂粒は粗くしまりはない。(J-1-2区西壁土層V b層と同じ)
御角櫻跡 8			5層と同じだが礫が多く入る。基礎石積みの各石上端に合わせるように敷設
御角櫻跡 9	7.5YR3/1	黒褐色土	1cm程の礫と若干の漆喰が含まれる粘性土
御角櫻跡 10	2.5Y4/1	黄灰色土	0.5~3cm程の漆喰が含まれる
御角櫻跡 11	10YR8/1	灰白色土	漆喰層。漆喰(石灰?)と5mm程の礫が多く含まれる白色層
御角櫻跡 12			軽石層。10cm程の軽石を敷設。黒褐色土混じり

第 69 図 御角櫻跡基礎南北・東西トレンチ土層断面図 (A-A', B-B')



層	色(記号)	色名	特徴
排水溝① 1a	10YR3/1	黒褐色土	凝灰岩碎礫層
排水溝① 1b	7.5YR4/2	灰褐色土	黒褐色土 (10YR3/1) 混在土
排水溝① 1c	7.5YR5/6	明褐色土	3cm程の扁平な白色漆喰片が多量に含まれる
排水溝① 1d	10YR3/1	黒褐色土	漆喰片は少なく、凝灰岩片が若干含まれる
排水溝① 1e	10YR3/1	黒褐色土	1cm~拳大の白色漆喰片が多量に含まれる
排水溝① 2	10YR4/3	にじむ黄褐色土	0.2~1cmの灰白色や黄褐色の凡化鉱を多量に含む
排水溝① 3	10R3/1	暗赤褐色土	砂質土。砂粒は粗く、凝灰岩を若干含む
排水溝① 4	10YR3/1	黒褐色土	2mmの円粒が多く含まれる
排水溝① 5	10YR3/1	黒褐色土	砂質が強く2mm~の灰白色、黄褐色の凡化鉱を含む。(東西土層1d層に近いが固くしまらない)
御角樁跡3	7.5YR4/2	灰褐色土	灰白色 (7.5YR8/1) の漆喰?石灰?を混ぜた土壤改良土で極めて固くしまる。御角樁基礎石の外側排水溝。犬走り等外堀工事の施工に用いたと思われる(一括埋土ではなく施工しながら段階的に埋めた)

第 70 図 御角樁跡排水溝①排水溝②土層断面図 (C-C')

### ③ 排水溝③(第 64 字・第 73 図・第 74 図)

排水溝③は、L-1' ~ 3 区で確認した。落し口は、L-3' の石垣に石垣天端より 7 段下に設けている。この排水溝は、37 トレンチで「く」の字形状に折られ、41 トレンチの築西側で確認された排水溝③の続きである。

この排水溝の標高は、L-2 区で側石天端が 9.24m、石蓋が 9.43m を測り、L-1 区で側石天端が 9.25m、石蓋が 9.61m を測る。全体的に平坦であるが、暗渠底石の落し口は 9.07m を測り、やや深くなる。排水溝②と同じく側石が石垣積である可能性が高く、裏込め石もみられる。落し口は L-1' の地覆石より 7 段下に開口している。これらの石材は、全て溶結凝灰岩である。近世の地表面は、標高約 11m であり、これより低いことから、この地区では完全に土中に埋められた暗渠排水溝である。排水を外庭系に流すために、角度をつけていると考えられる。

この排水溝の埋土は、城内内部から石垣側に順層に埋められていた。その造成土中では、瓦片を埋め込んでお

り、17 世紀代の長崎瓦も出土している。これは、排水溝③が、排水溝②を付け替えていることの証明になる。

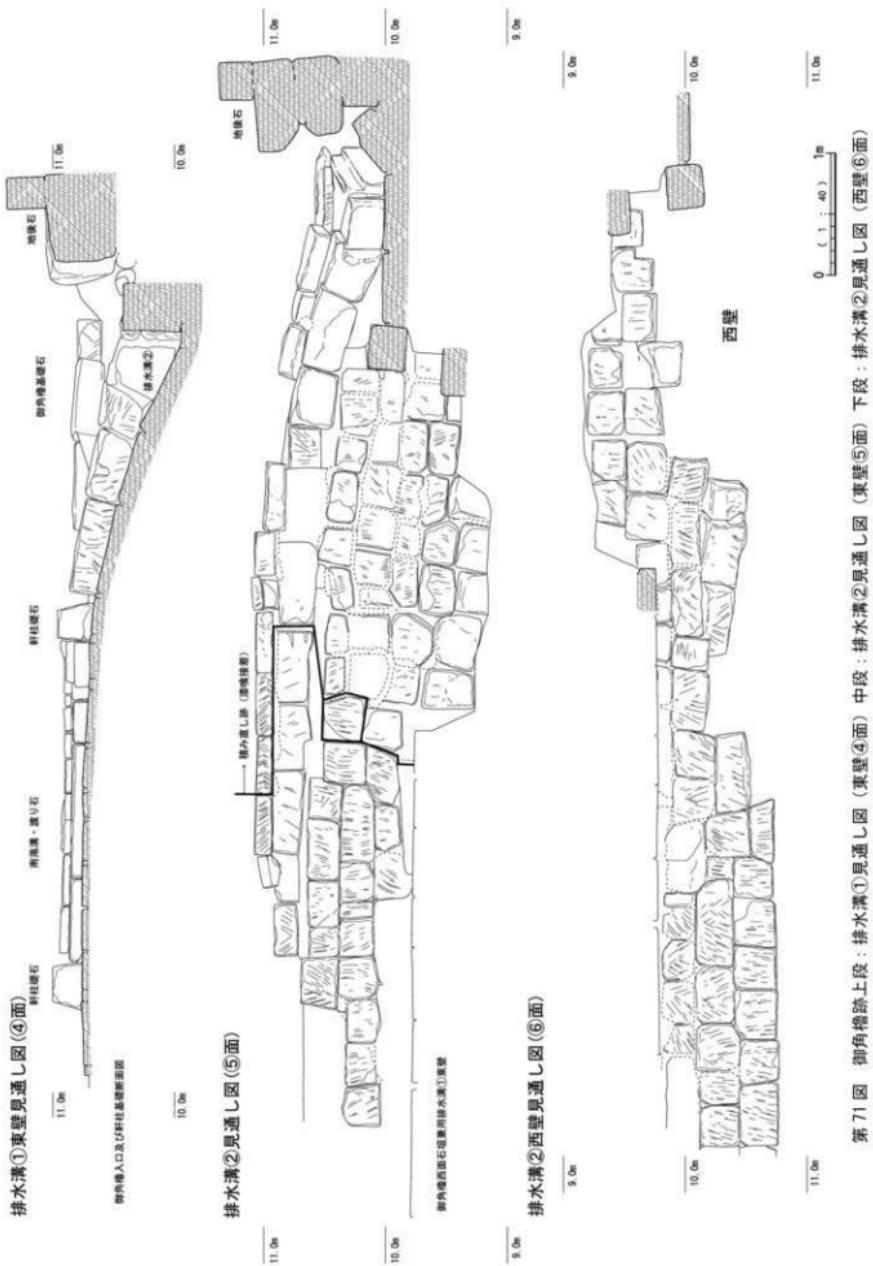
### ④ 排水溝④(第 64 図・第 74 図・第 75 図・第 76 図)

排水溝④は、L-2' ~ 3 区で確認した。平成 11 年度に確認された調査区東端付近の排水溝の続きである。

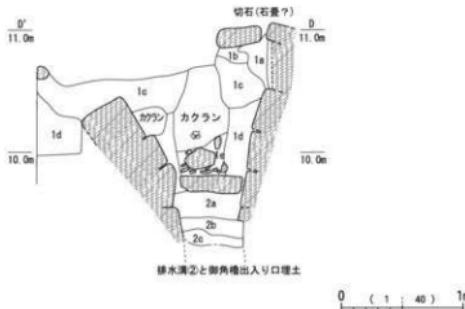
今回は、東側半分のみを確認した。標高は、L-3 区で側石が標高 9.79m、底石が標高 9.68m、L-2 区で側石の標高 9.66m、底石で標高 9.57m であった。近世の地表面(標高約 11m)より低いことから、蓋は失われているが、地下に埋設された暗渠排水溝であったと考えられる。

L-2 区の土層断面では、排水溝②の埋土は、排水溝③と排水溝④の埋土の受けら埋められていることから、排水溝②が造られる以前に、造られていたことがわかる。

排水溝④の大半は、第七高等学校造土館時の土管設置で排水溝が壊されていた(第 75 図)。L-1 区の石垣の



御角檻跡上段：排水溝①見通し図（東壁④面）中段：排水溝②見通し図（東壁⑤面）下段：排水溝②見通し図（西壁⑥面）



層	色(記号)	色名	特徴
排水溝② 1a	10YR5/4	にぶい黄褐色土	きめの細かい砂層。黒褐色の3~5cmのブロックを含む
排水溝② 1b	10YR3/4	浅黄褐色土	きめの細かい砂層。しまりが強い。ブロック状に入る。3cm程度の塊状ブロックを含む
排水溝② 1c	10YR4/6	褐色土	きめの細かい砂層。しまりが若干弱い。拳大以下の礫が混じる。瓦片を若干含む
排水溝② 1d	10YR5/6	黄褐色土	きめの細かい砂層。しまりがなくぼそぼそ。拳大以下の礫を含む。遺物はほとんど含まない
排水溝② 1e	10YR4/4	褐色土	きめは細かい。しまりがない。粘性あり。人頭大以下の礫を含む。瓦を下部に大量に含む
排水溝② 2a	7.5YR4/4	褐色土	きめは細かい。しまりが強く5cm以下の粘性ブロックを含む
排水溝② 2b	10YR4/6	褐色土	きめの細かい土。しまりが強い。拳大以下の礫を含む。粘性やや強い
排水溝② 2c	10YR5/8	黄褐色土	きめの細かい土。しまりが強い。混入物はほとんど無く均一。粘性やや強い

第 72 図 御角櫓跡排水溝②土層断面図 (東西, D-D')

下には土管が残っており、L-1'の石垣面には地覆石より7石下の石垣を抜いて設置している。J-L-1区北側断面では、L-1区内にその土管の一部が断面に検出され、K-1区に排水溝⑤が検出されている（第76図）。その上の埋土は溶結凝灰岩の割れたものと大きな土塊で埋められており、重機を使用した擾乱層と考えられる。

##### ⑤ 排水溝⑤（第64図・第76図）

排水溝⑤は、昭和53・54年度の調査時のJ-4区で確認された井戸⑤のための排水溝と考えられる。

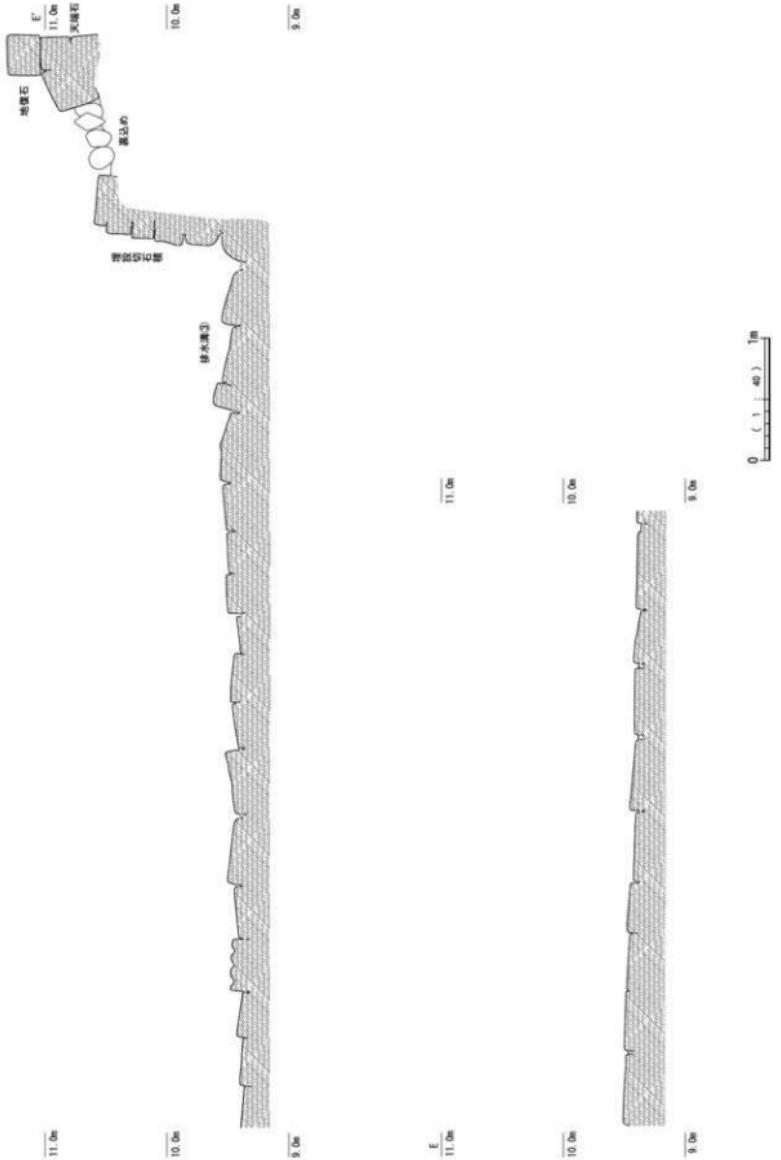
排水溝⑤は、K-1区で確認した。石蓋は幅1m20cm、厚み13cmのもので丁寧に整調整されている。排水溝の幅は80cmで、側石の高さは約20cmである。側石は2段に積み上げられ、北側は3段になっている。標高は、側

石が9.57m、石蓋が9.70mを測る。近世の地表面（標高約11m）より低いことから、地下に埋設された暗渠排水溝であったと考えられる。石材は、溶結凝灰岩である。

落し口付近では、排水溝⑥と合流している。その合流では擾乱がみられ、石垣裏込めが抉り取られて拡散していた。これは、ある時期に部分的に改築したからと考えられる。落し口付近では、床にはモルタルが張られていた。また、モルタル西側には側石がある。もともと狭かつた排水溝がモルタルの幅で広げられたと考えられる。モルタルが塗られていたことから、第七高等学校造士館の時代以降にも使用されていたと考えられる。

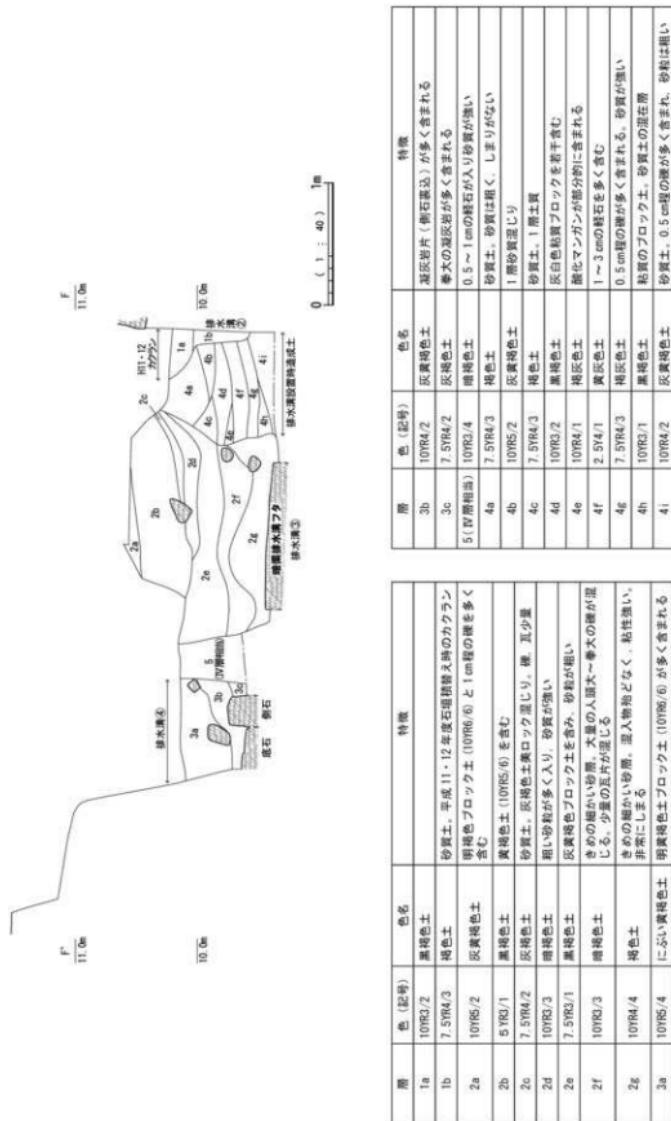
##### ⑥ 排水溝⑥（第64図・第77図上段）

明治6（1873年）年の「鹿児島城本丸殿舎配置図」（第4図）



第73図 御角橋跡 排水溝③見通し図 (E-E')

第74図 御角檜跡排水溝②③④土層断面図（東西：F-F'）



には、御角櫓跡の西側に御池がある。排水溝⑥は、その御池に関連する可能性がある。

排水溝⑥は、I-2 区から K-1 区にかけて確認した。I-2 区では、上面に庭石や敷石等が被さり、そして、西側は壊されている。K-1 区では排水溝⑤に接合している。石蓋は幅 70 ~ 55 cm で厚みは約 15 cm である。J-1 区にサブトレーンチを入れて確認したところ、深さは約 60 cm を測る。この蓋石の標高は 10.20 m である。これから排水溝⑤の標高 9.52 m に下り接合する。近世の地表面（標高約 11m）より低いことから、地下に埋設された暗渠排水溝であったと考えられる。石材は、溶結凝灰岩である。

排水溝⑤⑥の接合部は蓋石や側面の切石の乱れがみられた。石垣の落し口には、止め石をはめ込んでいる。よって、排水溝⑤⑥は同時に廃棄されたと思われる。

#### ⑦ 埋設切石積造構①（第 64 図・第 77 図）

御角櫓跡西側の L-1・2 区の排水溝①・②落し口から排水溝④落し口の石垣裏側では、長さ 50 ~ 90 cm、厚さ 20 ~ 25 cm の切り石が 5 ~ 6 段積み上げられた石垣を確認した。標高は 9.40 m ~ 10.60 m である。石材は溶結凝灰岩である。切り石の築石の間には、栗石が充填されていた。その前面は、近世の造成土で埋められている。本丸南側石垣とこの石垣との間には、人頭大から拳大の川原石と溶結凝灰岩を割った裏込めが充填されていた。

この石垣の本丸跡側は、近世の造成土で埋められることから、石垣の背面を支える構造であった可能性が高い。周辺は落し口があるなど、城内の排水が集中する箇所であり、石垣に補強が必要であったと考えられる。排水溝⑤・⑥の落とし口西側の J-1・K-1 区でも、石垣面上に石垣を確認した。石垣上から 2 石まで裏込めがあり、その下に切石積が段造されていた。

#### ⑦ 埋設切石積造構②（第 64 図・第 77 図下段・第 78 図）

J-1 区のサブトレーンチでも、本丸跡南側石垣の内側で 2 段の石垣が確認された。標高 9.1 m の造成土の上に 10 cm 程砂礫層を敷き、その上に薄手の切石を 4 石約 60 cm 積んでいる。そこで段になり、さらにその約 60 cm 奥には、厚めの切り石で 3 石約 40 cm の石積がみられた。階段状の 2 段階の石垣の裏側には裏込めが充填されていた。厚めの切石は再利用もあり、その栗石の中には瓦片もみられる。上部は攪乱を受けているものの、切石の石積の根石は排水溝⑤⑥の合流地点までみられた。これらの埋設切石積造構と石垣の間には、人頭大の大栗や拳大の小栗の溶結凝灰岩の割石や川原石などを詰めている。なお、この埋設切石積造構の下層に溶結凝灰岩の層石を敷いて水はけを良くし、造成土を積み上げている。この石垣も近世の造成土で埋められ、地中にあったことにな

る。

埋設切石積②は、裏込めの栗石を 2 段の石垣で安定させ、石垣を支える構造である。また、切石の下面には溶結凝灰岩の碎石を敷き、その上に造成土を埋め込んでいる。排水溝⑥はこの造成土を掘り込んで敷設されている。これは、周辺の自然基盤層が低かったため、造成土でのかさ上げが必要であった可能性がある。

#### ⑧ 堀の基礎（第 64 図・第 67 下段）

御角櫓跡基礎石列より西側の南側石垣は、平成 11 年度の石垣修復工事で修復範囲に入らなかった石垣である。南側石垣には、近代の石垣が載っておらず、近世の地覆石が最上段に載っている。地覆石の上面には、枘穴が開いている。これらは、堀の基礎であったと考えられる。枘穴の幅は、ばらつきがあるが、平均すると約 20 cm で、御角櫓の幅の約半分である。この部分でも、石垣の上には堀が建っていたと考えられる。

#### （2）近代

##### ① 第七高等学校造士館建物基礎（第 64 図・第 69 図）

昭和 10 (1935) 年「造士館沿革概要」では、御角櫓跡の地点に建物が写っている。また、昭和 11 (1936) 年「行幸記念誌」附図の「校内御巡覧圖」には、約 13 m × 5 m の建物がみられる。

御角櫓基礎石列は、8 石目よりも北側は抜き取られていた。平成 11 年度の調査成果と照合した結果、御角櫓基礎石の欠損部は 13 m に及ぶことが判明した。これは、「校内御巡覧圖」の建物規模と合致する。

加えて、平成 11 年度調査の石列はこの建物の梁間の基礎石に該当すると思われる。御角櫓基礎石列の基礎石はその建物建設時に抜かれたものと考えられる。この建物の西側にはブルーが写っており、ブルーに隣接する建物の可能性が高い。

##### ② 第七高等学校造士館プール排水溝（第 75 図・第 78 図・第 64 図）

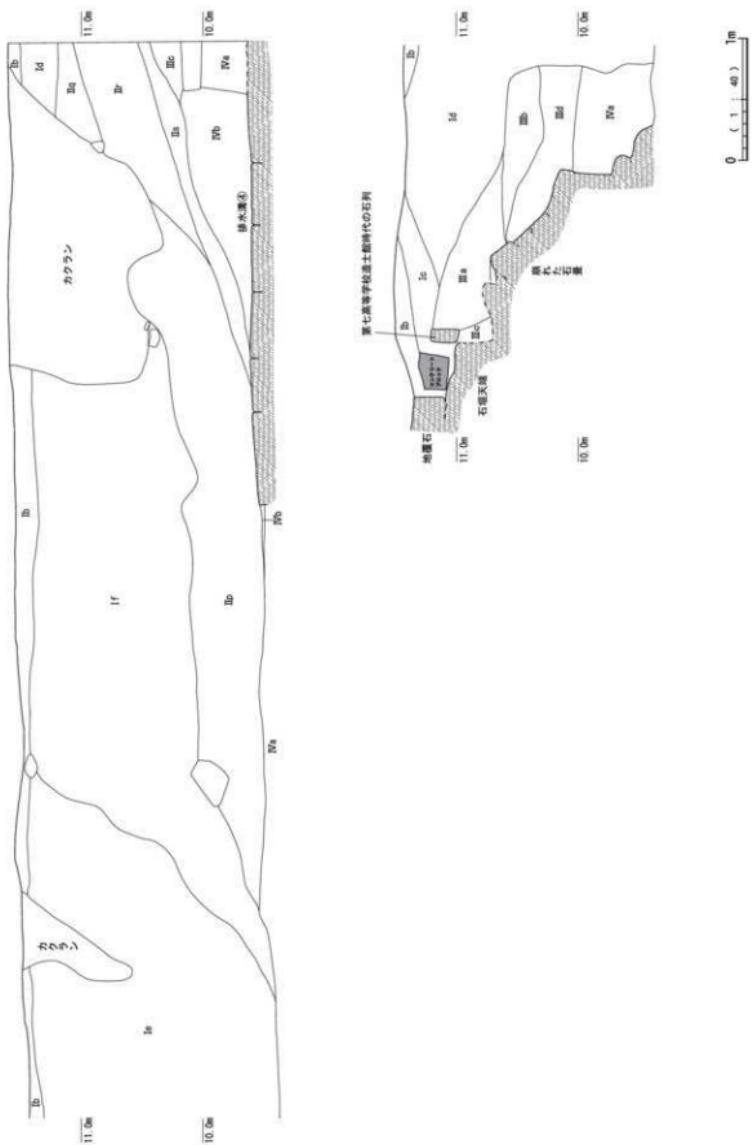
K-L-1 区の石垣天端石の上には、地覆石の内側に幅約 10 cm、長さ約 20 cm の石列が並んでいる。石垣天端を利用した排水溝であると考えられる。第七高等学校造士館のブルーは、石垣際まで迫っており、この排水溝はその排水のためのものと考えられる。

#### 出土遺物（第 80 図～94 図 254 ～ 460）

御角櫓跡の調査区では、254 ～ 460 が出土した。近世の遺構やその下層を部分的に調査しているが、大半の遺物は、近現代の攪乱層から出土している。

254 ～ 362 は陶磁器である。うち、254 ～ 263 は輸入陶磁器である。254 ～ 257 は、中国龍泉窯系青磁であ

第75図 御角遺跡調査区土層断面図（西壁、7面）



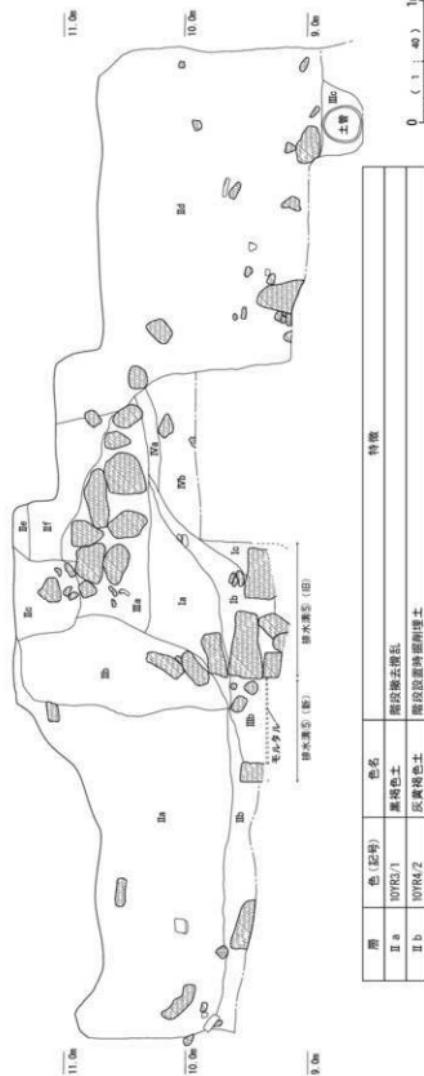
第5表 御角櫛跡西壁土層注記

層	色(記号)	色名	特徴
I c	7.SYR4/6	褐色土	5cm以下のアカホヤブロック混じりの層。植樹のための造成土
I b	北壁I bと同じ		
I d	10YR2/1	黒色土	しまりのないふかふかの層
I e	10YR3/1	黒褐色土	ややしまりのないきめの細かい砂層。人頭大～拳大の礫。コンクリートブロックが混じる。ガラス瓶、プレバーラート、瓦片出土
I f	7.SYR3/3	暗褐色土	きめの細かい砂層。人頭大～拳大の礫。コンクリートブロックが混じる。ガラス瓶、プレバーラート、瓦片出土
II p	10YR3/2	黒褐色土	ややしまった層。人頭大～拳大の礫が混じる。瓦片、ガラス製品出土
II q	10YR3/2	黒褐色土	しまりのある層。きめは細かい。5cm以下のアカホヤブロック混じる。瓦片出土
II r	7.SYR3/2	黒褐色土	しまりのある層。きめは細かい。5cm以下のアカホヤブロック混じる。瓦片出土
II s	10YR2/1	黒色土	しまりのある層。きめは細かい。5cm以下のアカホヤブロック混じる。瓦片出土
III a	10YR6/4	にぶい黄褐色土	きめの細かい砂層。5cm以下の漆喰片や瓦片が大量に混じる
III b	10YR4/3	にぶい黄褐色土	III a層とほぼ同じだが、瓦片は少ない
III c	7.SYR3/4	暗褐色土	ややしまりのない砂層。5cm以下の漆喰片、アカホヤブロックを含む
III d	10YR1.7/1	黒色土	しまりのない埴土。ガラス瓶、プラスなど医療もしくは実験道具の破片が大量に出土
IV a	10YR5/4	にぶい黄褐色土	きめの細かい砂層。拳大以下の礫。5cm以下のアカホヤブロックを含む。裏込め上面には大量の瓦片が出土
IV b	10YR5/4	にぶい黄褐色土	きめの細かい砂層。拳大以下の礫。5cm以下のアカホヤブロックを含む。排水溝面には、人頭大の礫が多く含まれる

る。254は、上田分類B類の碗である。外面は片切彫の蓮弁文をもつ。内面にも文様が彫られているが、判別できない。口縁部はやや外反する。14世紀後半～15世紀前半。255は、上田分類B類の碗である。外面はヘラ先による細線蓮弁文をもつ。256は、瓶である。頭部の一部で、外面には耳が貼り付けられる。外面には、花などの文様が彫られる。14世紀後半～16世紀前半。257は、瓶の頭部の一部である。外面は二条線と文様が彫られる。258～265は、中国景德鎮窯系青花である。258は、碗である。外面には模様、内面には口縁部下部に一条線が描かれる。清朝青花で18世紀。259は、皿である。絶釉で、豊付は釉剥ぎされる。内面見込みには文様が描かれる。外面高台内側には、同心円状に条線が刻まれる。17世紀前半。260は、碗である。内面・外面には綿目紋が描かれる日本風の物で、高台は幅広で低い。高台から高台内面は露胎。1630～1640年代。261は、小碗である。薄手。外面には蝶と草文が描かれる。口縁部は外反する。17世紀前半。262は、小碗である。口縁部は外反して、薄手。外面には野菜文が描かれる。17世紀前半。263は、小碗である。内面が丸く隆起する饅頭心碗である。内面見込みには、円の内側に虫文が描かれる。高台は内側から外側に向かって斜めに削られる。高台から高台内面は露胎。16世紀第4四半期。264は、小碗で

ある。口縁部は外反して、薄手。内面には口縁部直下の一条線と二条線の間に文様が描かれる。16世紀末～17世紀第1四半期。265は、碗である。腰が曲がらない蓮子碗である。外面は文様が描かれ、内面口縁部付近に二条線が描かれる。

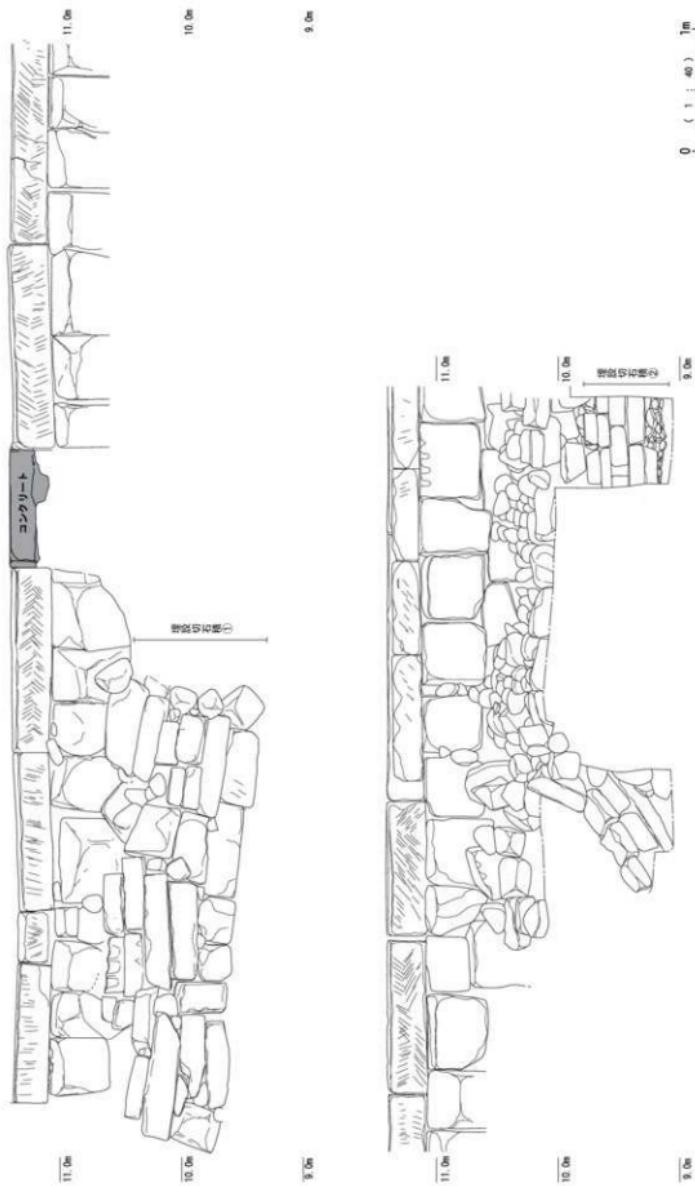
266～284は、国産磁器である。266は、肥前系磁器の碗である。高台は小さく低い。絶釉で、豊付は釉剥ぎされる。外面には唐子文が描かれる。18世紀後半。267は、肥前系磁器の碗である。有田の可能性がある。口縁部付近は釉剥ぎされており、蓋物と考えられる。文様は素描で菊文花が描かれる。1820～1860年代。268は、肥前有田の色絵磁器輪花皿である。外面には唐草文、内面には中央部に竹で空白を挟んで多色の花文などが描かれる。絶釉で、豊付は釉剥ぎされる。高台内面には、大明成化年製の一部と考えられる銘款が入る。1780年代～1820年代。269は、肥前系の磁器皿である。腰折れで多角形に立ち上がる皿の一部と考えられる。内面には、牡丹文が描かれる。絶釉で、豊付は釉剥ぎされる。1780年代～1820年代。270は、肥前の磁器端反碗である。外面は格子文、内面は見込みに銀杏線、口縁部下に二条線が描かれる。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。271は、肥前系の磁器小碗である。腰折れで型打ち成形である。外面には蓮弁文と唐草文、内面見込みには水



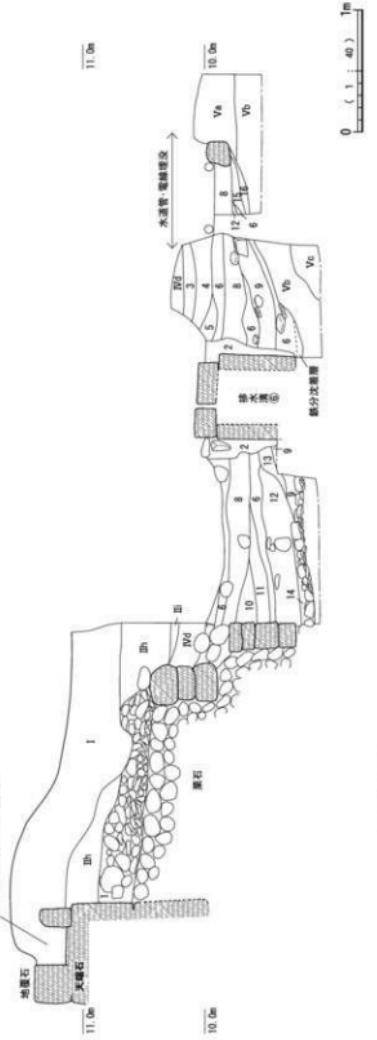
番	色(記号)	色名	特徴
II a	10YR3/1	黒褐色土 施設埋設土	施設埋設土
II b	10YR4/2	灰褐色土 施設埋設土	施設埋設土
II c	10YR3/1	黒褐色土 電灯柱基礎土	電灯柱基礎土
II d	10YR3/1	黒褐色土 電線爪痕あり	電線爪痕あり。医学部附属のフランコ等出土。
II e	10YR5/3	にじいろ黒褐色土 素土	素土
II f	10YR4/2	灰褐色土 現代遺物	現代遺物。4枚ほどが水平埋積
III a	7.5YR5/2	所褐色土 大體多く含まれる	所褐色土。大體が多く含まれる。平面でこの層が生んでいるように挙出
III b	7.5YR4/3	褐色土 1m程の層が多く含まれる	褐色土。1m程の層が多く含まれる
III c	10YR4/4	褐色土 砂質土、土壌埋設土	砂質土、土壌埋設土
排水溝(5)a	10YR4/3	にじいろ黒褐色土 を考える。	排水溝設置跡か。本来排水溝であり、蓋を設置後の埋土の可能性
排水溝(4)b	10YR4/2	灰褐色土 瓦	瓦
排水溝(4)c	10YR4/2	灰褐色土 砂質土、砂利はなくしません	砂質土、砂利はなくしません
IV a	10YR5/1	褐色土 砂質土、砂利は細かく密にしまる	砂質土、砂利は細かく密にしまる
IV b	10YR4/4	褐色土 砂質土、砂利は粗く1mm程の粒を多く含む	砂質土、砂利は粗く1mm程の粒を多く含む

第76図 御角槽跡調査区土層断面図（北壁、⑧面）

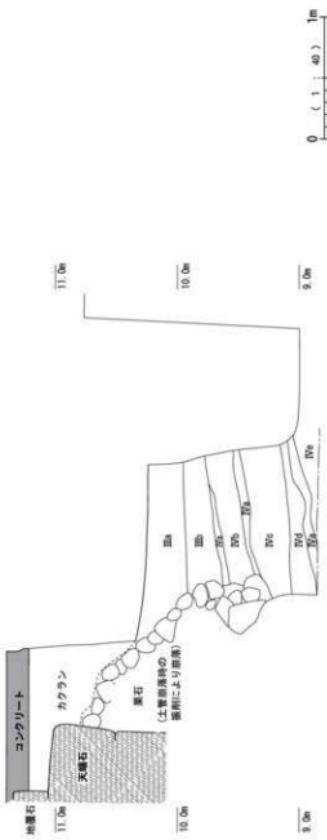
第77図 御角櫓跡土層（南壁⑨面）



西壁(⑩面)



西壁(⑪面)



第78図 御角櫓跡上段: J-1・2トレントチ土層断面図 (西壁, ⑩面) 下段: K-1土管埋設溝土層断面図 (西壁, ⑪面)

第6表 御角櫻跡 J- 1・2西壁土層注記、K- 1土管埋設溝西壁土層注記

層	色(記号)	色名	特徴
			I. II h, II i, IV d 層は北壁と同じ
排水溝⑥ 1	7.SYR4/1	褐色土	凝灰岩碎塊が多く含まれる。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 2	7.SYR4/3	褐色土	凝灰岩碎塊が含まれ、左右の土層のブロックが含まれる。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 3	7.SYR4/1	褐色土	褐色土(7.SYR4/4) 混在土。砂質が強い。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 4	7.SYR4/3	褐色土	砂質土。凝灰岩を含む。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 5	10YR4/1	褐色土	1~2 mmの礫が多く含む。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 6	10YR5/1	褐色土	砂土。弱溶結もしくは非溶結凝灰岩層(地盤か?)。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 7			凝灰岩破碎層。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 8	10YR4/3	にぶい黄褐色土	明黄色褐色風化土。白色軽石を多く含む。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 9	10YR4/3	褐色土	白色軽石を多く含む。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 10	10YR3/1	黒褐色土	明黄色褐色土を多く含む。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 11	10YR4/3	灰黃褐色土	土質は柔らかく均質。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 12	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質土。砂粒が粗く均質。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 13	10YR6/2	灰黃褐色土	砂土。砂粒は粗く均質。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 14			硬層。凝灰岩碎塊が多く、15 cm程の礫も含まれる。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 15	7.SYR3/1	黒褐色土	灰色粘質ブロックを含む。排水溝⑤埋設時の造成土
排水溝⑥ 16	7.SYR4/2	灰褐色土	若干粘性をもつ。排水溝⑤埋設時の造成土
V a	7.SYR3/3	暗褐色土	砂質土。灰色砂質(副色)を含み斑状となる。排水溝⑤埋設以前の造成土
V b	5YR3/2	暗赤褐色土	砂質土。砂粒は粗くしまりはない。排水溝⑤埋設以前の造成土
V c	10YR5/6	黄褐色土	砂土。砂粒は極粗。排水溝⑤埋設以前の造成土

層	色(記号)	色名	特徴
Ⅲ a	10YR4/4	褐色土	砂質土。砂粒が粗く5~10 cm程の礫が多く含まれる
Ⅲ b	10YR4/4	褐色土	砂質土。K-1区北壁土層Ⅲ a層と同じ
Ⅳ a	10YR5/1	褐色土	砂質土。K-1区北壁土層Ⅳ a層、J-1-2区トレンチ西壁土層排水溝⑤ 6と同じ
Ⅳ b	5YR3/1	黒褐色土	砂質土。砂粒は極粗で軽石を含む
Ⅳ c	5YR4/2	灰褐色土	砂土。砂粒は粗く均質
Ⅳ d	5YR4/2	灰褐色土	砂土。Ⅳ c層に1~2 cm程の礫が多く入る

文が描かれる。総軸で、疊付は釉剥ぎされる。高台内面には成化年製と銘款がはいる。1780~19世紀第1四半期。272は、肥前系磁器皿である。外面には唐草文、内面は蛸草文と見込みに五芒星が描かれる。高台は釉剥ぎされており、高台内面に銘款が入る。18世紀後半。273は、肥前有田の磁器鉢である。外面は唐草文、内面は花文などが描かれる。総軸で、疊付は釉剥ぎされる。1780~19世紀前半。274は、肥前系の磁器蓋である。外面は鳥文など、内面見込み周囲には、化粧土が貼られている。1820~1860年代。275は、肥前有田の磁器蓋である。外面には、中央に四方擗文、その周囲には棒の中に楼閣などの図柄を入れた物が複数描かれる。19世紀初頭~幕末。276は、肥前有田の磁器碗である。腰折れで多角形の型打ち成形である。外面に文様が描かれる。総軸で、疊付は釉剥ぎされる。18世紀末~19世紀前半。277は、肥前の磁器火入。外面には山文が描かれる。内面は口縁部を除き露胎。18世紀後半~19世紀前半。

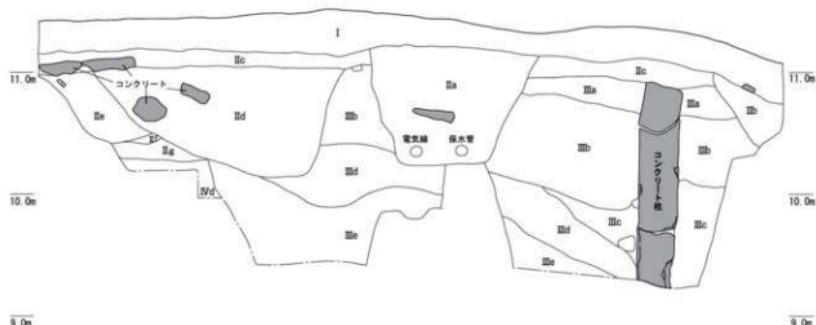
278は、肥前の磁器火入れ。外面に木などの文様が描かれる。内面は露胎である。19世紀。

279~284は薩摩で焼かれた薩摩磁器である。279は、皿である。内面には楼閣山水文が描かれる。総軸で、疊付は釉剥ぎされる。18世紀末~19世紀中頃。280は、大皿である。型打ち成形で、腰折れで口縁部に向かって外反する。外面は草文、内面見込みには牡丹文や蝶文の文様、周囲には四方擗文が描かれる。18世紀~19世紀。281は、大皿である。280と同一個体の可能性がある。上部が多角形になる腰折れの型打ち成形で、口縁部に向かって外反する。四方擗文や花文が描かれる。282は、碗である。内面は状の目釉剥ぎされ、その周囲には波文が描かれる。総軸で、疊付は釉剥ぎされる。19世紀~幕末。283は、鉢である。内面の側面のみ青磁の染付である。外面は、簡略化された鶴鹿文と雲文、内面見込みにも文様が描かれる。高台内面は蛇の目釉剥ぎされる。18世紀後半。284は、火入である。高台内面は露胎。外

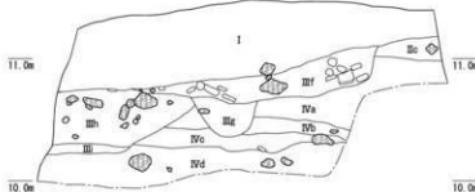
西壁(12面)

12.0m

12.0m



南壁(13面)



0 ( 1 : 40 ) 1m

層	色(記号)	色名	特徴
I	10YR2/2	黒褐色土	表土
II a	10YR5/4	にぶい黄褐色土	砂質土。
II b	7.5R5/2	灰赤色土	硬岩。島津碎石、竜ヶ石置地盤
II c	7.5YR4/2	灰褐色土	石垣側に1石抜かれた排水口ありそこへ流れている
II d	7.5YR4/3	褐色土	砂礫土。灰色砂が塊状に入る。切石座裏土坑
II e	10YR4/2	灰黃褐色土	砾多く含む
II f	10YR3/2	黒褐色土	
II g	10YR4/2	灰黃褐色土	
III a	7.5YR4/3	褐色土	
III b	7.5YR4/3	褐色土	砂礫土
III c	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質土
III d	10YR3/3	暗褐色土	ブロック状に土と砂が入る
III e	10YR4/2	灰黃褐色土	砂質土
III f	10YR3/1	黒褐色土	
III g	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質土
III h	10YR5/3	にぶい黄褐色土	
III i	7.5YR4/1	褐灰色土	砂質土
IV a	10YR4/4	褐色土	白色軽石。黄褐色縞(風化すむ)を含み砂粒の粗い砂質を多く含む
IV b	10YR5/3	にぶい黄褐色土	
IV c	10YR3/3	暗褐色土	
IV d	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ1~3cm程の白色軽石、黄褐色縞(風化すむ)を多く含む

第79図 御角櫓跡I-1・2区土層断面図（西壁12面、南壁13面）

面には文様が描かれる。19世紀。

285～303は、国産陶器である。286は、肥前系の陶器碗である。見込みに胎土目が残る。厚く高さのある高台内面には、ケズリの中心軸が残り、中心からややずれていている。16世紀末～17世紀前半。285, 287～303は、薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器のうち、堅野系のものである。そのうち、286～299は、白薩摩と呼ばれる堅野系の白色陶胎である。御角格跡では多様な器種が出土した。285は、端反碗である。胎土は白薩摩と呼ばれる白色陶胎だが、それに黒化粧土を象嵌して文様状にする。17世紀後半～18世紀前半。287は、灰色陶胎の碗である。高台は低く、高台まで縦釉。外面の高台上には、千鳥印が施される。18世紀。288は、碗である。縦釉で、疊付付近は釉剥ぎされる。高台内面には、満巻き状の沈線が施される。18世紀～19世紀。289は、碗である。高台は低い。縦釉で、疊付付近は釉剥ぎされる。18世紀～19世紀。290は、碗である。高台は高く、器壁は薄い。内面は、見込みから上面に向かって満巻き状にケズリを施す。内面見込みには、3か所の胎土目が残る。厚さのある高台内面には満巻き状の沈線が施される。18世紀～19世紀。291は、碗もしくは皿である。内面見込みには4か所の貝目が残る。縦釉で、疊付は釉剥ぎされる。292は、腰折れの型打ち成形の皿で、外面の口縁部には沈線が入る。17世紀後半以降。293は、型打ち成形の皿である。口縁部は波状になる。釉薬はただれおり、焼け損じ、もしくは被熱したものか。18世紀～19世紀。294は、型打ちの成形の碗もしくは皿か。底部から渦曲して腰折れ寸に立ち上がる。17世紀末～18世紀。295は、小杯である。内面は露胎でおり、縦釉で、疊付は釉剥ぎされる。外面には千鳥印が施される。18世紀。296は、香炉である。全面施釉される。外面底部には、形に沿って一条の沈線が掘られる。18世紀～19世紀。297は、鉢である。外面は口縁部付近に鉄軸が掛けられる。内面には明瞭な輪軸目が残る。近代のものと考えられる。298は、水注である。内面には明瞭な輪軸目が残る。18世紀～19世紀。取手の換毛製のある突起が付く。299は、香炉の脚である。獅子もしくは人面が彫られている。18世紀～19世紀。

300～302は、堅野系の宗胡録写である。300は、土瓶である。内面も施釉される。18世紀～19世紀。301は、鉢である。火鉢か。口縁部上面まで文様が描かれる。内面には口縁部付近から断面三角形状の突起が付く。突起より下部は露胎である。18世紀～19世紀。302は、鉢か。上部に孔が穿たれている。18世紀～19世紀。

303は、堅野系の三島手と呼ばれる象底陶器の茶入である。葉脈文等が描かれる。内面は露胎である。堅野系の象嵌は染付も多いが、胎土を削って白色土を埋め込んでいる。18世紀～19世紀。

304～314は、近・現代の陶磁器である。304は、肥前系の磁器大皿である。口縁部上面は波状に成形されており、茶褐色の釉薬が掛けられる。文様は型紙刷りである。内面は、中央に草花文が描かれ、その周囲は区画が分けられそれぞれ竹や松、扇状の文様がそれぞれ描かれる。縦釉で、疊付は釉剥ぎされる。305は、肥前系の磁器碗である。薩摩磁器の可能性がある。文様は型紙刷りである。高台周辺には露胎文が描かれ、口縁部に向かって菊文等が、内面には口縁部付近に文様が描かれる。縦釉で、疊付は釉剥ぎされる。306は、肥前系の磁器端反碗である。文様は手書き。内面・外面の口縁部付近には波状文、外面には文花が描かれる。高台はやや高い。縦釉だが疊付は面取りされる。307は、肥前系の磁器蓋である。薩摩磁器の可能性がある。深い青色釉で型紙刷り露胎文や草花文が描かれるが、釉薬が滲んでいる。縦釉で、疊付は釉剥ぎされる。308は、堅野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の小碗である。縦釉で、疊付は面取りされる。高台付近に赤く刻印が書かれている。309は、瀬戸美濃系の磁器工業製品蓋か。外面には草花文が描かれる。内面には、露胎部分に組合せ用のネジ溝加工が入っており、中央部に孔がある。310は、肥前系の磁器火鉢である。文様は銅板転写で外面に鳥や花文(桜など)が描かれる。明治時代～大正時代。内面は口縁部付近を除いて露胎。311・313・314は、統制食器である。311は碗、313は端反の皿、314は腰折れの小碗である。文様は二条線のみで311は外面、313・314は内面にある。311・313は高台内面に瓢箪に日陶製、313は扇とTRADE MARKと書かれている。縦釉で疊付は釉剥ぎされる。312は、石見焼系(島根県や山口県)の播鉢である。縦釉で疊付は釉剥ぎされる。器物は細かく、左回りで刻まれている。

315～359は陶器である。そのうち、315～340は薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器である。315は、南九州系の陶器碗である。苗代川系の堂平窯で焼かれた可能性がある。316は、加治木・始良系の山元窯系で焼かれたと考えられる碗である。半陶半磁の透明釉で、内面見込みに4か所の目跡が残る。被熱のため黒色化している。17世紀後半。317は、加治木・始良系の陶器碗である。縦釉で、疊付付近が釉剥ぎされる。被熱しており、釉薬はただれています。18世紀代。

318・319は、堅野系の陶器花入れか。同一個体の可能性がある。口縁部までほぼ垂直に立ち上がる。被熱しており、釉薬はただれています。318は口縁部下に穴が穿たれているが、319は穴が窓での焼成前に粘土で塞がれている。17世紀代。320は、加治木・始良系の陶器碗である。縦釉で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎ、疊付周辺も釉剥ぎされる。

321～340は、堅野系の茶入である。黒褐色または褐釉が掛けられた肩衝茶入である。外面胴部下位から底部

は露胎で底部底には糸切り痕が残る。また、肩から胴部にかけて霞がかかるように白色が浮かんでいるが、これは黒色もしくは褐色の釉薬の上に白濁釉を重ね掛けしたことによる窯変である。大半の茶入（322・336・338以外）が被熱しており、内外面の釉薬がただれています。17世紀のものである。ここでは、その一部を図化し闇一之の分類（姶良市教育委員会2003）を参考に特徴を記載する。321～329は、口縁部から肩・胴部までの破片である。321器壁が厚く、肩衝型で胴部が直線的になる（関分類I-1-①）。322は、器壁が薄く、肩衝型で胴部がわずかにカーブする（関分類II-1-②もしくは④）。成形は輥轆成形。17世紀中頃。323～328は、器壁が薄く、肩衝型である（関分類II-1）。成形は輥轆成形。17世紀中頃。329～340は底部の破片である。329・330は、付け高台かは判断できないが、器壁が厚く、底部から肩にかけて徐々に薄くなる。胴部内面にケズリ痕が入ること、胴部下位で、底部から立ち上がる部分は、ヘラ状工具で押圧したと思われる細かな平坦面が残ることから関分類I-1-①もしくは②と考えられる。初期の堅野系で冷水窯や御里窯で焼かれたか。17世紀前半～中頃。331は、器壁が薄く、外面は輥轆の回転を利用したケズリで調整し、内面はケズリ痕がみられない円筒型の茶入である（関分類II-1-1）。332～334は、器壁は厚く付け底で、胴部内面下位には、ヘラ状の工具によるケズリ痕が残る。左回転の糸切り底である。胴部下位で、底部から立ち上がる部分は、ヘラ状工具で押圧したと思われる細かな平坦面が残る（関分類I-1-①）。初期の堅野系で冷水窯や御里窯で焼かれたか。17世紀前半～中頃。334は、内面には溶けた釉薬がべったり張り付いている。335・336は、器壁が厚く付け底だが、底部は正円で広く、胴部内面下位のヘラ状の工具によるヘラ状工具で押圧したと思われる細かな平坦面はない。底部には左輥轆系切りが残る。336は、335と同様の特徴をもつが、黄褐色の釉薬を掛ける。337・339・340は、付け高台だが、器壁は薄く輥轆成形で外面は縁の回転を使用したケズリが残る。338は、器壁が薄い。関分類II類か。

341～351は、薩摩以外の陶器である。341は、中国福建省の陶器壺である。肩から口縁部に向かって窄まり、口縁部断面は如意型に曲がる。16世紀～17世紀。342～344は、唐津と呼ばれる肥前の陶器である。342は、鉄絵陶器碗である。内面～外面上の胴部まで施釉される。内面には鉄絵で文様が描かれる。1590～1610年代。343は、二彩陶器皿である。輥轆成形で外面には、ヘラ状工具によるケズリ痕が残る。17世紀後半～18世紀前半。344は、碗である。天目型の碗である。高台付近は露胎。削り出し高台で、高さは低い。被熱しており、釉薬はただれています。1590年～1610年代。345～349は、高取焼などを含む筑前と考えられる陶器である。345は、

水指か。口縁部は内面向かって折れる。外面には口縁部付近から藁灰釉が掛けられる。内面は露胎である。輥轆成形で、内面にはヘラ状工具によるケズリ痕が残る。17世紀。346は、壺もしくは甕である。内外面施釉される。頸部から胴部は垂直に立ち上がるが、頸部より上は外側に開く。口縁部上面の中央部は崖んでおり、そこに一条の黒色の線がある。本来は蓋があったか。輥轆成形で、内面にはヘラ状工具によるケズリ痕が残る。347は、壺もしくは甕である。内外面施釉される。348と同じく頸部から外側に開く器形である。17世紀。348は、茶入である。器壁は薄く、胴部は丸みを帯びる。輥轆成形で、内面にはヘラ状工具によるケズリ痕がある。外面底部には、白色土が塗った状態で焼かれている。17世紀～18世紀。349は、人吉の陶器壺もしくは甕である。厚手で、粘土紐の間は平らに成形しない。17世紀。350は、産地不明の陶器碗である。薩摩の堅野系か苗代川系の可能性がある。総釉で足付は釉剥離される。内面には5か所に貝目が残る。17世紀後半か。351は、琉球陶器の土瓶の肩である。18世紀。

352～359は、薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器のうち苗代川系の陶器である。352は、甕である。口縁部はT字形なる。19世紀。353は、擂鉢である。口縁部はくの字に曲がる折り曲げ口縁である。外面胴部には条線状の工具痕がある。17世紀後半～18世紀前半。354は、土瓶蓋である。外面のみ施釉される。上面には、重ね焼きした際の痕跡が残る。18世紀後半以降。355は、土瓶である。常平窯で焼かれたものと考えられる。注口の内側には茶漉し等の穴はない。被熱しており、釉薬はただれています。17世紀後半。356は、鉢である。口縁部は内側にやや張り出し、外側は中央部がへこむ。口縁部の上面に重ね焼きのための貝目が残る。17世紀後半～18世紀前半。357は甕である。18世紀～19世紀。358は、鉢または擂鉢である。胴部外面には条線状の工具痕が残る。19世紀。359は、片口の擂鉢である。薄手で小型。19世紀。

360～362は、ドイツ連邦共和国のラインラウト地方の塩釉炻器瓶である。肩部に把手をもち、底部に糸切り痕が残る焼き締め炻器である。いずれも胎土が灰色できめが細かい。外面には薄く赤褐色～褐色の薄い釉薬が掛けられる。内面調整は、引き上げ痕がみられるなど粗雑である。口縁部には、コルク等で蓋をしていましたと考えられる。360は底部である。内面は露胎。まず円盤状の底部を作り、その周間に粘土を貼って引き上げて成形している。361は、胴部～口縁部である。被熱しており、釉薬はただれています。内面は露胎。362は、ほぼ完形の瓶である。内面も施釉されている。外面は、釉薬として用いられた塩の粒が文様状に見える。胴部には穴が穿たれている。胴部の上部には胴部には商標と考えられ



第 80 図 御角櫓跡 出土遺物 1



第 81 図 御角櫓跡 出土遺物 2



304



305



306



310



307



308



309



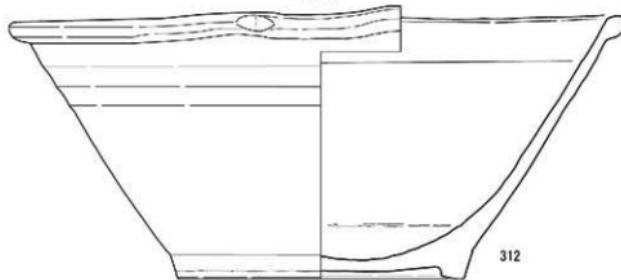
311



313



314



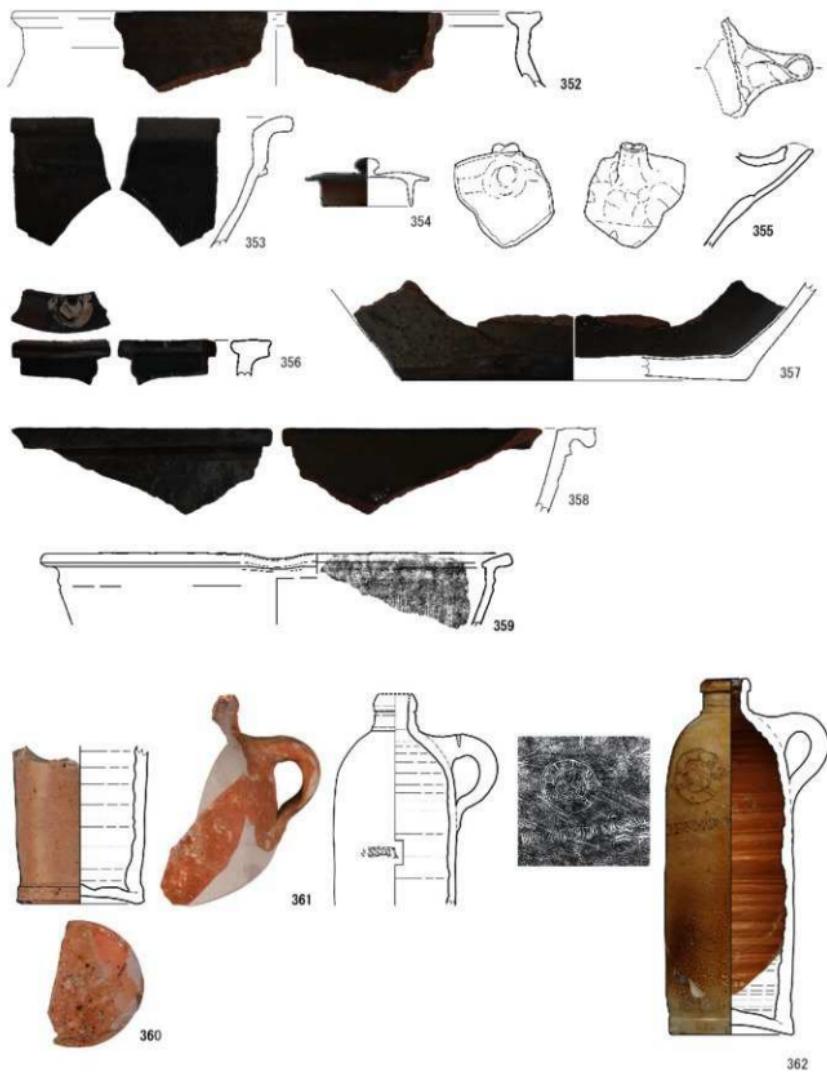
312

0  
 (1 3) 10cm  
 304~314

第 82 図 御角櫓跡 出土遺物 3



第83図 御角槽跡 出土遺物4



0 (1 3) 10cm  
 352~362

第 84 図 御角檜跡 出土遺物 5

るマークがあり、円の中に、中心に犬、その周囲には、SELTZER の文字が刻まれる。SELTZER は、元々ドイツ連邦共和国のヘッセン州にあるリンブルグ・ヴァイブルグ地区のニーダーセルターズで産出され、17世紀から世界各地に輸出された鉛泉水のことを差し、現在でもドイツ語では炭酸水・ミネラルウォーターの一般的な名称の一つとしても使用されている。その下には、「HERZOGTHUM NASSAU」刻まれる。HERZOGTHUM NASSAU は、ドイツ連邦の加盟国であったナッサウ公国（現在のドイツ連邦共和国ヘッセン州とラインラウトブルツ州の一部）のことである。1806-1866 年に存続した公国である。ナッサウ公国は、ニーダーセルターズを領土とし、この鉛泉水を炻器瓶につめて輸出していた、この瓶は、その輸出されたドイツの鉛泉水の瓶である。19世紀第1～第3四半期。

363～446 は瓦である。363～381 は、軒丸瓦・鳥伏間瓦である。363 は、連珠三巴文鳥伏間瓦（A-014）である。大型で、厚く上下が下に続いている。連珠は少なく立体的。巴は文様のわりに小型で、あまり立体的にならない。364 は、陶器瓦の連珠三巴文軒丸瓦（A-029）である。陶器瓦としては、やや大型で、瓦当周縁は広く、瓦当は薄い。連珠は小型で、巴紋は長く巴文同士が繋がる。同様の文様は、苗代川系の堂平窓跡では出土していないことから、田ノ浦窓で製作された可能性がある。365 は、連珠三巴文鳥伏間瓦（A-067）である。小型で、363 のように上下両方から下段に続いておらず、上部のみ瓦当上端のやや下から下部に続いている。366 は、連珠三巴文軒丸瓦（A-021）である。連珠は小さく巴は先端がやや尖っており長い。瓦当周縁はやや広い。瓦当裏側は、周縁に沿って強くナデられており、その部分が一段低くなっている。胎土は灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。367 は、連珠三巴文鳥伏間瓦（A-022）である。焼成はやや良好。瓦当文より上の周縁は広く、裏側は、瓦当上端よりやや下側と瓦当下端から下に続く。368 は、連珠三巴文軒丸瓦（A-029）である。連珠は小さく巴は先端や尖っており長い。瓦当周縁はやや広い。瓦当裏側は、周縁に沿って強くナデられており、その部分が一段低くなっている。胎土は灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。369 は、連珠三巴文軒丸瓦（A-058）である。瓦当は厚く、幅の割に重い。瓦当は連珠・巴も立体的で文様区表面には雲母が目立つ。370 は、連珠三巴文軒丸瓦（A-032）である。非常に大型で瓦当も厚い。周縁の内側の一部には、工具による条線状の調整痕が残る。371 は、連珠三巴文軒丸瓦（A-066）である。胎土は灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。他の長崎瓦と比較すると、巴の頭は尖つておらず、巴同士の間隔は開いている。瓦当もやや狭く、

瓦当裏面の周縁も強くナデられているが、一段低くまではなっていない。372～374 は、A 種の連珠三巴文軒丸瓦だが、型式不明のものである。372 は、小型だが周縁が広い。373 は、胎土が灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。374 は、17世紀代の古瓦である。小型で瓦当は薄く、表面にはカンラン石が多くみられる。薩摩以外で製作された可能性がある。375 は、牡丹紋鳥伏間瓦（B-016）である。大型で、厚手。文様区上部の周縁は広い。瓦当裏側の上端からやや下から下に繋がる。376 は、牡丹紋軒丸瓦（B-012 と似るが未分類）である。大型で、瓦当裏面は調整をきれいにナデ消しており、丁寧な作りである。377 は、牡丹紋軒丸瓦（B-007）である。大型でやや厚手。瓦当裏面は調整をきれいにナデ消しており、丁寧な作りである。378 は、牡丹紋軒丸瓦（B-015）である。瓦当の周縁は狭い。瓦当裏面は調整をきれいにナデ消しており、丁寧な作りである。丸部から瓦当にかけては上に反る。凹面には、横方向の条線状の調整痕がある。379 は、牡丹紋軒丸瓦（B-001）である。大型で、やや厚手。瓦当裏面は調整をきれいにナデ消しており、丁寧な作りである。欠損している瓦当と丸部との接合部では、接合のための細かいカキメがみられる。380 は、その他の軒丸瓦（C-015）である。薩摩以外で製作された可能性がある。381 は、その他の軒丸瓦（C-009）である。文様は、十字の端部が左右に開いて三つ叉になる連珠花十字紋である。十字の間に連珠が4つ入る。花十字紋の文様は複数あるが、鹿児島白二ノ丸跡G地点など、鹿児島県内の出土例は全てこの文様である。瓦当周縁はやや広い。瓦当裏側は、周縁に沿って強くナデされており、その部分が一段低くなっている。胎土は灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。

382～415 は、軒平瓦または軒棟瓦で一部袖瓦や谷瓦が含まれる。383～400、408～412 は、瓦当は額貼付けで、401～407 までが瓦當貼付けである。382 は、大坂式軒谷瓦（A-005）である。寄棟屋根や入母屋屋根の四隅などに用いられる谷瓦のうち、軒先のものである。瓦当上端は面取りされる。瓦当周縁は広い。焼成は良好。383 は、大坂式軒袖瓦（A-013）である。切妻屋根の建物の四隅に葺かれる袖瓦のうち、軒先のものである。瓦当上端、瓦当裏側下端は面取りされる。瓦当周縁部は広い。384 は、大坂式軒棟瓦（A-047）である。瓦当上端と文様区上面は面取りされる。焼成は非常に良好。表面には雲母が目立つ。胎土はやや灰色が強く、大坂で製作された可能性がある。385 は、大坂式軒平瓦（A-046）である。瓦当上面は幅広に面取りされる。凹面周縁は面取りされ、縦方向のケズリの痕が残る。386 は、大坂式軒棟瓦（A-048）である。瓦当上端は面取りされる。焼成は良好。凸面には、横方向のナデ調整が残る。387 は、

大坂式軒桟瓦（A-061）である。瓦当上端は面取りされる。焼成は良好。瓦当の周縁部は狭い。瓦当の裏面は直線的である。388は、大坂式軒桟瓦（A-062）である。瓦当正面は面取りされる。瓦当の左右周縁は広い。瓦当の裏面は直線的。389は、大坂式軒桟瓦（A-065）である。瓦当上端は面取りされる。被熱しており、橙褐色に変色している。390は、大坂式軒桟瓦（A-051）である。瓦当上端は面取りされる。瓦当の左右周縁は広く、右周縁に四角に記号の刻印（刻印084）がある。瓦当右上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ（江戸切り）、凹面周縁も面取りされる。391は、鹿児島式軒平瓦である。瓦当上端は面取りされる。瓦当右周縁に丸に丸の刻印（刻印039-1）がある。被熱しており、橙褐色に変色している。392・393は、大坂式軒桟瓦（B-015）である。瓦当上端は面取りされる。392は、瓦当右上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ（江戸切り）、凹面の周縁も面取りされる。瓦当右周縁には、丸に丸の刻印（039-2）がある。393は、長さ・幅の全体がわかる資料である。尻側には、2か所に直径1.5cmの釘穴が穿たれる。394・395は、鹿児島式軒桟瓦（B-017）である。瓦当上端は面取りされる。瓦当左右周縁は広い。瓦当右上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ（江戸切り）、凹面の周縁も面取りされる。396は、鹿児島式軒桟瓦（B-020）である。瓦当上端はわずかに面取りされる。焼成は良好。397は、鹿児島式軒桟瓦（B-026）である。瓦当上端は面取りされる。398は、小型の鹿児島式軒桟瓦（B-024）である。瓦当上端は面取りされる。瓦当左右周縁は広い。瓦当右上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ（江戸切り）、凹面の周縁も面取りされる。尻は、直径1.5cmの釘穴が穿たれる。凹面の瓦当付近を除いて被熱しており、被熱部分は橙褐色に変色し、凸面は変色していない物の炭化物が付着している。399は、鹿児島式軒桟瓦（B-018）である。瓦当上端は面取りされる。瓦当左右周縁は広い。瓦当右上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ（江戸切り）、凹面の周縁も面取りされる。400は、鹿児島式軒桟瓦（B-019）である。凹面の周縁は面取りされる。401は、大坂式の変形の軒平瓦（C-004）である。大型。瓦当上端は面取りされる。瓦当は薄く、瓦当裏側は直線的に立ち上がる。凹面周縁は面取りされる。404は、大坂式の変形の軒平瓦（C-005）である。C種の中では小型である。瓦当上端は面取りされる。焼成は良好。405・407は、大坂式の変形の軒平瓦（C-007）である。大型で文様も大きい。瓦当上端は面取りされる。焼成は良好。406は、大坂式の変形の軒平瓦（C-008）である。瓦当上端は面

取りされる。瓦当は薄く、瓦当裏側は直線的に立ち上がる。凹面周縁は面取りされる。408は、その他の軒平瓦（D-002）である。大型で瓦当は直線的で厚い。瓦当上端は面取りされる。瓦当周縁は広い。焼成は良好。409は、その他の軒平瓦（D-003）である。瓦当上端・瓦当裏側下端は面取りされる。瓦当の左右周縁は広い。胎土は灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。410は、その他の軒平瓦（D-005）である。瓦当上端・瓦当裏側下端は面取りされる。瓦当の左右周縁は広い。胎土は灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。

411は、その他の軒平瓦（D-005）である。小型で瓦当は薄い。瓦当上端・瓦当裏側下端は面取りされる。瓦当の左右周縁は広い。胎土は長崎瓦と同じ灰白色で表面には雲母が目立つが、色調はやや暗い。同范と思われる瓦当型式が熊本県天草郡苓北町の富岡城跡で出土しており、天草で製作されたと考えられる。412は、その他の軒桟瓦（D-009）である。瓦当正面は面取りされる。胎土は暗紅褐色であり、薩摩以外で製作された可能性がある。

413は、小菊瓦（K-02）である。瓦当からまっすぐ尻に伸びる。凹面には布袋痕が残る。凸面には縱方向のケズリ痕が残る。414は、小菊瓦（K-01）である。瓦当肩尻に向かって三角形に伸びる。415は、小菊瓦（K-17）である。

416は、丸瓦（丸瓦A）である。薄手。凹面には布袋痕が残る。玉縁と玉縁との接合部には、強いヨコナデの痕が残り、それより頭側には縱方向のケズリ痕が残る。417は、丸瓦（丸瓦C）である。凹面には布袋痕が残る。玉縁と玉縁との接合部には、強いヨコナデの痕が残り、それより頭側には縱方向のケズリ痕が残る。418は、丸瓦（丸瓦A）である。大型で厚い。凹面に布袋痕はなく、横方向に条線状の調整痕が残り、調整は粗い。凸面は、ケズリ痕などがナデ消されており、丁寧に仕上げられている。

419・420は、刻畫瓦である。419は、海鼠瓦である。「～作」と刻書がある。瓦職人または瓦葺職人の名前か。420は、平瓦である。凹面の周縁は面取りされる。横方向の痕が残る。凸面も周縁は面取りされ。中央には「八左衛門」の刻書がある。瓦職人または瓦葺職人の名前か。

421～427は、平瓦・桟瓦・袖瓦である。421は、平瓦（平瓦D）である。大型で、厚手。凹面瓦当周縁は面取りされる。大型建物に葺かれたと考えられる。尻側に隅丸方に太左衛門の刻印（刻印026-6）がある。422は、平瓦（平瓦E）である。大型だが、薄手。凹面周縁は面取りされる。凸面には、横方向の条線状の調整痕が残る。被熱しており、橙褐色に変色している。423は、平瓦（平

瓦 D) である。大型で厚手。凹面の周縁は面取りされる。頭側に漆喰が残っている。424 は、平瓦(平瓦 F または G)である。小型で薄手。凹面の周縁は面取りされる。胎土は灰褐色で色めが細かい。薩摩以外で製作された可能性がある。425 は、桟瓦である。頭側面に長の刻印(刻印 059)の刻印の下半分がある。瓦当周縁は面取りされる。凹面の左右には、瓦を葺いた際の漆喰が残る。凹面は頭周縁に縱方向のナデ、凸面には横方向のナデの痕が残る。426 は、袖瓦である。凹面は面取りされる。袖重ねは貼付けで、接合部分には強いナデの痕が残る。427 は、桟瓦である瓦当周縁は面取りされる。凹面・凸面に横方向のナデ痕が残る。丁寧に成形される。胎土が灰褐色で、黒色粒子が入る。薩摩以外で製作された可能性がある。

428 ~ 433 は、堀瓦・海鼠瓦である。428 は、欠損部分に接合のためのカキメがみられることから、堀瓦と考えられる。大型で厚手。尻側には、直径 2cm の釘穴が焼成前に穿たれる。429 ~ 431 は、海鼠瓦である。全て隅角部分に焼成前に釘穴が穿たれている。釘穴は上面が直径 3cm で、裏側は 1.5cm と狭くなる。全て被熱しており、赤へ橙褐色に変色している。裏面には、文様状に 3 ~ 4 条のカキメが残る。元々滑り止めにためのカキメと考えられるが、文様のように施されている。432 は、堀瓦である。大型で厚手。上面の周縁は面取りされる。右側縁には釘穴が焼成前に 2 か所穿たれており、中には釘が残っている。433 は、堀瓦である。堀瓦の中では小型である。

434 ~ 437 は、陶器瓦・朝鮮系瓦である。434・435 は、陶器瓦の丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法で、凹面には、粘土紐を積み上げた部分に強いヨコナデ調整が残る。434 の凹面は袖尻ハート型に釉薬が 2 条流し掛けされており、435 もそれが垂れたものがかかっている。434 は、堂平窓跡では確認されていない、丸に一の刻印(刻印 089-1)がある。どちらも田ノ浦窓系の釉薬瓦と考えられる。435 は被熱しており、釉薬がただれています。436・437 は、陶器瓦の平瓦である。437 は、凹面に袖尻ハート型に釉薬が二条掛けられており、436 も袖尻はわからないが、それが垂れたもので、床にたまつたためか頭側面にも釉薬がみられる。どちらも田ノ浦窓系のものと考えられる。凹面周縁は面取りされる。436 は、凹面に周辺は横方向でそれ以外は縱方向の刷毛状の工具痕が残り、凸面には、横方向の条線状の工具痕が残る。437 は被熱しており、釉薬がただれています。438 は、朝鮮系瓦の丸瓦である。凸面には、不定方向のタタキが文様状になり、工具によって複数の平坦な面ができる。凹面には、布袋痕が残る。

439 ~ 446 は、鬼瓦・鬼板瓦である。439 は、鰐瓦か。外側には、沈線が交差して刻まれる。鱗を表現か。440 は、鬼板瓦である。牡丹紋が貼付けられる。441 は、鬼板瓦

である。外面に貼られた文様は、鬼などの眉毛や花などを表現か。442 は、石製の鬼板瓦である。組合式で、雲などの文様が表現されている。背面にはセメントが張り付いており、近代のもの、もしくは近代に再利用されたものか。443 は、鬼板瓦である。文様が線刻で表現されている。444 は、鬼瓦である。直径 2cm の釘穴が焼成前に穿たれている。445 は、鬼面の鬼瓦である。吽形の鬼で、頭には 3 本の角をもつ。通常の鬼瓦よりも南九州に多い神社などの面に近い面相である。上面には直径約 4.5cm の穴が 2 か所穿たれており、角などを差し込んでいた可能性と、釘穴として利用し屋根に固定したかのいずれかであろう。裏側は板状になっており、その中は空洞である。446 は、鬼面の鬼瓦である。阿形の鬼瓦で、大きな歯をもつ。板状瓦に口等を貼り付け鬼面側を作り、裏面側には中央の把手と外枠に合わせて板状に粘土を貼っている。軽量化のためと考えられる。口には漆喰が詰まっている。面相が見えない。壊れた後、何らかの形で再利用したものか。

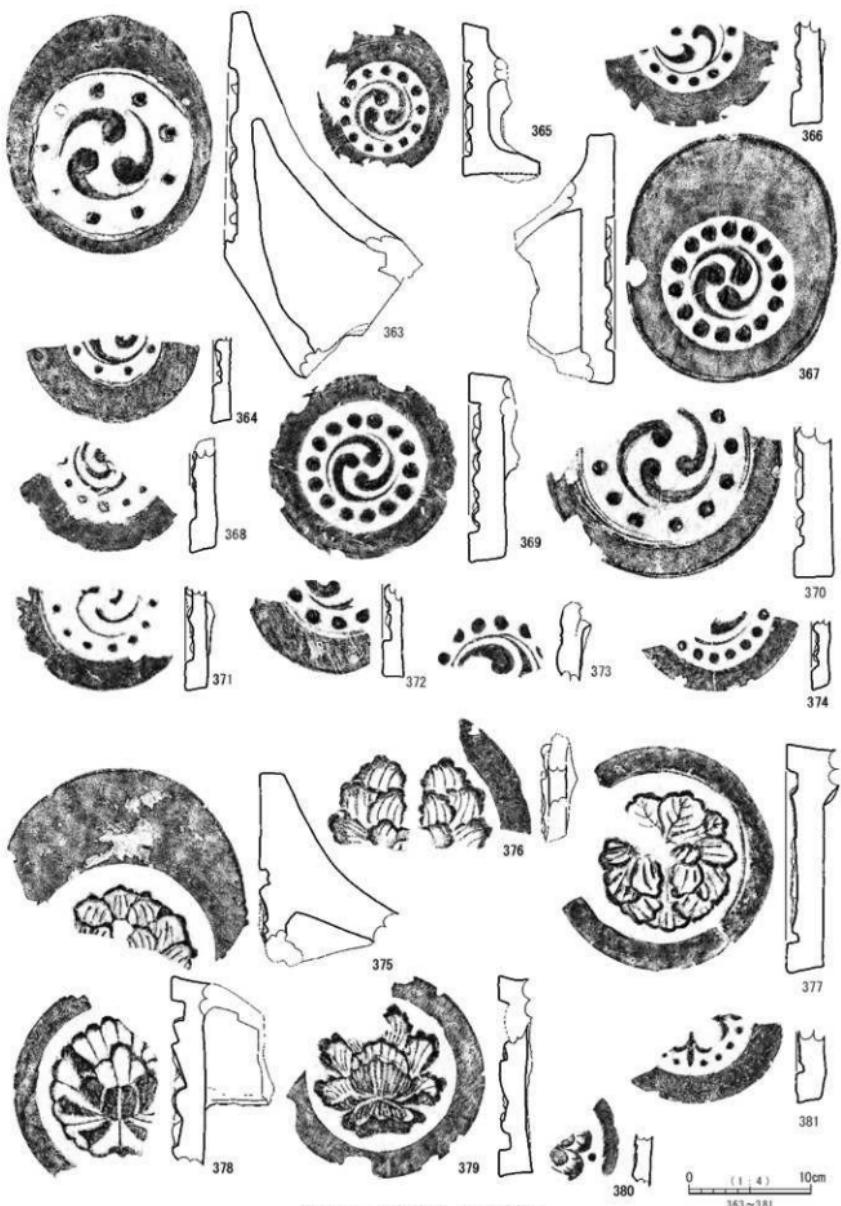
447 ~ 449 は、土製品で、450 は石製品である。447 は、輪の羽口である。熱を受けて赤褐色に変色している。中央には 2cm ~ 2.5cm の穴が穿たれる。448 は、鉢である。植木鉢か。底部に直径 1.8cm の穴が焼成前に穿たれていることから、底部に糸切り痕、内面・外面上にも横方向のナデ調整の痕が明瞭に残る。外表面は、底部を除き赤色顔料が塗られている。449 は、土鍤である。450 は、不明石製品である。表面は面取りされ、多角柱に成。頂部は丸く仕上げられている。

451 ~ 457 は、金属製品である。451 は、銅鏡である。小型で周縁がより減った新寛永通寶である。私鑄錢か。452 は、銅製錫か。五芒星が浮き彫りされる。453・454 は銅製キセルである。454 は木の柄と組み合わせる。455 は、銅製鍵または飾り金具の一部か。456 は、鉄製の飾り金具の一部か。457 は、エンフィールド銃の銃弾である。内部は台形の空洞があり、外側には螺旋状の条痕はない。

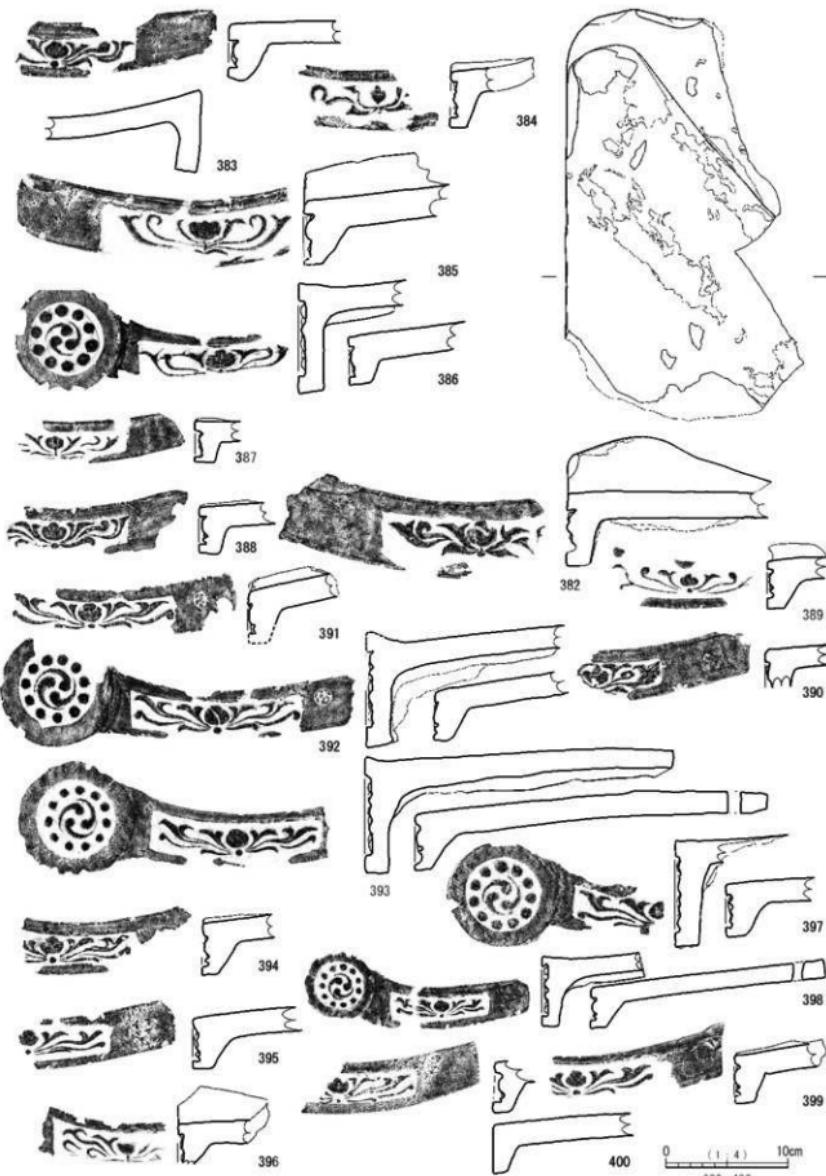
458 は、歯ブラシの柄である。穴には銅製のリングが付属している。459 は、獸骨である。イノシシの脚ではないかと考えられる。鹿兒島城跡では、獸骨が一定數出土しており、多くはイノシシである。460 は、三角フラスコである。首のところにヤタガラスのマークと「ヤタガラスナカ」の刻印がある。詳細については不明。

## 小結

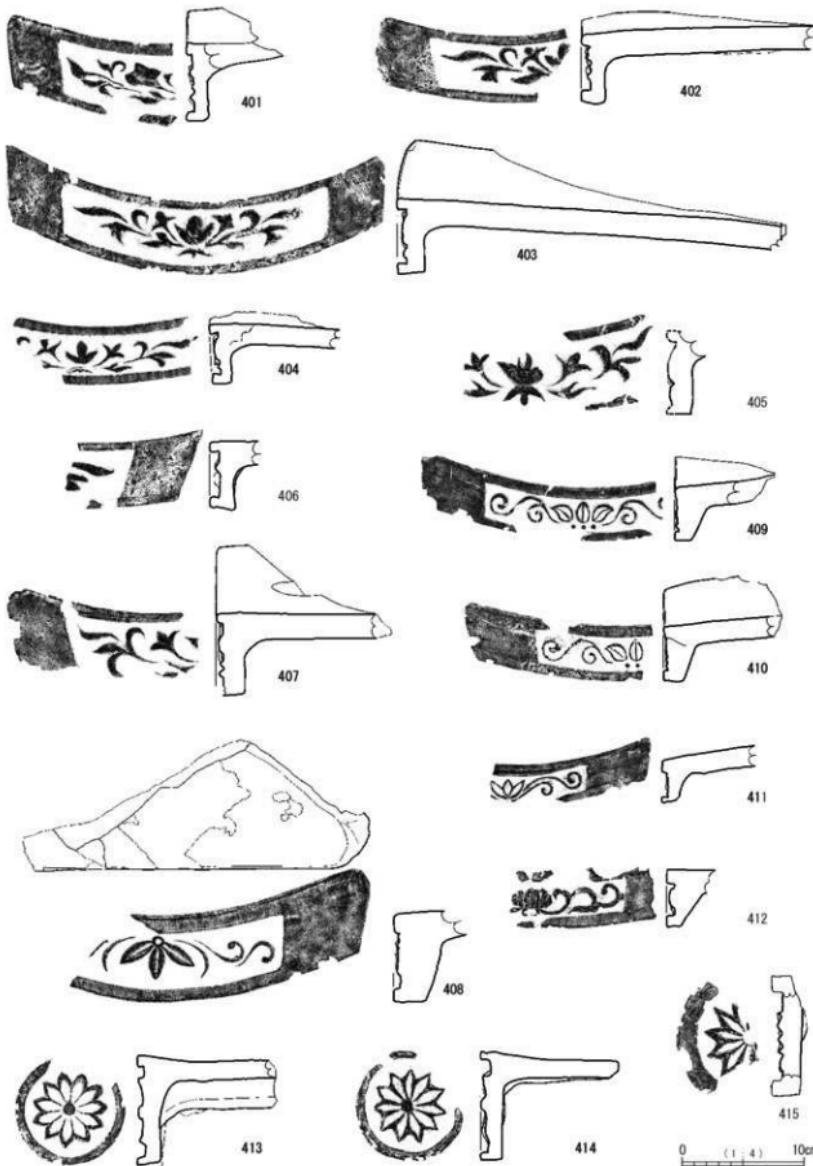
御角櫓は、御兵具所跡と同じく、石垣と一体となった櫓で、基礎石列の周囲には漆喰床である犬走りがあり、その周囲には排水溝が巡らされていることが確認された。この犬走り及び雨落溝である排水溝①を含めると、御角櫓の規模は、南北約 21.6m、東西約 7.2m である。



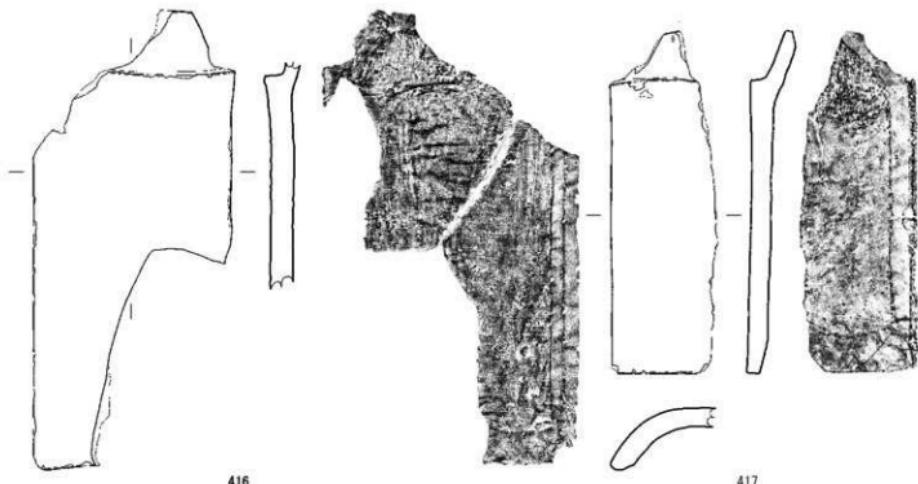
第 85 図 御角櫛跡 出土遺物 6



第 86 図 御角檜跡 出土遺物 7

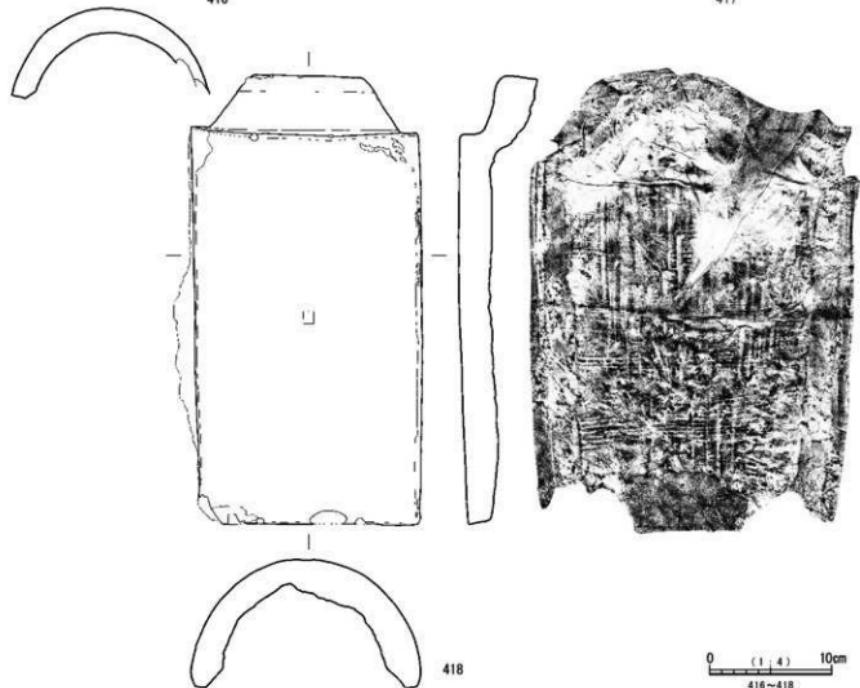


第 87 図 御角檻跡 出土遺物 8



416

417



418

0  
(1 4)  
10cm  
416~418

第 88 図 御角櫓跡 出土遺物 9